

敬であります。

【十四】言行一致を守つても疑はれ、まじめにやつても悪く言はれる。

【十五】益州の州知事となつた。

【十六】地に残された利益がある。

【十七】徳の備つた者は必ずよいことを言ふ。

【十八】天下のものが困り、貧乏した。

【十九】年寄つた母や幼い弟を將軍に頼んだ。

【二十】溪は瀧水の北にある。

【二十一】八月十五夜に月を眺め賞する。

【二十二】政府ではその老病で戦にたへられないのを見てその職を免じた。

【二十三】天下の人々が利慾を目的として交を結ぶ。

【二十四】今の自分の考へが正しく、これ迄の考の正しくないことを感じる。

【二十五】何もなすことなく生き存へることを心の中に願ふ。

【二十六】心の徳の低いものは、道理も解らず、利害好

悪のために好嫌して、一部分の人とばかり親しみ

親むべき人にもひろく親むことをしない。

【二十七】必尊いと限らない。

【二十八】政治をとる立派な人物が死ねば従つてその政

治も衰へる。

【二十九】樊噲は肉屋の小僧である。

【三十】大國と大國との間にある。

【三十一】人に知れないやうに背負つて逃げた。

【三十二】やぶれた蹠靴を棄て、珠玉を得たやうなものである。

【三十三】天下の人々よりも一步先に天下の人々のために心配する。

【三十四】博く書を讀み記憶力の強い人である。

【三十五】賢い人を尊敬し、はたらきのある人を用ゐる

【三十六】政治をとる者が皆無慾ではちを知つて居る。

【三十七】多勢の人々に邪冤せられ悪く言はれて自分の

考を行ふことが出来ない。

【三十八】どうして之を知ることが出来ようか知ることが

出来ない。

【三十九】義に勇むことは全軍第一であつた。

【四十】臣下の分際として君をなきものにした。それで

心の徳が修まつて居ると謂へようか、修つて居るとは謂へない。

【四十一】蚩尤が金で武器をつくつた。

【四十二】これに父に事へるやうに事へる。

【四十三】上手に天下を治める君は大名達の心を推測る

【四十四】大風が俄に起つた。

【四十五】やすらかにして居る暇がない。

【四十六】夏后氏の世には黒色を尊んだ。

【四十七】無理にことはらない。

【四十八】月の形は白い盃のやうに缺けた所なく天の東

方の上つた。

【四十九】王安石は外面邪氣のない様子を示して居るが

腹の中には人に知られぬやうに上手に人を詐る心

をもつて居る。

【五十】どうして飲んで酒を飲まうか飲んで飲まない。

【五十一】御自分の尊い御身分をお任せ下すつて、私を

三度もあばら屋にお訪ね下さいました。

【五十二】枝の方が幹よりも大きい。

【五十三】儒教の經典から得た政治のはたらきを尊び之を身に修め、心の徳の修つた人に親み近づく。

【五十四】賢人の著書を傳といふのである。

【五十五】勉強して人の蹈むべき人を蹈む。

【五十六】まして鬼神に於ては尙更のことである。

【五十七】漢の高祖が楚を取るのには道に落ちたものを拾ふやうに容易くあつた。

【五十八】年がよつて病身になつたといふ理由で辭職を

願つた。

【五十九】唐突でこれに對する手段がなかつた。

【六十】之は心の徳を修める方法である。

【六十一】立派な名譽とその名譽に對する實際とは伴ひにくいものである。

【六十二】之を求めて居るのか、或は又反對に之を與へようとして居るのであるか。

【六十三】その性質が片意地で高ぶつて居る。

【六十四】柳下惠と東方朔は廣く道理に精通した人である。

【六十五】國中が清く明らかに曇なく治まつた。

【六十六】このやうな譯で口さきの上手なものたに、むのである。

【六十七】謙は性質がまめやかで正直であり、辯舌が上手であつた。

【六十八】至つて正しい言葉は人の感情を害ふ。

【六十九】秦は諸大名の山東三十餘郡の地を併せ有して

居る。

【七十】必まのあたりでそしる。

2月

註釋

- 齊師……齊の軍情である。
- 疽……深い腫物
- 不旋踵……退かずに
- 死敵……敵中で討死した。
- 矣……強く言ひきるとき又は終るときにつける言葉。此處の場合は後者の方。

十八史略

問題

【一】有衛人吳起者。初仕魯。欲使起擊齊。而起娶齊女。疑之。起殺妻以求將。大破齊師。或曰、起殘忍薄行人也。起恐得罪、歸魏。文侯以為將。拔秦五城。起與士卒、同衣食。卒有病疽。起吮之。卒母聞而哭曰、往年吳公吮其父、不旋踵死敵。今又吮其子。妾不知其死所矣。

返點附本文

有、衛人吳起者。初仕魯。欲使起擊齊。起娶齊女。疑之。起殺妻以求將。大破齊師。或曰、起殘忍薄行人也。起恐得罪、歸魏。文侯以為將。拔秦五城。起與士卒、同衣食。卒有病疽。

起吮之、卒母聞之哭曰、往年吳公吮其父、不旋踵死敵。今又吮其子。妾不知其死所矣。

讀方 衛人吳起といふものあり。初魯に仕ふ。起をして齊を撃たしめんと欲す。而して起、齊の女を娶る。之を疑ふ。起、その妻を殺して以つて將たらんことを求め。大に齊の師を破る。或ひと曰く、起は殘忍酷薄の人なりと。起、罪を得んことを恐れ。魏に歸る。文侯以て將となし、秦の五城を抜く。起、士卒と衣食を同じくす。卒に疽を病むものあり。起、之を吮ふ。卒の母聞いて哭して曰く。往年吳公その父を吮ふ。踵を旋さずして敵に死す。今又その子を吮ふ。妾その死所を知らざるなりと。

解答 衛の人に吳起といふ人があつた。初魯の國に仕へて居たが、魯が齊と戦争をはじめて

吳起に齊を攻めさせようとした。所が吳起は齊の國の女を妻として居たので、魯の人々に
吳起が二心をもちはしないかと疑つた。吳起はその疑を解くためにその妻を殺して、齊を
征伐する大將にして貰ひたいと願つて、齊の軍を散々にうち敗つた。或人が、吳起は酷た
らしい薄情な人であるといつた。吳起は人から悪くいはれて刑罰を受けるやうになりはし
ないかと心配し、魏の國に行つてしまつた。魏の文公は吳起を大將として採用し秦の國を
攻め秦の五の城を陥れた。吳起は、部下の將卒と同じものを着、同じものを食べて居た、
兵卒の中に悪性の腫物が出来て苦んで居るものがあつた。吳起はその腫物のうみを吮ひ出
してやつた。兵卒の母は之を聞いて泣いて「先年、吳公があの子の父である私の夫の腫物
のうみを吮ひ出して下さつた所が、私の夫はその恩に感謝してすぐその足で敵の中に進ん
で戦死してしまつた。今又吳公が私の子の悪性の腫物のうみに口をつけて下さつた。私の
子も父と同じやうに感謝して敵中に進んで戦死して、私はその死場所も知らないやうにな
るであらう」となげいた。

應用 (一)子曰、加我數年、五十以學易、可以無大過矣。

問題

目

○令……法令。

○輒……すぐと。

○……入盛する

○……に處すること

○……おもひ役

○……法令

○……を守りやうにな

つた。

徒

【二】令既貝未布、立三丈之木於國都市南門、募民、有能徙之者、予
十金。民怪之、莫敢徙。復曰。能徙者予五十金。有一人、徙之。輒
予五十金。乃下令。太子犯法。鞅曰、法之不行、自上犯之。君嗣不可
施刑。刑其傅公子虔、黥其師公孫賈。國人皆趨令。

返點附本文

令既貝未布。立三丈之木於國都市南門、募民有能徙之者、予
十金。民怪之、莫敢徙。復曰、能徙者予五十金。有一人、徙之。
輒予五十金。乃下令。太子犯法。鞅曰、法之不行、自上犯之。
君嗣不可施刑。刑其傅公子虔、黥其師公孫賈。秦人皆趨令。
讀方 令既にそなはつて未布かず。三丈の木を國都市の南門に立て、
民を募る。能く之を徙す者あらば、十金をあたへんと、民之を怪み

敢て徒すなし。また曰く、よく之を徒す者には五十金を予へんと。一人あり。之を徒す。すなはち五十金をあたふ。乃ち令を下す。太子法を犯す。鞅曰く性の行れざる上より之を犯せばなり。君の嗣は刑を施す可からずと。その傅公子虔を刑し、その師公孫賈を黥す。秦人皆令に趨く。

解答 法令が出来たけれども未だ發帝されなかつた。三丈の長さの材木を都の南の門に立て、人民を募集し、この材木を他所に持つて行くものがあれば十金を與へようと言つたところ、人民は不思議に思つて誰も材木をもつて行くものがなかつた。またこの材木を他所にもつて行けば五十金やらうと言つた所が、人民中の一人が、これを他所に持つて行つたので直ぐに五十金を政府から與へた。このやうに政府が言行一致の手本を示して後、法令を發布した。所が太子が法律を犯した、商鞅は「法律が實行されないのは上の者が法律に違犯するからである。しかし君の世嗣を罰することは出来ない」といつて、太子の傅役の公子虔を刑罰に處し、太子の先生の公孫賈に罰をして入獄を入れた。これを見て秦の國人

阻、阻。

- 度……考へ慮る
- 阻……險阻な所
- 阻……せまい。
- 阻……險阻な所
- 阻……多くの
- 阻……火を
- 阻……照して見
- 阻……自殺。
- 阻……小僧。

は皆法令を守るやうになつた。

應用 威公在焉。而曰天下不復有管仲者。吾未信也。

問 題

陵道

【三】 曠度其行、暴當至馬陵。馬道隘而旁多阻、可伏兵。乃斫大樹白而書曰、龐涓死此樹下。令齊師善射者、萬弩夾道而伏、期暮火舉而發。涓果夜至、斫木下、見白書、以火燭之。萬弩俱發。魏帥亂相失、涓自剄。曰、遂成醫子之名。齊大破魏帥、虜太子申。

返點附本文

曠度ニ其行、暴當至ニ馬陵。馬道隘而旁多阻、可伏兵。乃斫大樹白而書曰、龐涓死此樹下。令齊師善射者、萬弩夾道而伏、期暮火舉而發。涓果夜至、斫木下、見白書、以火燭之。萬弩俱發。

魏師大亂相失。涓自到。曰、遂成豎子之名。齊大破魏師。虜太子申。

讀方 贖その行をはかるに、暮に當に馬陵に至るべし。馬陵は道隘くして旁に阻多く、兵を伏す可し。乃ち大樹を斫り、白くして書して曰く、龐涓此樹下に死せんと。齊師の善く射る者をして、萬弩道を夾んで伏し、暮に火舉るを期して發せしむ。涓果して夜斫木の下に至り、白書を見、火を以て之を燭す。萬弩俱に發す。魏師大に亂れ相失ふ。涓自到す。曰く遂に豎子の名を成せりと。齊大に魏師を破り、太子申を虜にす。

解答 贖が敵の行程を推測した所が、夕方敵軍は馬陵に到着する筈であつた。馬陵は道がせまくてそばに險阻な所が澤山にあり、伏兵を隠すのに都合がよい、そこで龐涓は馬陵の路傍の大きな木を白くして「龐涓はこの樹の下で死ぬであらう」と書いて、齊の軍勢中

の射術の上手なものに命じて、澤山な弩を用意して道・兩側に隠れて居るやうにし。夕方火の見えるのを今圖に、弩を射るやうにさせた。龐涓は果して孫臏の豫想通りに、夜そのけづいた木の下に来て、白く木をけづいて何か書いてあるのを見て、火でもつて照して見た。そこで待ち構へて居た齊の軍勢の澤山な弩がきつて放された。魏の軍勢は混亂してしまつた。龐涓は孫臏にしてやられたことに氣がついて自分で頸をはねて死んでしまつた、その死ぬときに、「とうとうあの孫臏の小僧奴に成功をさせてしまつた」と言つた。齊は魏の軍を大にうちやぶつて、魏の太子申を捕虜にした。

應用 禮與天壤無窮者矣

問 題

返 點

【四】燕昭王攻齊。齊湣王走莒。王孫賈從湣王於莒。而失王處。其母曰、汝朝出而晚來、吾則倚門而望。汝暮出而不還、吾則前望。汝今事王、王走、汝不知處。汝尙何歸。賈乃求湣王子法章而立之、保

○失王處……王の居場所を見うしなつた。
○聞……村の入口
○事王……王に奉仕し。

莒以抗燕

返點附本文

燕昭王攻齊。齊湣王走莒。王孫賈從湣王於莒而失王處。其母曰、汝朝出而晚來、吾則倚門而望、汝暮出而不還、吾則倚闥而望、汝今事王、王走、汝不知處。汝尚何歸焉。賈乃求湣王子法章而立之、保莒以抗燕。

讀方 燕の昭王齊を攻む。齊の莒王莒に走る。王孫賈湣王に從ひ潛に於て王の處を失ふ。其母曰く、汝朝に出で、晩に來る。吾則ち門に倚つて望む。汝暮に出で、還らざれば、吾すなはち闥に倚つて望む。今汝王に事へ王走る、汝處を知らず。汝尚何ぞ歸ると。賈乃ち湣王の子法章を求めてこれを立て、莒を保ち以て燕に抗す。

解答 燕の昭王が齊を攻めた。そこで齊の湣王は逃げて莒に行つた。王孫賈は、湣王について莒に行つたら、王の居場所を見失つてしまつた。王孫賈の母が王孫賈に向つて「お前が朝出て夕方にかへると、自分は待ち詫びて門に出て門によりかゝつて待つ、お前が夕方出かけて歸つて來ないと自分は待ち兼ねて、村の入口まで出かけて、その入口の所によりかゝつて待つて居る。それにお前は王につかへて、王が逃げて行かれたのに王の居場所もしらず何しに歸つて來たか」と叱つた。そこで王孫賈は、湣王の子の法章を探して王の位に即け、莒を守つて燕に手むかつた。

應用 則又相與語曰。我識范君。知其賢也。他日聞有立天子陛下。直辭正色。面爭廷論者。非他人。必范君也。

問 題

【五】 睡既得志于秦、一飯之德必償、睚眦之怨必報。
返點附本文
睡既得志于秦、一飯之德必償、睚眦之怨必報。

○得志于秦……
秦國で自分の思ふ通りになるやうになつた。
○德……めぐみ。

○匪眦之怨……一
寸にらまれた程
の憤かな怨

讀方 匪既に志を秦に得。一飯の徳も必ず償ひ、匪眦の怨も必ず報ず
解答 唯が志を達し秦に於て自分の思ふ通りにすることが出来るやうになつてから。以前一
飯を恵まれた恵に對しても恩返しをし、又少しの怨を懐いたことに對しても必ず報復した
應用 必不_レ賞。不_レ必_レ賞。

問 題

○邯鄲……趙の都
○自薦……自分で
自分が適當であ
ると申出した。
○立……すぐと、
○處門下……食
客をして居るこ
と。

○穎……錐の尖端
○目笑……目を見

【六】秦攻趙邯鄲。平原君求救於楚。擇門下文武備具者二十人、得十九
人。毛遂自薦。平原君曰、士處世、若錐處囊中。其末立見。今先生
處門下三年未有聞。遂曰、使遂得處囊中、乃穎脫而出。非特末見而
已。平原君乃以備數。十九人目笑之。

返點附本文

秦攻_レ趙邯鄲。平原君求_レ救於楚。擇_レ門下文武備具者二十人、得_レ十
九人。毛遂自_レ薦。平原君曰、士處_レ世、若_レ錐處_レ囊中。其末_レ立見。今
先生處_レ門下三年未有_レ聞。遂曰、使_レ遂得_レ處_レ囊中、乃_レ穎脫_レ而出。非_レ特末見_レ而
已。平原君乃_レ以_レ備_レ數。十九人目_レ笑_レ之。

合せて輕蔑し
た。

先生處_レ門下三年未有_レ聞。遂曰、使_レ遂得_レ處_レ囊中、乃_レ穎脫_レ而出。
非_レ特末見_レ而已。平原君乃_レ以_レ備_レ數。十九人目_レ笑_レ之。

讀方 秦趙の邯鄲を攻む。平原君救を楚に求む。門下の文武備具の者
二十人を擇び、十九人を得たり。毛遂自ら薦む。平原君曰く、士の
世に處るは、錐の囊中に處ることし。其末立どころに見る。今先生
門下に處ること三年未だ聞ゆるあらずと。遂曰く、遂をして囊中に
處るを得しめばすなはち穎脱して出でん。特に末の見る、のみに非
ずと。平原君乃ち以て數に備ふ。十九人之を目笑す。

解答 秦が趙の都の邯鄲を攻めた。平原君は楚から援兵を求めやうとして、自分の所に集つ
て居る食客の中から文道武道に勝れたるもの二十人を擇ばうとして、十九人だけ擇ぶこと
ができた。その残りの一人として毛遂といふものが自分で自分を推薦した。平原君は「學
問あり、道理に明らかな人が世の中に居るのは、錐が囊の中に入つて居るやうなものでそ

の錐の尖端は直ぐにあらはれる。それに貴方は自分の家に三年も居られるが何も勞つて居られるといふことを聞いたことがない」といふた、そこで毛遂は「私を貴方の所謂蓋の中に入れて下されば錐の柄まで露からでるように自分の才能を揮つて見せませう。何も錐の尖端だけが出るように少しの才能を揮ふばかりではありません」と答へたので、平原君は毛遂を二十人の人数の中に加へた。他の十九人のものは目と目を見せて毛遂のことを笑つて居た。

應用 臣聞。朋黨之説自古有之。惟幸人君辨君子小人而已。

問 題

【七】平原君定從歸、曰、毛先生一至楚、使趙重於九鼎大呂、以遂爲上客。

返點附本文

平原君定從歸。曰、毛先生一至楚、使趙重於九鼎大呂、以遂爲上客。

○從……合從……支那戰國の特六回同盟して秦に抗せしを言ふ。
○九鼎大呂……夏の禹王が九州から金を貢せしめて殷周三代傳へて夏と周とした鼎と周の廟の大呂の調に協つた鐘。

○上客……一番待遇の食客。

讀方 平原君從を定めて歸る、曰く、毛先生一たび楚に至り、趙をして九鼎大呂よりも重からしむと、遂を以て上客と爲す。

解答 平原君が合從を定めて歸つて、「毛遂先生が楚に行つて、趙の國をあつた夏の禹王のとき九州から金を貢せしめて、殷周三代傳へて賣として九鼎といふ鼎や、周の廟の大呂の調に協つた鐘よりも重々しくさせた」といつて、毛遂を第一等の客として大切にした。

應用

能之、已百之

問 題

【八】王驚起絶袖。軻逐之。環柱走。秦法群臣侍殿上者、不得操寸兵。

返點附本文

王驚起絶袖。軻逐之。環柱走。秦法群臣侍殿上者、不得操寸兵。

讀方 王驚き起ち袖を絶つ。軻之を逐ひ。柱を環つて走る。秦の法、

○途……おひまはす。
○尺寸兵……短い武器。

群臣の殿上に侍する者、尺寸の兵も操るを得ず。

解答 王は驚き起つて、朝のつかまへて居る袖をちぎつて逃げた。荆軻は王をおひかけて往のまはりぐるぐるまはつて逃げた。秦の規則として御殿で王のそばについて居る臣下共は短い武器でも持つことを許されない。

應用 秦矢^ヒ其鹿^ヲ、天下共逐^レ之^ヲ。

問 題

【九】 今諸生、不師今而學古、以非常世、惑亂黔首。聞令下、則各以其學議之。入則心非、出則巷議率羣下以造謗。

返點附本文

今諸生、不^レ師^レ今^ニ而^{シテ}學^ブ古^ヲ、以^テ非^ニ當^ル世^ヲ、惑^シ亂^ス黔^首。聞^ク令^下、則^チ各^々以^テ其^ノ學^ヲ議^ス之^ヲ。入^リ則^チ心^ヲ非^ス、出^テ則^チ巷^ニ議^ス率^テ羣^下以^テ造^ル謗^ヲ。

讀方 今諸生、今を師とせずして古を學び、以て當世を非り、黔首を

○諸生……學問研究者
○當世……現代
○黔首……人民
○羣下……多勢の門下
○造謗……惡口を云ふ

惑亂し、令下ると聞けば、則各其學を以て之を議し、入つてはすなはち心に非とし、出で、はすなはち巷に議し、羣下を率ゐて以て謗を造す。

解答 現今の學者は、今の學問を手本とせず、古の學問をし、今の世のことを惡くいひ、人民をまどはし、政府から法令が下ると、皆自分達の學者上の立場からその善惡を批評し、自分一個人としては心の中でその法令が惡いと思ひ、公には町で連中と可否を論じ、大勢の門下をひきつれて批難をする。

應用 陛下^ニ一屈^レ膝^ヲ。則祖宗廟社之靈^ニ盡汗^ニ夷狄^ニ。

問 題

【十】 帝與於閭閻、知民事之艱難、厲精爲治、樞機周密、品式備具。拜刺史、守、相、輒親見問。常曰、民所以安其田里、而無歎息愁恨之聲者、政不訟理也。與我共此者、其惟良二千石乎。

○閭閻……村里
○厲精……骨を折つて
○樞機……大切な

- 周密……手落なく。
- 品式……種々の規定。
- 刺史……州知事。
- 守……郡守。
- 刺……その度毎に。
- 良二千石……立派な太守。

返點附本文

帝與_ニ於閭閻_一、知_レ民事之艱難_一、厲_レ精爲_レ治、樞機周密、品式備具。拜_ニ刺史、守、相_一、輒_レ親見問。常曰、民所以安_ニ其田里_一、而無_レ歎息愁恨之聲_一者、政平訟理也。與_レ我共_レ此者、其惟良二千石乎。

讀方 帝閭閻より興り、民事の艱難を知り、精を厲し、治を爲し、樞機周密にして、品式備具す。刺史、守、相を拜するるとき、輒ち親しく見て問ふ。常に曰く、民の其田里に安んじて、歎息愁恨の聲なき者は政平かに訟理ればなり。我と此を共にする者は、それ惟良二千石かと。

解答 帝は村里の賤しい人から出世して、人民の仕事の辛いことを知り、政治に骨折し、國家を治め、肝要なことに手落なく、種々の規定が皆備つて居た。又州知事や、郡守や、大臣

を任命するときには、自分自身にその人々に謁見を賜ふていろ／＼と政治上のことをたづねた。常に「人民がその生業に安んじて、歎いたり、不平を言つたりしないのは、政治がよく行はれ、歎訴が正しく裁かれるからである。自分と一緒にこのやうな政治を行ふことのできるものはたゞ良い太守ばかりであるわい」と云つた。

應用 子曰、中庸爲_レ德。其至矣乎。

問の題

【十一】 陳豨自更始初年起兵、至建武初據天水、自稱西州上將軍。後嘗遣馬援、往成都觀公孫述。援與述舊。謂當握手歡如平生。時述已稱帝四年矣。援既至。盛饗陸倕以起援。援謂其屬曰、天下雌雄未定。公孫不吐哺迎國士、反修飾邊幅如偶人形。此何足久_レ天下士乎。因辭歸。謂豨曰、子陽井底蛙耳。而自妄尊大。不如專意東方。

返點附本文

- 陸倕……晉護の近衛兵。
- 屬……部下。
- 吐哺……口中の食物を吐いて忙しく客を迎へる位に客を大切にすること。
- 國士……與徳一人にすぐれたる人。

○修飾邊幅……
 吳服物の兩端を飾つて商人が客に高く賣りつけるやうに外見を飾ること。
 ○何……乎……(何)といふ疑問代詞と「乎」といふ終詞とによつて反語になつて居る
 ○井底蛙……世間しづず。

隗囂自更始初年起兵、至建武初據天水、自稱西州上將軍。後嘗遣馬援、往成都觀公孫述。援與述舊、謂當握手歡、如平牛。時述已稱帝四年矣。援既至、盛陳陸衛、以延援。援謂其屬曰、天下雌雄未定、公孫不吐哺迎國士、反修飾邊幅、如偶人形。此何足久稽天下士乎。因辭歸。謂囂曰、子陽、井底蛙耳。而自妄尊大。不如專意東方。

讀方 隗囂。更始の初年に兵を起してより、建武の初に天水に據り、自ら西州の上將軍と稱す。後、嘗て馬援を遣し、成都に往いて述を見しむ。援、述と舊あり。謂ふ當に手を握つて歡すること平生の如くすべしと。時に述、已に帝と稱すること四年なり。援既に至れば、盛に陸衛を陳して以て援を延く。援その屬に謂つて曰く、天下

の雌雄未だ定まらざるに、公孫哺を吐きて國士を迎へず、反て邊幅を修飾すること偶人形の如し。此れ何ぞ久しく天下の士を稽むるに足らんやと、因つて辭して歸り。囂に謂つて曰く、子陽は井底の蛙のみ。而して自ら妄りに尊大にす。意を東方に専らにせんに如ずと

解者 隗囂が更始年間のはじめに兵を擧げてから、建武年間の初に天水といふ所を根據地として自分で西州の上將軍と名のつて居た。後あるとき馬援といふものを成都の公孫述の所に使にやつた。馬援は公孫述と知合であつた。そして以前互にこれからどこでいもあつたら今迄通りに手を握つて仲よくしようとする約束をして居た。今度馬援がたずれて行つたときには、公孫述は自ら帝位についてから四年たつて居た。馬援が行くと堂々と警衛の軍隊をならべて馬援を引見した。馬援はその部下に向つて「今天下の群雄が争ひあつて勝負もつかないのに、公孫述は口中の食を吐き出して客を迎へるといふ風な態度で、才徳の一國に秀で居る人を迎へない。かへつて布帛のふちを飾つて高く賣りつけるやうに、自分の外見を立派に見せようとして人形のやうに飾つて居る。あんなことをして居れば、とても永と世の秀でた人をとめ置くことはできん」と云つて、公孫述に暇をつけて歸つて隗囂に「公

○蜀……地名。

孫述は井の中の蛙が大海を知らないやうに自分一人で威張つて居る。あんなものを相手にするよりは東の方の國と親む方がよるしい」と言つた。

應用 一沐三握髮、一飯三吐哺、猶恐失天下之士。

問 題

【十二】上既平隴右。曰、人苦不自足。既得隴復望蜀。

返點附本文

上既平隴右。曰、人苦不自足。既得隴復望蜀。

讀方 上既に隴右を平ぐ。曰く、人自ら足るとせざるを苦しむ。既に隴を得て、また蜀を望むと。

解答 帝が隴を平げて後、人々の慾には限りがないものである。隴を手に入ると又隴の蜀が欲しくなる」と言つた。

應用 上初即位、富春秋。

○在兵間……軍陣中に生活した
○弱念……非常な
○軍旅……軍隊。
○柔能勝剛……弱いものがつよいものに勝つことが出来る。
○上書……意見書を奉る。
○黄石公……人名

問 題

【十三】上在兵間、久厭武事。蜀平後、非警急、未嘗言軍旅。北匈奴衰困。臧宮馬武上書請攻滅之、鳴劍抵掌、馳志於伊吾之北矣。上報書告以黄石公包桑詔曰、柔能勝剛、弱能制強。自是諸將莫敢言兵。

返點附本文

上在兵間、久厭武事。蜀平後、非警急、未嘗言軍旅。北匈奴衰困。臧宮馬武上書請攻滅之、鳴劍抵掌、馳志於伊吾之北矣。上報書告以黄石公包桑詔曰、柔能勝剛、弱能制強。自是諸將莫敢言兵。

讀方 上兵間に在り、久しく武事を厭ふ。蜀平し後は、警急あるに非ざれば、未だ嘗て軍旅を言はず。北匈奴衰困す。臧宮、馬武上書

して攻めて之を滅さんことを乞ふ。劍を鳴らし、掌を抵ちて、志を伊吾の北に馳すといふ。上報書して告ぐるに黃石公の包桑詔を以てして曰く、柔能剛に勝ち、弱能く強を制すと。是より諸將敢へて兵を言ふものなし。

解答 帝は軍陣の生活をして、永い間戦争をすることを厭つて居た。蜀を平げて後は、非常なことがなければ、軍隊のことを口にしたことはなかつた。北方の匈奴がその時に疲弊し居たので、藏宮馬武の連中が意見書を奉つて、匈奴を攻め滅したいといつて、勇みのあまり、劍を鳴らし、手をうって、伊吾の北に思ふ分威力を振つて見たいといつた。帝はそれに返事をして、根本を固くするのが第一であるといふことの書いてある黃石公の包桑詔を引いて、弱いものが強いものに勝ち、弱いものが、強いものを抑へつけることのあることをといてきかした。これ以來大將達が無理に戦争を始めたいといはなくなつた。

應用 振古莫儔、

問題

○大丈夫……立派な男兒

○當以馬革裹屍……戰場で討死すべきである

○安能死兒女手……どうして女小供に看病され乍ら意氣地なく死なうかそんな意氣地のない死に方はしない。

「安」といふ疑問代名詞を反語にしたのである。

○挾天子……天子を看板にして争鋒……戦争

【十四】 馬援茂陵人也。嘗曰、大丈夫當以馬革裹屍。安能死兒女手。

返點附本文

馬援茂陵人也。嘗曰。大丈夫當以馬革裹屍。安能死兒女手。

讀方 馬援は茂陵の人なり。嘗て曰く。大丈夫まさに馬革を以て屍をつむべし。安んぞよく兒女の手に死せやと。

解答 馬援は茂陵の人である。あるとき「男兒たるものは戰場で屠く國のために討死すべきで、女子供の手で懷抱されて病氣で意氣地なく死ぬやうなことがあつてはならん」といつた。

應用 汝安能知之

問題

【十五】 備三往、乃得見亮問策。亮曰、曹操擁百萬之衆、擁天子、令諸侯此誠不可與爭鋒。孫權據有江東國險而民附。可與爲援、而不可圖。

○江東……揚子江の東の地方。
 ○天府之土……天然の産物の多い土地。
 ○策……はかりごと。
 ○荆益……荆州益州。
 ○孰不……誰が。○孰不……誰が。○孰不……誰が。
 ○以迎……以て迎へて。○以迎……以て迎へて。○以迎……以て迎へて。
 ○入御……入つて御す。○入御……入つて御す。○入御……入つて御す。
 ○備……準備。○備……準備。○備……準備。
 ○歡……喜び。○歡……喜び。○歡……喜び。
 ○迎……迎へて。○迎……迎へて。○迎……迎へて。
 ○同……同じ。○同……同じ。○同……同じ。
 ○用……用ひて。○用……用ひて。○用……用ひて。
 ○終……終つて。○終……終つて。○終……終つて。
 ○同……同じ。○同……同じ。○同……同じ。

荆州用武之國、益州險塞、沃野千里、天府之士。若跨有荆益、保其巖阻、天下有變、荆州之軍向宛洛、益州之衆出秦川、孰不簞食壺漿以迎將軍乎。備曰善。與亮情好日密。曰、孤之有孔明、猶魚之有水也。

返點附本文

備三往、乃得見亮問策。亮曰、曹操擁百萬之衆、挾天子令諸侯、此誠不可與爭鋒。孫權據有江東、國險而民附、可與爲援、而不可圖。荆州用武之國、益州險塞、沃野千里、天府之士。若跨有荆益、保其巖阻、天下有變、荆州之軍向宛洛、益州之衆出秦川、孰不簞食壺漿以迎將軍乎。備曰善。與亮情好日密。曰、孤之有孔明、猶魚之有水也。

讀方 備三たび往いて、乃ち亮に見るを得て策を問ふ。亮曰く、曹操

「乎」と連用したのである。
 ○猶魚之有水也
 「なほ何々のごとし」と返り讀むのである。

は百萬の衆を擁し、天子を挾み、諸侯に令す。これ誠にとともに鋒を争ふ可らず。孫權は江東に據有し、國險にして民附く。與に援と爲すべし。而してはかる可らず。荆州は武を用ふるの國。益州は險塞にして沃野千里、天府の士なり。若し荆益を跨有し、其の巖阻を保ち天下變あらば、荆州の軍宛洛に向ひ、益州の衆秦川に出でば、孰か簞食壺漿して以て將軍を迎へざらんやと。備曰くよしと。亮と情好日に密なり。曰く、孤の孔明あるは、猶魚の水あるがごときなりと。

解答 劉備は三度自ら出かけて、やつと諸葛亮に面會することができそのはかりごとをたづねた。亮は「曹操は百萬の軍隊を従へ、上に天子を戴いて、諸侯を使つて居る。之とはとても勝負を争ふことが出来ない。孫權は揚子江の東を根據地として、その國は險阻で民の人望を得て居る。これとは互に援けあふべきで、これと争つてはならん。荆州は武力を用ひるべき國である。益州は險阻な土地で、肥沃な平地が廣々として居る土地である。もしこの荆州益州に跨つて根據地を有することが出来ればその險阻な土地に據つて、世の中

に事があつた場合には、荊州の軍隊を宛洛の方に出し、益州の軍を秦川の方に進めれば雖
でも馳走を設けて貴方の軍隊を歓迎しないものはない。」といった。劉備は「誠にその通り
である」と言つて、亮との仲が日々親しくなり、「自分に孔明の必要なことは、丁度魚に
水が必要なやうなものである」と云つた。

應用 猶天之不可階而升也。

問 題

【十六】 劉備初用龐統爲朱陽令。不治。魯肅遺備書曰、士元非百里才、
使爲治中別駕乃得展其驥足耳。

返點附本文

劉備初用龐統爲朱陽令。不治。魯肅遺備書曰、士元非百里才、使爲治中別駕乃得展其驥足耳。

讀方 劉備初め龐統を用ひて朱陽の令と爲す。治まらず。魯肅、備に

○百里才……縣令たるべき才能、展驥足……勝れた才能を發揮する。

書を遣りて曰く、士元は百里の才に非ず。治中の別駕たらしめば乃ち其の驥足をのぶるを得んのみと。

解答 劉備ははじめ、龐統を採用して朱陽の縣令とした。所が能く治めることが出来なかつた。魯肅といふものが劉備に手紙をやつて「士元の才能は縣令たるべき才能ではない。それより刺史に従つて、郡をめぐつて、別に一臺の傳車に乗る治中の役にしたら充分にその勝れた才能を發揮することができませう」といふた。

應用 乃復拜侍御史。

問 題

【十七】 昭烈臨終謂亮曰、君務十倍曹丕。必能安國家、終定大事。嗣子可輔輔之。如其不可、君可自取。亮涕泣曰、臣敢竭股肱之力、效忠貞之節、繼之以死。

返點附本文

○如……萬一。
○股肱……君を首に譬へ臣を股肱に譬へたので臣下のこと。
○忠貞之節……忠義正義の道。

○取不_下効_二股_一之
力、効_二忠_一貞_一之
節、繼_レ之_以死_一
打消助動詞「不」
と連用してある
が「敢」の方が上
の場合、如く反
語である「不」の
方が上に來れば
「不」ばかりでな
く「非」とか「莫」
等の打消助動詞
と「敢」と連用し
たときも同じこ
とである。

昭烈臨終謂_レ亮曰、君才十倍曹丕。必能安_二國家_一、終定_二大事_一。嗣子
可_レ輔_レ之。如其不可、君可_レ自取_レ。亮涕泣曰、臣敢不_下竭_二股肱_一之
力、効_二忠貞_一之節、繼_レ之_以死_一。

讀方 昭烈終りに臨んで亮に謂つて曰く、君の才曹丕に十倍す、必ず
能く國家を安んじ、終に大事を定めん。嗣子輔くべくんば之を輔け
よ、もしそれ不可ならば君自ら取るべしと、亮涕泣して曰く、臣敢
て股肱の力を竭し、忠貞の節を効し、之に繼ぐに死を以てせざらん
やと。

解答 劉備が死ぬる時、孔明に「貴方の才能は曹丕の十倍倍もある、きつと國を安らかに治
め、終には天下をとることも出来よう。自分の後嗣の子が愚でなく、輔佐する価値がある
ならば輔佐してやつて貰ひたい。もし愚でとても輔佐する価値がなければ貴方に自分の後
なついてももらいたい」と言つた。亮は涙を流して「私は必ず輔弼の力をつくし忠義正義の

道をふみ一命を捨てしも輔佐をしましよ」と答へた。

應用 如有_レ周公之才之美、使_レ驕且吝、其餘不_レ足_レ觀_レ要_レ已。

問題

【十八】 亮數挑懿戰、懿不出。乃遣以巾幘婦人之服。亮使者至懿軍。懿
問其寢食及事煩簡、而不及戎事。使者曰、諸葛公夙興夜寐、罰
二十以上皆親覽。所噉食不至數升。懿告人曰、食少事煩。其能久乎

返點附本文

亮數挑懿戰、懿不出。乃遣以巾幘婦人之服。亮使者至懿軍。懿
問其寢食及事煩簡、而不及戎事。使者曰、諸葛公夙興夜寐、罰
二十以上皆親覽。所噉食不至數升。懿告人曰、食少事煩。其能
久乎。

巾幘……婦人の
首飾。
○戎事……軍事。
○噉食……噉は啖
目で食へること
○其能久乎……終
詞「乎」が反語に
なるのである。

讀方 亮しばく懿に戦を挑めども、懿出でず、乃ち遺るに巾幘婦人の服を以てす。亮の使者懿の軍に至る。懿その寢食及び事の煩簡を問ひて戎事に及ばず。使者曰く、諸葛公は夙に興き、夜に寐ね、罰二十以上は皆親ら覽る。噉食する所は數升に至らずと、懿人に告げて曰く、食少く事煩し。其れ能く久しからんやと。

解答 諸葛亮は度々司馬懿に戦を仕かけたが、司馬懿は城を守つて戦はなかつた。亮は懿を怒らさうとして懿の態度の女々しいのを嘲ける意味で、婦人の首飾と衣服とを贈つた。その使者が懿の陣へ行つたときに懿はその使者に亮の睡眠と食事と事務の煩雜さとを尋ねて少しも軍事上のことを云はなかつた。使者は諸葛公は朝早く起き、夜晩く床に就き、罰の中で罰二十以上のものは皆自身に監督して居られる。食べる食物は數合に過ぎないといつた。それを聞いて司馬懿は人に「食物を備かしか食はず事務が煩雜であつて見れば、諸葛亮の生命もとても永くつゞきはずまい」と語つた。

應用 其可^レ廢^ニ棄^ス農^ヲ穡^ヲ乎。

問 題

【十九】 山濤、昔在魏晉之間。與嵇康阮籍籍兄子咸向秀王戎劉伶相友。號竹林七賢。皆崇尚老莊虛無之學。輕蔑禮法。縱酒昏酣。遺落世事。

返點附本文

山濤、昔在^ニ魏晉之間^ニ。與^ニ嵇康阮籍籍兄子咸向秀王戎劉伶^ノ相友^ス。號^ニ竹林七賢^ト。皆^ニ崇尚^ス老莊虛無之學^ヲ。輕^ニ蔑^ス禮法^ヲ。縱^ニ酒昏酣^ト。遺^ニ落^ス世事^ヲ。讀方 山濤、昔魏晉の間に在り。嵇康、阮籍、籍が兄の子咸向秀、王戎、劉伶と相友たり。竹林の七賢と號し、皆老莊虛無の學を崇尚して禮法を輕蔑して、酒を縱にし昏酣して、世事を遺落す。

解答 山濤は、昔魏晉の時代に居つて、嵇康、阮籍、阮籍の兄の子咸、向秀、王戎、劉伶と友達であつた。竹林の七賢といふて、いづれも老子莊子一派の心に一物を留めない學問を導び、外形上の秩序などは馬鹿にして、思ふ存分酒を飲んで酔拂ひ、俗世間のことを忘れ

- 崇尚……尊ぶ。
- 老莊虛無之學……老子莊子一派の心に一現も止めない學問。
- 禮法……外形上の秩序。
- 昏酣……酔拂らふ。
- 遺棄……忘れ果ててしまふ。

○風聲鶴唳……敗軍の兵は風の音にも鶴の聲にも敵の追手かと思ふこと
○狼狽……周章てること

【二十一】 玄等乘勝追撃、秦兵大敗、走者聞風聲鶴唳、皆以爲晉兵至、堅狼狽還長安。

返點附本文

玄等乘_レ勝_レ追撃_ス。秦兵大敗。走者聞_レ風聲鶴唳、皆以_レ爲_レ晉兵至。堅狼狽_ニ長安_ニ還_ル。

讀方 玄等勝に乗じて追撃す。秦兵大に敗る。走る者風聲鶴唳を聞き皆以て晉兵至るとなす。堅狼狽して長安に還る。

解答 玄の連中は勝にのつて追ひうつた。そこで秦の軍勢は大敗北をした。逃げるものは風の音や鶴の聲を聞いて、皆晉の兵が攻めて来たと思つた。堅はうろたへて長安にかへつた
應用 以_レ爲_レ有害_ニ害_ニ心_ニ。

問、口題

○徵士……召出された學徳の高い人
○字……生れたときにつける名その他に二十歳になると別の名をつけるこれを「字」といふ

【二十二】 宋文帝時、晉徵士陶潛卒。潛字淵明。潯陽人、侃之曾孫也。少有高趣。嘗爲彭澤令八十日、郡督郵至。吏曰應東帶見之。潛歎曰我豈能爲五斗米折腰、向卿里小兒。即日解印綬去。

返點附本文

宋文帝時、晉徵士陶潛卒。潛字淵明。潯陽人、侃之曾孫也。少有高趣。嘗爲彭澤令八十日、郡督郵至。吏曰應東帶見之。潛歎曰、我豈能爲五斗米折腰、向卿里小兒。即日解印綬去。

讀方 宋の文帝の時、晉の徵士陶潛卒す。潛字は淵明。潯陽の人、侃の曾孫なり。少くして高趣あり。嘗て彭澤の令となりて八十日、郡の督郵至る。吏曰く、まさに東帶して之を見るべしと。潛歎じて曰く、我豈能く五斗米の爲に腰を折りて、郷里の小兒にむかはんやと

米ノ折腰向ニ郷里小兒……疑問代名詞豈を反語として用ゐたのである。

即日印綬を解きて去る。

解答 宋の文帝の時、仕へるやうに徴された學徳の高い陶潛が死んだ。潛は通稱を淵明と云つて、潯陽の人であつて陶侃の曾孫である。若い時から氣高い様子であつた。ある時彭澤地方の長官となつた。郡の地方監督官が来た。役人が、禮服を着用して迎へなければならぬといつたので「自分は一日五斗の米を貰ふためにへい／＼しては田舎の子供に顔をむけることはできん」と云つて、すぐその日辭職して歸つた。

應用 吾豈^{ウシヤ}人^ニ下^ナ者^{ナラヤ}。

問 題

○創業……業とは始めること、こゝは國を建設すること。
○守成……出来上つたものを保つて行くこと。

【二十三】 上曾問侍臣創業守成就難。房玄齡曰、草昧之初、群雄並起、角力而後臣之。創業難矣。魏徵曰、自古帝王、莫不得之於艱難、失之於安逸。守成難矣。上曰、玄齡與吾共取天下、出百死得一生。故知創業之難。徵與吾共安天下、常恐驕奢於富貴、禍亂生於所忽。故知守成之難。然創業之難往矣。守成之難。方與諸公慎之。

は國を治めて行くこと。
○方……これから

返點附本文

上曾問侍臣創業守成就難。房玄齡曰、草昧之初、群雄並起、角力而後臣之。創業難矣。魏徵曰、自古帝王、莫不得之於艱難、失之於安逸。守成難矣。上曰、玄齡與吾共取天下、出百死得一生。故知創業之難。徵與吾共安天下、常恐驕奢生於富貴、禍亂生於所忽。故知守成之難。然創業之難往矣。守成之難、方與諸公慎之。

讀方 上曾て侍臣に問ふ、創業と守成と孰れか難きと。玄房齡曰く、草昧の初め群雄並び起り、力を角して後之を臣とす。創業難しと。魏徵曰く、古より帝王、之を艱難に得て安逸に失はざるなしと。上

曰く、玄齡は吾と共に天下を取り百死を出で、一生を得たり。故に創業の難さを知る。徵は吾と共に天下を安んじ、常に驕奢は富貴より生じ、禍亂は忽にする所より生ずる恐る。故に守成の難さを知る。然れども創業の難は往なり。守成の難方に諸公と之を慎まんと。

答 帝がある時傍に侍つて居る臣下に「はじめて國を建てるのと、國が建ててから之を治めて行くのとどちらが困難であらうか」とたづねた。玄房齡が「一番はじめ多くの英雄が各地に割據して居るとき、之と力較べをして打ち勝つて、之を臣下とするのであるから國を建てる方が困難であるといふた。魏徴は「昔から帝王は、困難して國を得、安樂氣儘にしてその得た國を失はないものはない」と云た。帝が「玄房齡は自分と一緒に天下をとつて百中九十九迄死ぬやうな困難にあつてやつと通れることが出来た。それ故、國を建てる困難を知つて居るのである。魏徴は自分と一緒に天下を治め、常に分に越えた驕は富貴な境遇から起り、國の亂れるのは、政治をよい加減にするために起るといふことを心配して居るから、國を治めることはいかにも困難であることを知つて居る。けれども國を建てる困難は既にすんだことである。國を失はないやうに治めることを、これから汝等と一緒に

氣を付けよう」といつた。

應用 忠孝孰重

問 題

○興替……盛衰。
○得失……利害。

【二十四】 上曰、以銅爲鏡、可正衣冠、以古爲鏡、可見興替、以人爲鏡、可知得失。

返點附本文

上曰、以^レ銅爲^レ鏡、可^レ正^ニ衣冠、以^レ古爲^レ鏡、可^レ見^ル興替、以^レ人爲^レ鏡、可^レ知^ニ得失。

讀方 上曰く、銅を以て鏡となさば、衣冠を正すべし、古を以て鏡となさば、興替を知るべし、人を以て鏡となさば得失を知るべし。

解答 天子が「銅を鏡として對せば、自分の姿を正しくすることができる。昔々手本とすれば盛衰の原因を知ることができる。人を手本とすれば、それによつて利害を知ることができる。

應用 君子正衣冠、尊其瞻視、儼然人望而畏之。

きると言つた。

問題

- 督戰……指揮して戰ふ。
- 宿衛……豫備軍
- 禁兵……近衛兵

〔二十五〕 合戦未幾、周右軍將樊愛能何徽先遁、右軍潰。歩軍千餘、解甲降。世宗見軍勢危、自引親兵、犯矢石督戰。宿衛將趙匡胤曰、主危如此。吾屬何得不致死。又謂禁兵將張永徳曰、賊氣驕、可破也。公引兵乘高、西出爲左翼。我爲右翼以擊之。國家安危、在此一舉。

返點附本文

合戦未幾、周右軍將樊愛能何徽先遁、右軍潰。歩軍千餘、解甲降。世宗見軍勢危、自引親兵、犯矢石督戰。宿衛將趙匡胤曰、主危如此。吾屬何得不致死。又謂禁兵將張永徳曰、賊氣驕、可破也。公引兵乘高、西出爲左翼。我爲右翼以擊之。國家安危、在此一舉。

也。公引兵乘高、西出爲左翼。我爲右翼以擊之。國家安危、在此一舉。

讀方 合戦未だいくばくならず、周の右軍の將樊愛能、何徽先づ遁れ右軍潰ゆ。歩軍千餘、甲を解いて降る。世宗軍勢の危きを見、自ら親兵をひきゐ、矢石を犯して督戦す。宿衛の將趙匡胤曰く、主危きことかくの如し、吾が屬何んぞ死を致さざるを得んやと、又禁兵の將張永徳に謂つて曰く、賊氣驕れり、破る可きなり。公は兵をひきゐて高きに乗じ、西に出で、左翼となれ、我は右翼となりて以て之を撃たん。國家の安危は此一舉にありと。

解答 戦争が始まつて未だいくばくもない中、周の右翼の大將の樊愛能、何徽が第一に逃げ出し右翼が崩れ出し、歩兵一千人餘りの者が武裝を解いて降参した。世宗は軍勢の危険なを見て、自分で近衛兵を率ゐて、矢石の飛んで来る中を指揮して戦つた。豫備軍の

大將趙匡胤が「君があつたやうに危険を犯して戦つて居られるのであるから、吾々は一命を捨てなければならぬ」と云つて、又近衛兵の大將の張永徳に「賊は勝つて油断して居る。今破ることが出来る。貴方は兵を率ゐて高い所から、西の方にまはつて左翼となれ自分は右翼となつて敵を攻撃しよう。國が安泰になるのも、危くなるのも、今のやり方一つである」と語つた。

應用 譬如爲山。末成一簣、止吾止也。

問題

【二十六】 嘗宴近臣紫雲樓下。因論及民事。謂宰相曰、愚下之民、雖不分菽麥、藩侯不爲撫養、務行苛虐朕斷不容之。

返點附本文

嘗宴近臣紫雲樓下。因論及民事。謂宰相曰、愚下之民、雖不分菽麥、藩侯不爲撫養、務行苛虐、朕斷不容之。

○愚下之民……極めて愚な人民。
○不分菽麥……菽と麥の區別を解りやしない。
○藩侯……大名。
○撫養……愛する。

讀方 嘗て近臣を紫雲樓下に宴す。因りて民事に論及す。宰相に謂つて曰く、愚下の民は、菽麥是分たずと雖も、藩侯撫養をなさず、つとめて苛虐を行はゞ、朕斷じて之を容さじと。

解答 或時側に侍つて居る臣下を召して紫雲樓の下で宴會を開いて、話の末、人民の事に話に向いた。總理大臣に「極めて愚な人民は、豆と麥との區別も出来ない程愚なものであるが、大名が人民を可愛がらず、残酷なことはかりすれば、自分は決して許さない」と言つた。

應用 周子有見無慧、不辨菽麥、故不可立。

問題

【二十七】 趙普初以吏道聞、寡學術。太祖嘗勸以讀書。普遂手不釋卷。每朝有大議、輒闔戶自開一篋、取一書閱之、及卒、家人見其篋、則論語也。嘗謂太宗曰、臣有論語一部。以半部佐太祖定天下、以半部

○吏道……官吏としての手腕。
○手不釋卷……本ことを手から離したことはなかつた。

- 大議……大切な相談。
- 輒……その度毎に。
- 閱……しらべる
- 篋……箱。

佐陛下致太平。

返點附本文

趙普初以吏道聞、寡學術。太祖嘗勸以讀書。普遂手不釋卷。每朝有大議、輒闔戶自開一篋、取一書閱之、及卒、家人見其篋、則論語也。嘗謂太宗曰、臣有論語一部、以半部佐太祖定天下、以半部佐陛下致太平。

讀方 趙普初め吏道を以て聞え、學術寡し。太祖嘗て勸むるに學術を以てす。普遂に手卷を釋かず。朝に大議ある毎に、輒ち戸を闔ちて自ら一篋を開き、一書を取りて之を閱す、卒するに及び、家人其の篋を見れば、則ち論語なり。嘗て太宗に謂つて曰く、臣論語一部あり。半部を以て太祖を佐けて天下を定め、半部を以て陛下を佐けて

太平を致せりと。

解答 趙普は初の官吏としての手腕は名高くあつたが學術の方は劣つて居た。太祖があるときこれに學術を勉強するやうに勧めた。趙普はそれから始終讀書して本を離すことがなかつた。朝廷で大切な相談のあるときは、その度毎に戸を閉めて、自分で一つの箱を開いて一冊の本を出してこれをしらべた。趙普が死んでから、趙普の家の人がその箱を見たのにそれは論語であつた。ある時趙普は太宗に「私は論語一部を持つて居る。その半分で太祖を佐けて天下を平定し、半分で、陛下を佐けて國を太平にした」と云つた。

應用 有不便弛則利民

【二十八】 歐陽修乃作朋黨論上之。略曰、小人無朋、惟君子有之。小人同利之時、暫爲朋者僞也。及其見利而爭先、或利盡而情疎、反相賊害。君子修身則同道而相益、事國則同心而共濟、終始如一。此君子之朋也。爲君者使當選小人僞朋、進君子之眞朋則天下治矣。

- 朋黨……徒黨を組むこと。
- 終始如一……始から終迄少しも變らない。
- 當選小人之僞

明^ツ進^ム君子之眞^ニ朋^ヲ……つまり人間の仲間を退けて盛徳の眞の友を近付けるべき筈である。「當」は「まさになに」返つて讀む。

返點附本文

歐陽修乃作^ル朋黨論^ヲ上^ル之^ヲ。略曰、小人無^レ朋、惟君子有^レ之。小人同^レ利之時、暫^ク爲^レ朋者僞也。及^ニ其見^レ利而爭^レ先、或^ハ利盡而情疎、反^シ相^シ賊害。君子修^レ身則同^レ道而相益、事^レ國則同^レ心而共濟、終始如一。此君子之朋也。爲^レ君者但當^ニ退^ニ小人之僞朋^ヲ、進^ニ君子之眞朋^ヲ天下治^ラ矣。

應用 歐陽修乃ち朋黨論を作りて之を上る。略に曰、小人は朋無し、たゞ君のみこれあり。小人利を同じくするの時、暫く朋をなす者は僞なり。その利を見るに及んでは先を争ひ、或は利盡くれば情疎く反つて相賊害す。君子は身を修むれば則ち道を同じうして相益し、國に事ふれば則ち心を同じうして共に濟ひ、終始一の如し。これ君

子の朋なり。君たるものはたゞ當に小人の僞朋を退けて、君子の眞朋を進むべし天下治らんと。

解答 歐陽修はそこで朋黨論を作つて之を差出した。その大要は次のやうであらう。つまり人間には仲間がない、成徳の人にはかり仲間がある。つまり人間が利益を得られるときばかり暫くの間、仲間をつくるのは僞の仲間である。利益のためには先を争つて利益を得ようとし、その利益がなくなれば、疎々しくなり反つて互に害を加へあふ。成徳の人は自分の身を修養するから同じ正しい道を踏み行つて互に利益を與へあひ、國につかへるときに心をあはせて共に國のためにつくし、常に變ることがない。かういふのが成徳の人間の仲間である。君主たるものはたゞ「つまらぬ人間の僞の仲間を退けて、成徳の人の眞の仲間を採用すべき筈である、かくすれば世の中が治るであらう」といふのである。

應用 當ニ捨^テ僞^ノ朋^ヲ、進^ニ眞^ノ朋^ヲ、天下治^ラ矣。

問 題

【二十九】 人世自古誰無死。留取丹心照汗青。

○誰無^カ死^シ……疑問代名詞「誰」を反詰としたのである。

返點附本文

人世自_レ古誰無_レ死。留_二取丹心_一照_二汗青_一。

讀方 人世古より誰か死なからん。丹心を留取して汗青を照さんと。

解答 人は誰でも一度は死なねばならぬものである。真心をつくして、名前を歴史に残さう。

應用 誰不_レ感泣_一。

問 題

【三十】 厓山既破。弘範置酒大會、謂天祥曰、國亡丞相忠孝盡矣、能改心、以事宋者事_レ今、不失爲宰相也。天祥泣然出涕曰、國亡不能救爲人臣者、死有餘罪。況敢逃其死、而貳其心乎。

返點附本文

厓山既破、弘範置酒大會、謂天祥曰、國亡丞相忠孝盡矣、能改心、

○置酒……宴最を開く。

○泣然……はらはらと。

○貳其心……二心を持つ。

以_二事_レ宋者事_レ今、不_レ失_レ爲_二宰相_一也。天祥泣然出_レ涕曰、國亡不_レ能_レ救。爲_二人臣_一者、死有_二餘罪_一。況敢逃_二其死_一、而貳_二其心_一乎。

讀方 厓山既に破る。弘範置酒大會し、天祥に謂つて曰く、國亡びて丞相の忠孝盡きたり。よく心を改め、宋に事ふる者を以て今に事へば、宰相たるを失はざるなりと。天祥泣然として涕を出して曰く、國亡びて救ふこと能はず。人臣たるもの死すとも餘罪あり。況や敢へて其の死を遁れてその心を貳にするをや。

解答 厓山が敵のために敗られてしまった。敵將弘範は酒宴を開いて、天祥に向つて貴方の事へて居た國はもう亡びて、貴方の忠孝をつくすところのものは無くなつてしまった改心して、今まで宋の國に對してつくして居た。忠義をもつて今の元の國に事へるならば總理大臣にでもなれようといふた。天祥は、はら／＼と涙を流して、「自分の事へて居る國が亡びるのを、救ふことが出来なからば、臣下として命を捨て、も尙罪を贖ふこと

逐ひまはした。即ち天下を自分が得ようと思つた。

【九】陛下が萬一降参なさつたならば、従つて祖先の神靈も冥冥のために汚辱されることになる。

【十】孔子が「過不及なく、終始不變の徳以上のものは無い哩」と言はれた。

【十一】髪を洗ふ時に客が来れば何度も洗ひかけの髪を握りながら出迎へ、食事の時客が来れば何度も口中の食物を吐き出して出迎へて客を大切にすることが、それでも天下の賢士を得損ないはせぬかと心配する。

【十二】天子が初めて位に即かれ、御年も若かよつた。

【十三】昔からのどんなものを出しても較べることに出来るものはない。

【十四】汝がどうして知り得ようか知り得ない。

【十五】丁度天が非常に高くて梯子をかけても昇れないやうである。

【十六】そこでまた侍御史に任命された。

【十七】萬一周公のやうに學才の優れた人があつても、その人が自分の學才の美を以て人に驕り、又吝嗇で人に與へることを惜む心がつよければ、いくら優れた點があつても見るに足りぬのである。

【十八】農業上の功績を捨て去ることが出来ようか、できない。

【十九】家に居ても名聲が必ず聞える。

【二十】これから仕事を始めようとする。

【二十一】害しようとする心があると考へた。

【二十二】自分はどうして人の下につく者であらざ、つくものでない。

【二十三】忠義と孝行とどちらが大切であるか。

【二十四】盛徳の人は、服装を正しくし、その眼を落付かせ。おごりかた態度をして居るので、對する人はこれを畏敬する。

【二十五】譬へば山を築きつくるやうなものである。もう一と簣の土を運べば山が出来上ると言ふときにまだその土を運ばずにやめてしまふのは、自分の心からやめたのである。

【二十六】周子には兄があつたが、見辨易い菽と蓼との區別のつかぬ程の愚物であつたから、位に即くことは出来なかつた。

【二十七】不便があれば、その度毎に寛大にして人民の利益をはかる。

【二十八】武術を捨て、讀書すべき筈である。

【二十九】感動して涙を流さぬものがあらうかない。

【三十】高祖は前殿に酒宴を開き、玉の盃を舉げて父君の長命を祝し、殿上に待つて居る多くの臣下は萬歳を呼んで祝した。

言志録之部

問題

【一】凡天地開闢、古往今來、陰陽晝夜、日月代明、四時錯行、其數皆前定。至於人富貴貧賤、死生壽夭、利害榮辱、聚散離合、莫非一定之數。殊未之前知耳。譬猶傀儡之戲、機關已具、而觀者不知也。世人不悟其如此、以爲己之知力足恃、而終身役役、東索西求、遂悴勞以斃。斯亦惑之甚。

返點附本文

凡天地開闢、古往今來、陰陽晝夜、日月代明、四時錯行、其數皆前定。至於人富貴貧賤、死生壽夭、利害榮辱、聚散離合、莫非一定之數。殊未之前知耳。譬猶傀儡之戲、機關已具、而觀者不知也。

註解

- 錯……代る／＼
- 數……まはりあはせ。
- 壽夭……長命短命。
- 傀儡……操人形骨折ること。
- 役役……苦心し骨折ること。
- 東索西求……方々にもとめあはる。
- 悴勞……つかれる。

世人不悟其如此、以爲己之知力足恃、而終身役役、東索西求、遂悴勞以斃。斯亦惑之甚。

讀方 凡そ天地開の事、古往今來、陰陽晝夜、日月代る／＼明かに、四時錯に行り、其の數皆前に定れり。人の富貴貧賤、死生壽夭、利害榮辱、聚散離合に至るまで、一定の數に非るはなし。殊に未だ之を前知せざるのみ。譬へば猶傀儡之戲、機關已に具れども、しかも觀者知らざるがごときなり。世人その此の如きを悟らず、以て己の知力恃ひに足ると爲して、終身役役として、東索西求、遂に悴勞して以て斃る。これ亦惑へるの甚しきなり。

解答 すべて世の中のこと、例へば昔を送り今を迎へ、陰陽晝夜の別あり、日と月とが代る／＼に照り、春夏秋冬が代りあつて來るなどと言ふことは、皆そのまはりあはせが前もつてきまつて居る。人に富貴や貧賤な身分、死んだり、生れたり、長生したり、若死し

たりすること、利益を得、損害を受け、名譽、不名譽をうけること、あるひはあつまり、あるひは離れんゝになること、ある定つたまはりあはせによつて起らないものはない。とりわけて前から人々が知らぬばかりである。例をあげて譬へて見れば、人形芝居の機關が前からつくつてあつても、人形芝居を觀物する人は、どうしてが形が動いて居るか知らぬやうなものである。世の人は世の中のことがこのやうに前もつて定まつたまはりあはせて起るといふことを知らずに、自分の知力をたよりに出來ると信じて、一生苦心し勉め、東奔西走して自分の欲する所をさがしとめ、とう／＼つかれて死んでしまふのは基道理を知らぬものである。

應用 天之曆數在汝身。

問 題

【二】登山嶽、涉川海、走數十百里。有時乎露宿不寐。有時乎饑不食。寒不衣。此是多少實際學問。若夫徒爾明窗淨几、焚香讀書、恐少得力處。

○爾……このやうに
○明窗淨几……明
めるい窗の下の淨
めた机の所で

返點附本文

登、山嶽、涉、川海、走、數十百里。有、時乎露宿不寐。有、時乎饑不食、寒不衣。此是多少實際學問。若夫徒爾明窗淨几、焚香讀書、恐少得力處。

讀方 山嶽に登り、川海を涉り、數十百里を走る。時ありて露宿して寐ねず。時ありて饑うれども食はず、寒ゆれども衣ず。これはこれ多少實際の學問なり。かの徒にしかく明窗淨几、香を焚き書を讀むがごときは、恐らくは力を得る處少からん。

解答 山に登り、川や海を涉り、何十里となく走り、時々は野原でとまつて睡眠することも出來ず、時々は又腹が空いても食はず、寒くても衣服もないといふ風に身體の鍛鍊をするのは、いくらか實地の學問の足しになる。あの空しく、明るい窓の所に清めた机を据え、香を焚いて氣を沈めて本を讀むやうな學問のしかたは、多分自分の身にあまり實力をつけ

用應 衣○敵○繼○袍○

問題

○前古……昔。
○錄……記録。
○當以古今第一
等人物自期焉
……「當」は「ま
さに何々すべ
し」と返つて再
讀する。

【三】 欲爲世間第一等人物、其志不小矣。余則以爲猶小也。世間生民雖衆、而數有限。茲事恐非難濟。如前古既死之人、則幾萬倍於今。其中聖人賢人、英雄豪傑、不可勝數。我今日未死、則似稍出頭人、而明日即死、輒忽入於古人錄中。於是、以我所爲、校諸古人、無足比數者。是則可愧矣。故有志者、要當以古今第一等人物自期焉。

返點附本文

欲爲世間第一等人物、其志不小矣。余則以爲猶小也。世間生民、雖衆、而數有限。茲事恐非難濟。如前古既死之人、則幾萬倍於今。其中聖人賢人、英雄豪傑、不可勝數。我今日未死、則似稍出頭人、而明日即死、輒忽入於古人錄中。於是、以我所爲、校諸古人、無足比數者。是則可愧矣。故有志者、要當以古今第一等人物自期焉。

讀方 世間第一等の人物とならんと欲するは、その志小ならず。余は則ち以て猶小なりとなすなり。世間生民、衆しと雖も、しかも數に限有り。この事なし難きにあらざらん。前古既に死せし人の如きは、則ち今に幾萬倍す。その中聖人、賢人、英雄豪傑、數ふるに勝ふべからず。我今日未だ死せざれば、則ち稍出頭の人に似たれども、しかも明日即ち死せば、輒ち、忽ち古人錄中に入る。是に於いて、我が爲したる所を以て、これを古人に校するに、比數するに足るも

のなし。これ則ち愧づ可し。故に志ある者、要は當に古今第一等の人物を以て自ら期すべし。

解答 世の中で最もすぐれた人間とならうと思ふその志は決してつまらん志ではないが、自分はその志を未だ小さいといふのである。世の中には人間は澤山に居るが、それでも現在居る人間の數には限がある。その中で最すぐれた人間になれんことにあるまい。過去に死んだ人の數は現在生きて居る人の數の何萬倍たか分らない。その過去の世に居た聖人とか賢人、英雄豪傑などはとても數へきれない位である。今日生きて居る中はいくらか他の人より勝れた人間のやうに見えても、明日死ねば、その度毎にすぐと過去の人の記録に入れられしまふ。それ故、自分のしたことと昔の人に比較して見れば、とても較べものにならぬ。これは實にはづかしいことである。このやうな次第であるから最すぐれた人にならうといふと志のあるものは、古今を通じて最すぐれた人物にならうと心がけることが第一必要なことである。

應用 執^{コトヲ}圭^{コトヲ}鞠躬^{ヨリ}如^{スル}也。如^ク不^レ勝^ル。

問題

【四】人方少壯時、不知惜陰。雖知不至太惜。過四十已後、始知惜陰。既知之時、精力漸耗。故人爲學、須要及時立志勉勵。不則百悔、亦竟無益。

返點附本文

人方^{コトヲ}少^ク壯^シ時^ニ、不^レ知^ク惜^ム陰^ヲ。雖^モ知^ル不^レ至^ク太^ク惜^ム。過^シ四^十已^後、始^メ知^ク惜^ム陰^ヲ。既^ニ知^ル之^時、精^力漸^ニ耗^ス。故^ニ人^ノ爲^ス學^ブ、須^ニ要^シ及^テ時^ニ立^テ志^シ勉^メ勵^ス。不^レ則^ク百^回悔^ム、亦^モ竟^ニ無^ク益^ナ。

應用 人少壯の時にあたりて、惜陰を知らず。知ると雖も太だ惜むに至らず。四十を過ぎて已後、始めて惜陰を知る。知るの時、精力漸耗す。故に人の學を爲す、須らく時に及んで立志勉勵せんことを要すべし。しからざれば則ち百たび悔ゆとも、亦竟に益なからん。

解答 人は若い時には時間を大切にしなければならぬことに気がつかぬ。たとへ時間の大切なことに気がついて居ても、そんなに大切にしない。四十歳を越えて後、やつと時間を大切にしなければならぬことを痛切に感じる。氣のついたときには、もうはたらく力が次第に減じて行くのが當である。それ故、人が學問をしようと思ふなら、若い時に志を立て勉めはげむことが大切であらう。さうでなければ、あとになつた何度後悔してもとりかへしつかないであらう。

應用 不者非吾臣屬。

問 題

【五】 處事要決斷。決斷或失於輕遽。執事要謹嚴。謹嚴或失於拘泥。須自省。

返點附本文

- 處……とりさばく。
- 輕遽……かるはずみ。
- 拘泥……かゝりなづむ。
- 須自省……

處事要^{スル}決斷^ヲ。決斷或失^{ハス}於輕遽^ニ。執事要^{スル}謹嚴^ヲ。謹嚴或失^{ハス}於拘泥^ニ。須^ラ自省^ス。

「須」は「すべからく何々すべし」と再讀する

讀方 事を處する決斷を要す。決斷或は輕遽に失す。事を執る謹嚴を要す。謹嚴或は拘泥に失す。須らく自省すべし。

解答 事をとり捌くには思切りが必要である。思切りは下手をすると輕はずみになることがある。事なとり行ふ場合にはつゝしみ深くすることが必要である。あまりつゝしみ深すぎるときは、もの事にかゝはりなづむやうになる。これ等のことは自分の心に反省して見ることがよい。

應用 執^ラ金革^ヲ以禦^ル非常^ヲ。

問 題

【六】 聞人之毀譽人、大抵聞其半、可也、劉向謂、譽人、不增其義、則聞者不快於心。毀人、不益其惡、則聽者不滿於耳。此言可謂盡人情矣。

返點附本文

- 義……この「よい所」の意。
- 不^レ滿^ニ於^レ耳……耳を傾けて充分に聞かない。

聞^ク人^ノ之^ヲ毀^ス譽^ス人^ノ、大抵聞^ク其^ノ半^ヲ、可^ク也。劉向謂^ク、譽^ス人^ノ、不^レ增^ス其^ノ義^ヲ、則^チ聞^ク者^ノ不^レ快^ニ於^ク心^ニ。毀^ス人^ノ、不^レ益^ス其^ノ惡^ヲ、則^チ聽^ク者^ノ不^レ滿^ニ於^ク耳^ニ。此言可^ク謂^フ盡^ス人^ノ情^ヲ。

讀方 人の人を毀譽するを聞くには、大抵其半を聞けば、可なり。劉向謂へらく、人を譽むるには、その義をまさずば、則ち聞くもの心に快からず。人を毀るには、其惡をまさずば、則ち聽く者耳に滿たず。此言人情を盡せりといふべし。

解答 人が他の人をそしつたり、ほめたりするときには、大抵話半分だと思へば間違がない。劉向が「人を譽めるときには、そのよい所を大きくして話さなければ聞く人の興を引かない。人の惡口をいふときには、その惡い點を大きく言はなければ聞く人が耳を充分に傾けない」と言つたが、人情をよく云ひあらはした言葉である。

應用 毀譽渾亂

問 題

【七】 人皆忘往年之既去、而圖次年之年未來、舍前日之已過、而慮後日之將至。是以百事苟且、終日齷齪、以至老死、可嘆也。故人宜回顧少壯時有困苦、有艱難。以知今之爲奢逸。是之謂自知本分。

返點附本文

○苟且……一時の間にあはせ。
○齷齪……こせつ。
○是以……「以レ是」と書かず。
○「是以」と倒裝する方が普通である。
○宜回顧少壯時、有困苦、有艱難、以知今之爲奢逸……「宜」は「よろしく」に「すべし」と再讀する。

人皆忘^レ往^ク年^ノ之^ヲ既^ニ去^リ、而^{シテ}圖^ル次^ノ年^ノ未^ダ來^ル、舍^テ前^日之^ヲ已^ニ過^リ、而^{シテ}慮^ル後^日之^ヲ將^シ至^ル。是^レ以^テ百^事苟^ク且^ク、終^日齷^ク齪^ク、以^テ至^ル老^死、可^ク嘆^ム也。故^レ人^ノ宜^シ回^シ顧^ル少^壯時^ノ有^ル困^苦、有^ル艱^難。以^テ知^ル今^ノ之^ヲ爲^ル奢^逸。是^レ之^ヲ謂^フ自^知本^分。

讀方 人皆往年の既に去りしを忘れて、次年の未だ來らざるを圖り、前日の已に過ぎしを捨て、後の將に至らんとするを慮る。これを以

て百事苟且、終日醒寤として、以て老死に至る。故に人宜しく少壯の時困苦あり、艱難ありしを回顧し以て今の安逸たるを知るべし。これをこれ自ら本分を知るといふ。

解答 世の人は過ぎ去つた前の年のことは忘れて顧みず、次に年が未だ来ない中から来年こそは努力しようと思畫し、過ぎ去つた前の日のことはすて、これから来ようとして居る日の計畫ばかり考へて居る。このやうな譯であるから、何事も現在のことをいゝ加減にやつて、一日中こせついで、やがて年をとつて死んでしまふ。だから人たるものは若いときに困難苦勞のあつたことをおもひ出して、今安樂にくらして居ることを知るがよい。これこそ分際を知るといふものである。

應用 莫有苟且之意也

問 題

【八】 觀花木以養目、聽啼鳥以養耳、嗅香草以養鼻、食甘滑以養口、時揮灑大小字、以養臂腕、徜徉園中、以養股脚。凡物得其節度、皆

○揮灑……書畫をかくこと。

○徜徉……散歩すること。

足以爲養耳。

返點附本文

觀ニ花木ニ以テ養レ目、聽ニ啼鳥ニ以テ養レ耳、嗅ニ香草ニ以テ養レ鼻、食ニ甘滑ニ以テ養レ口、時ニ揮灑ニ大小字ニ以テ養レ臂腕、徇ニ徜徉園中ニ以テ養レ股脚。凡物得ニ其節度ニ皆足ニ以テ爲レ養耳。

方讀 花木を觀以て目を養ひ、啼鳥を聽き以て耳を養ひ、香草嗅ぎ以て鼻を養ひ、甘滑を食し以て口を養ひ、時に大小字を揮灑し、以て臂腕を養ひ、園中を徜徉して以て股脚を養ふ。凡そ物その節度を得ば、皆以て養となすに足るのみ。

解答 花をながめて目の保養をし、鳥の聲を聞いて、耳の保養をし、香のよい草を嗅いで鼻の保養をし、甘い口あたりのよいものをたべて口の保養をし、時々は大宇や細字を書いて腕肘や腕の保養をし、庭園を散歩して足や股の保養をする。すべて何事でも適度にすれば

ること。
○節度……適度。

保奏ほそうなるものである。
應用 揮灑きんさい手不てふ歇あや。

志言録之部應用問題解答

- 【一】天命を受けて帝位につく運が汝の身にある
- 【二】破れたどてらを着る。
- 【三】非常に腫深い様子をした圭といふさきのとがった下の四角い玉を持つた。そしてそれをもつのにたへられないやうにして居る。
- 【四】さうでない者は自分の家來ではない。

- 【五】軍事をあつかつて、事變の起るのをふせいだ。
- 【六】悪く言つたり、ほめたりすることが入りまじつて居る。
- 【七】間に合せのことをやつて置かうといふ考のものはない。
- 【八】書くことをやめない。

日本外史論文之部

問 題

【一】布衣賴襄謹再拜白。少將樂翁公閣下。襄嘗讀宋蘇轍上韓魏公書愛之。以爲自古進言於當世王侯者、大抵有求而自售。識者所醜。獨轍偉公人物、比之名山大川、欲接其言貌、以養己作文之氣。言雖近狂、其澹泊無求可知也。

返點附本文

布衣賴襄謹再拜白。少將樂翁公閣下。襄嘗讀宋蘇轍上韓魏公書愛之。以爲自古進言於當世王侯者、大抵有求而自售。識者所醜。獨轍偉公人物、比之名山大川、欲接其言貌、以養己作文之氣。言雖近狂、其澹泊無求可知也。

○布衣……無位無官の人。
○少將……近衛少將。
○閣下……貴人の名の下につける敬語。
○當世……その時の自告……自家廣告。
○近狂……狂氣にみえて居る。
○澹泊……あつさりして居ること

讀方 布衣賴襄謹み再拜して白す。少將樂翁公閣下。襄嘗て宋の蘇轍の魏韓公に上るの書を読んで之を愛す。以爲らく古より言を當世の王侯に進むる者、大抵求むるありて自ら售る。識者の醜む所。獨轍魏公の人物を偉とし、之を名山大川に比し、その言貌に接し、以て己文を作るの氣を養はんことを欲す。言狂に近しと雖も、その澹泊求むることなき知るべきなり。

解答 無位無官の自分が敬意を表して申し上げる。近衛少將樂翁閣下、自分はあるとき宋の蘇轍が韓魏公に差上げた文章を読んでまことに氣に入つた。思ふに昔からその時代の王とか大名とかに自分の説を述べるものは、大抵ためにする考から自分の廣告をするのである。これは道理の解つた人々の嫌ふ所である。たゞ蘇轍だけは韓魏公の人物を崇拜して、韓魏公を立派な山や大きな川になぞらへて、その韓魏公に面謁して、自分の文章を作る氣象を養はうとした。そのいふことは狂氣に居るが、そのあつさりとして何も利を得ようと思ふてしたのでないことは明らかである。

應用 王蠋布衣也、義不北面於燕、況在位食祿者乎

問 題

○函嶺……箱根山
○八州……關東八州
○雖信 否 未 可

【二】余嘗踰函嶺、望八州之野、北控奧羽、知源氏基業深且遠矣。世傳、八幡公臨終、遺書其家曰、吾後世必有操天下之權者。雖信否未可知、非無其謂也。

返點附本文

「知……未」は「いまだ何々ならず」と再讀する。本當か偽りかは解らぬが「の意」
○操天下之權者……天下の政權をとる。

余嘗踰函嶺、望八州之野、北控奧羽、知源氏基業深且遠矣。世傳、八幡公臨終、遺書其家曰、吾後世必有操天下之權者。雖信否未可知、非無其謂也。

讀方 余嘗て函嶺を踰え、八州の野北奥羽を控ふるを望み、源氏の基業深且遠なるを知る。世に傳ふ。八幡公終に臨み、その家に遺書し

て曰く、吾が後世必ず天下の權を操る者あらんと。信否は未だ知る可らずと雖も、その謂なきに非るなり。

解答 自分は或時箱根山をこえて、關東八州の平野をながめ、北の方面は奥羽地方と接して居るのを見て、源氏が天下の權をとつた事業の基が、ずつと以前からあつたことを知つた世の中で、義家が死ぬときに、自分の子孫は必ず天下の權を握るであらうといつたと傳へて居るが、本當かどうか知らぬが、このやうな話のつたはつて居るのは無理もないことである。

應用 以禮防民、猶或踰之。

問 題

○鎮西……九州
○虜……野蠻人。
○砲礮……石火矢
○不暇發焉……

【三】吾嘗觀鎮西士人所傳元寇圖卷、虜盛以砲礮臨我。而我兵揮刀奮前、虜不暇發焉。蓋是時、我未有火器相敵。吾是以知、兵之勝敗、在人不在器。我長技自有在、可恃也。

進出する餘裕がない。
 ○侍……たより。
 ○是以……は「以」
 「是」と書くより
 も「是以」と倒裝
 する方が普通で
 ある。

返點附本文

吾嘗觀鎮西士人所傳元寇圖卷、虜盛以砲礮臨我。而我兵揮刀奮前、虜不暇發焉。蓋是時、我未有火器相敵。吾是以知。兵之勝敗、在人不在器。我長技自有在、可恃也。

讀方 吾嘗て鎮西の士人傳ふる所の元寇の圖卷を觀る、虜盛に砲礮を以て我に臨む。而して我が兵刀を揮ひ奮前む。虜發するに暇あらず。蓋是時、我未だ火器の相敵する有らず。吾是を以て知る、兵の勝敗は、人にありて器にあらざるを。我が長技自らあるあり、恃むべきなり。

解答 自分はあるとき九州の人の傳へて居る元寇の繪卷を觀た。敵は盛に石火矢で我軍にむかつて居る。我兵は刀をふるつてすみ、敵兵はよう進むことが出来ない、思ふにこの時我國には敵のもつて居る銃砲に匹敵するやうなものがなかつたのである。自分はこれから

考へても、戦争の勝敗は人の心によることであつて、武器によるものではないことを知つて。我國人の得意な技は自然とある。それをたのみにすればよいのである。

應用 侍の險護國。

問題

【四】 至於北條氏、以將門屬隸、而坐制朝廷。天下之事、不復忍言也。

返點附本文

至、於北條氏、以將門屬隸、而坐制朝廷。天下之事、不復忍言也。

讀方 北條氏に至り、將門の屬隸を以て、坐して朝廷を制す。天下のこと、また言ふに忍びざるなり。

解答 北條氏時代になつてから、武家の家來の身分でありながら、勞せずして朝廷を抑へつけた。この時代のことには口にするさへも憚り多いことである。

○將門屬隸……
 武家の家來。
 ○制……抑へつけ
 る。
 ○坐……居ながら

○偏師……一方の軍。
 ○勢……有様。
 ○致死……一命をすてる。
 ○豈可同日而語……「豈」といふ疑問代名詞と「也」といふ終詞とを連用して反語としたのである。
 「どうして同じやうに言へようか同じやうには言へない」の意。

應甲 隸也不力。

問 題

【五】 後之論者、或有比之唐張巡者。巡戴全盛之唐室、拒狂胡之偏師、有二顏爲之先、有許遠爲之助。而不過遮蔽江淮、守城致死。以公視之、勢之難易、功之大小、豈可同日而語也。

返點附本文

後之論者、或有比之唐張巡者。巡戴全盛之唐室、拒狂胡之偏師、有二顏爲之先、有許遠爲之助。而不過遮蔽江淮、守城致死。以公視之、勢之難易、功之大小、豈可同日而語也。

讀方 後の論者、或は唐の張巡に比する者あり。巡は全盛の唐室を戴き、狂胡の偏師を拒ぎ、二顏の之が先をなすあり、許遠の之が助を

爲すあり。而して江淮を遮蔽し、城を守り死を致すに過ぎず。公を以て之を視ば、勢の難易、功の大小、豈日を同うして語るべけんや
 解答 後世論するものが、之を唐の張巡と比較するものがある。張巡は最も盛んな唐の帝室の臣として、勢盛んな野蠻人の一方の軍隊を防ぎ、顔杲卿、顔真卿が、張巡よりもさきに義兵を挙げ、又一方には許遠が張巡を助けて居る。そして、揚子江、淮水の間の地方を守つて、城を守つて討死したに過ぎない。楠公とくらべて見ればその當時の事情のちがひ方や、手柄の大小はとも一つにして云ふことは出来ない。

應用 凡天下之地勢、兩山之間必有川。

系 問 題

【六】 全數往來攝播間、訪所謂櫻井驛者、得之山崎路、一小村耳。過者或不省其爲驛址。蓋足利織豊數氏、世故變移、道里驛程、隨輒改耳。余於是低回不能去。願望金剛山巖立雲際、想見公舉義之秋、及

○驛址……驛の在ったあと。
 ○織豊……織田豊臣。
 ○世故……世の事

情、
 ○低回……頭を垂れ頭をめぐらす
 ○想見……思ひやる
 ○秋……大切な時
 ○扞護……ふせぎ守る。

其子孫據以扞護王室也。

返點附本文

余 全數往來攝播間。訪所謂櫻井驛者、得之山崎路、一小村耳。過者或不省其爲驛址。蓋經足利織豊數氏、世故變移、道里驛程、隨輒改耳。余於是低回不能去。願望金剛山巖立雲際、想見公舉義之秋、及其子孫據以扞護王室也。

讀方 余數々攝播の間を往來し、所謂櫻井の驛なるものを訪ひ、之を山崎路に得たり、一小村のみ。過ぐる者或はその驛址たるを省ず。蓋足利織豊の數氏を経、世故變移し、道里驛程、隨つて改まるのみ余こゝに於て低回して去ること能はず。金剛山の雲際に巖立するを願望し、公の義を擧ぐる秋、及び其子孫據つて以て王室を扞護せし

を想見したるなり。

解答 自分は度々攝津播磨の邊をゆきよして、世にいふ櫻井の驛をたづねて山崎街道にあることを知つて行つて見た所が、小さな村に過ぎなかつた。通る人の中にはそれがあの有名な櫻井の驛の址であることを知らないものもある。思ふに足利織田豊臣の二三氏の時代を経て、世の中のことに移り變り、道程や、馬つぎ場もそれにつれて變つたのである。自分は時代の變遷や當時のことを思ひ浮べて、頭をたれ頭を回らし、思ひになやんで立ち去ることができず、金剛山が雲の所に、高く聳えて居るのをながめ、楠公の義兵を擧げた時や子孫が金剛山を根據として皇室を守り敵を防いだ時のことを考へて見たのである。

應用 世故未夷。

問 題

【七】 余見義貞手記者、蓋其未舉事時、語家子弟武門法戒、淺近而已。然有言、曰、爲將者、奉上撫下、決志而行、聽運於天、勿尤人也。

返點附本文

○手記……覚えが
 ○淺近……卑近……高遠でない。

淺近
 其遠でふい

○聽……まかす。
○尤……とがせる

余見^レ義貞^ノ手記^ヲ者、蓋其未^レ舉^ル事^ヲ時、語^ニ家子弟^ノ武門^ノ法戒^ヲ、淺近^ニ而已^シ。
然有^レ言^ハ、曰^ク、爲^レ將者^ハ、奉^レ上^ヲ撫^レ下^ヲ、決^レ志^ヲ而行^ヒ、聽^ニ運^ヲ於^テ天^ニ勿^レ尤^ム
レ^レ八也[。]

讀方 余義貞の手記なるものを見る。蓋その未だ事を挙げざるの時、
家の子弟に武門の法戒を語り、淺近なるのみ。然れども言あり、曰
く、將たる者は上を奉じ下を撫し、志を決して行ひ、運を天に聽せ
人を尤むる勿れと。

解答 自分は義貞の覺え書といふものを見た。思ふに義貞が未だ義兵を擧げないときに、一
族の若者に武家の教へをつけたことがかいてある、かいてあることは高尚なこととてなく卑
近なことであるが、その中に大將たるものは、天子を大切にし人民を愛し、思ひきりをよ
くして、運は天にまかして、人に對しては寛大でなければならんと書いてある。
應用 不^レ恐^レ天^ヲ、不^レ尤^レ人^ヲ。

問 題

【八】 足利氏宗族君臣、更相屠戮、十三世之久、而殆無寧日者、豈非
由其盜奪之報也哉。後之爲人臣者、亦可以知懼矣。

返點附本文

○宗族……一族。
○更……代るく
○屠戮……うちこ
ろす。
○寧日……やすら
かな日。
○豈非^レ由^ニ其盜奪
之報^ニ也哉……
疑問代名詞「豈」
を反語として用
ひ、終詞「也」
「哉」を復ねて用
ひて反語とした
のである。

足利氏宗族君臣、更相屠戮、十三世之久、而殆無寧日者、豈非由
其盜奪之報也哉。後之爲人臣者、亦可以知懼矣。
讀方 足利氏の宗族君臣。更々相屠戮し、十三世の久しき、殆ど寧日
なきもの、豈その盜奪の報に由るにあらざらんや。後の人臣たるも
の、亦以て懼を知るべし。

解答 足利氏の一族君臣が互に他を殺しあひ、十三代の永い間、殆ど平和な日になかつたの
は、その天下を盗み奪つた因果の報である。後世の臣下たるものは皇室に不忠をすること
がいかにか懼るべきであるかをこれによつて知るがよい。

應用 更進而攻之

問題

【九】至元龜天正之閒、海内裂爲八九、其最大者四氏。曰北條氏、曰武田氏、曰上杉氏、曰毛利氏。毛利氏起於安藝、而并山陽山陰十三州、疆土尤廣。其次爲北條氏。北條氏取伊豆據之、遂并關東八州。武田氏起於甲斐、并信濃駿河上野。上杉氏起於越後、并越中能登加賀以及庄内會津。皆爭務耕戰、帶甲數萬、積粟如山、龍驤虎視、角立東西、莫不有包舉宇内之心。

返點附本文

至元龜天正之閒、海内裂爲八九、其最大者四氏。曰北條氏、曰武田氏、曰上杉氏、曰毛利氏。毛利氏起於安藝、而并山陽山陰十三

- 疆土……領地。
- 耕戰……農事と軍事。
- 帶甲……兵士。
- 積粟……貯藏米。
- 龍驤虎視……龍の驤るやうに又虎の眺めるやうに勢を振ふこと。
- 角立……割據すること。
- 包舉……あはせる。

州、疆土尤廣。其次爲北條氏。北條氏取伊豆據之、遂并關東八州。武田氏起於甲斐、并信濃駿河上野。上杉氏起於越後、并越中能登加賀以及庄内會津。皆爭務耕戰、帶甲數萬、積粟如山、龍驤虎視、角立東西、莫不有包舉宇内之心。

讀方 元龜天正の閒に至り、海上裂けて八九となる、その最大なる者四氏。曰く北條氏、曰く武田氏、曰く上杉氏、曰く毛利氏。毛利氏は安藝に起りて、山陽山陰十三州を并せ、疆土尤も廣し。その次は北條氏となす。北條氏は伊豆を取り之に據り、遂に關東八州を并す。武田氏は甲斐に起り、信濃駿河上野を并す。上杉氏は越後に起り、越中能登加賀を并せて庄内會津に及ぶ。皆争ひて耕戰を務め帶甲數萬、積粟山の如し、龍驤虎視、東西に角立し、宇内を包舉す

るの心有らざるはなし。

解答 元龜天正時代になつて、國中が八か九位に分れた。その中で一番大きなものは、北條氏、武田氏、上杉氏、毛利氏である。毛利氏は安藝の國から出て、山陽道、山陰道十三ヶ國をとり、土地が一番廣かつた。その次は北條氏である。北條氏は伊豆をとつて之を根據地とし、關東八州を攻めとつた。武田氏は甲斐の國から出て、信濃駿河上野を攻めとつた。上杉氏は越後から起つて、越中能登加賀を攻めとりその領地は、庄内會津の方にまで及んだ。どれも皆我さきにと農業軍事に努力し、數萬の兵士を養ひ、兵糧米を山のやうに積み龍のあがり虎の見るやうな様子をして、東西に割據し、天下を取らうと思はぬものはなかつた。

應用 龍驤虎視包括四海

問 題

○烏知覆朱明國者不待覺羅氏哉……疑

【十】 嗚呼使太閤生於女眞靺鞨間。而假之以年、則烏知覆朱明國者、不待覺羅氏哉。

返點附本文

嗚呼使太閤生於女眞靺鞨間。而假之以年、則烏知覆朱明國者、不待覺羅氏哉。

讀方 嗚呼太閤をして女眞靺鞨の間に生れしめ、而して之に假すに年を以てせば、則ち焉を朱明の國を覆す者、覺羅氏を待たざるを知らんや。

解答 實に豐太閤を、女眞靺鞨のあたりに生れさせてかりにもし長生させたら、明國を、覺羅氏が亡ぼすのを待たなかつたかも知れぬ。

應用 烏有此事哉。

問 題

【十一】 公自少小、轉質隣國、已極艱難。及其主國、又接境勁敵、百

問代名詞「烏」を反語として用ひ終詞「哉」と連用したのである。○假……與へる。

- 少小……幼少。
- 勁敵……強い敵
- 百戰爭鋒……度々戦争して。
- 寸攘尺取……僅な土地。
- 定……平げた。

戰爭鋒、寸攘尺取、纒定五州。

返點附本文

公自_レ少小、轉_レ質隣國、已_レ極_レ艱難、及_レ其主國、又接_レ境勁敵、百戰爭鋒、寸攘尺取、纒定_二五州_一。

讀方 公少小より、隣國に轉質し、已に艱難を極む。その國に主たるに及んで、又境を勁敵に接し、百戰鋒を争ひ、寸攘尺取、纒に五州を定む。

解答 公は若い時分から、近所の國へ順々に人質となつて行き、あらゆる苦しみを味つた。自分の國の主人となつてから、又強敵の國と隣りあつて、度々戦争をし、少しづつ土地とつてやつと五ヶ國を平げることができた。

應用 定_二天下_一。

應用問題日本外史之部解答

- 【一】王綱は無位無官の者である、それでも義理上燕の臣下にならなかつた。まして位あり、封祿を受け、てるものであつて見れば尙更のことである。
- 【二】古の賢王の定められた道徳上の規則で人民を治め、てもやはりその規則を犯すものもある。
- 【三】要害をたよりにして國をまもる。
- 【四】臣下の者が忠義をつくさない。
- 【五】すべて天下の土地の有様は、二つの山の間には必ず川がある。
- 【六】世の中の出来事がまだおだやかにならん。
- 【七】天を怨んだり、他人をとがめたりしない。

【八】かはるく進んで敵を攻めた。

【九】英雄が一方に勢力を振るつて天下をひとまとめにする。

【十】どうしてさう云ふことがあらうか、そんなことはない。

【十一】天下を平げる。

註釋

- 宋人……こは宋の國の百姓。
- 株……きりかぶ
- 末……鋤。
- 守……見張る。
- 爲宋國笑……宋國中の人に笑はれた。
- この話から「守」
- 株といふ言葉が出來たので我國の柳の下に泥が居らぬ」と似た諺となつたと通利かぬことである。

雜之部

問 題

【一】宋人有耕田者。田中有株。兔走觸株、折頸而死。因釋其耒而守株、冀復得兔。兔不可復得、而身爲宋國笑。(韓非子)

返點附本文

宋人有耕田者。田中有株。兔走觸株、折頸而死。因釋其耒而守株、冀復得兔。兔不可復得、而身爲宋國笑。
 讀方 宋人田を耕す者あり。田中株あり。免走つて株に觸れ、頸を折りて死す。因つてその耒を釋し、株を守り、復免を得んことを冀ふ。免得べからずして、身は宋國の笑となる。

解答 宋の國に田を耕して居るものがあつた。田の中に木の切株があつて、そこへ免が走つて來て切株にぶつかつて頸の骨を折つて死んでしまつた。その人は田を耕すよりかうして免を得る方がいふと思つて、その鋤をなげすて、切株の番をして、又免のぶつかるのを待つて居た。免を得ることはできずに、宋の國中の人の笑の種となつた。

應用 天復命武王也。

問 題

【二】孟軻之母、其舍近墓。孟子之少也、嬉戲爲墓間之事、踊躍築埋。孟母曰、此非所以居子也。乃去舍市。其嬉戲爲賈術。孟母曰、此非所以居子也。乃徙舍學宮之旁。其嬉戲乃設俎豆、揖讓進退。孟母曰、此真可以居子矣。遂居之。(小學)

返點附本文

孟軻之母、其舍近墓。孟子之少也、嬉戲爲墓間之事、踊躍築埋。孟母曰、此非所以居子也。乃去舍市。其嬉戲爲賈術。孟母曰、此

- 舍……家。
- 墓間之事……葬式のこと。
- 踊躍築埋……ないたり埋めたりする。
- 居……居らせる。
- 賈術……商賣。
- 設俎豆……祭儀式のときに用ゐる道具をな

○括弧……禮儀正しく。

非^レ所^ニ以^テ居^ル子^也。乃^チ徙^ル舍^ニ學^宮之^旁。其^嬉戲^乃設^ク俎^豆。揖^讓進^退。孟^母曰^ク此^真可^ニ以^テ居^ル子^矣。遂^ニ居^ル之^也。

讀方 孟軻の母、その舎墓に近し。孟子の少きや、嬉戲墓間の事をなし、踊躍築埋す。孟母曰くこれ以て子を居く所に非ざるなりと。乃ち去つて市に舍す。その嬉戲賈術をなす。孟母曰く、これ以て子を居く所にあらざるなりと。乃ち徙つて學宮の旁に舍す。その嬉戲乃ち俎豆を設け、揖讓進退す。孟母曰くにこれ真に以て子を居く可きなりと。遂に之に居る。

解答 孟子の母の家は墓の近くにあつた。孟子の幼少なとき遊ぶのに葬式のまねをしてあそび、人を葬るときにするやうに泣いたり、埋葬したりする真似をして遊んだ。孟子の母はこんな所に自分の子を住ませることできんと言つて、そこから引越して、商人の住む町に住んだ。所が今度は商賣の真似をして遊んだ。孟子の母はまたこゝも自分の子を住ませるべき所でないと言つて、引越して學校のそばに住んだ。所が今度は祭のときに供へものをする器をならべるまねをし、禮儀正しい真似をした。孟子の母はこれこそ自分の子を住せる所だと云つて、とうとうこゝに住むことにした。

應用 度^レ地^ヲ以^テ居^ル民^也。

問 題

【三】 司馬溫公嘗言、吾無過人者。但平生所爲、未曾有不可對人言者耳。(小學)

返點附本文

司馬溫公嘗言。吾無^ニ過^ル人^者。但^ニ平^生所^レ爲^ス、未^ダ曾^ラ有^ク不^レ可^ニ對^ル人^言者^耳。

讀方 司馬溫公嘗て言く。吾人に過ぎたるものなし。但だ平生爲す所未だ嘗て人に對して言ふべからざるものあらざるのみと。

○過^ル人^者……人より勝る。

解答 司馬溫公があるとき人に「自分は人以上にすぐれたことはないが、只これまで人に
つかつて云へないやうなことをしたことがないばかりだ」と語つた。
應用 未^レ能^レ恤^レ諸侯。

問 題

○士……立派な人物。
○時務……その時代に第一にしなければならない。

○俊傑……すぐれた人。
○伏龍鳳雛……人に知られぬ英雄。
○豈知^二時務^一……疑問代名詞「豈」を反話として用ゐたのである。

【四】 劉備在荆州、訪士於襄陽司馬徽。徽曰、「儒生俗士、豈識時務。識時務者、在乎俊傑。此間自有伏龍鳳雛。」備問爲誰。曰、「諸葛孔明、龐士元也。」(資治通鑑)

返點附本文

劉備在^二荆州^一、訪^二士^一於襄陽司馬徽。徽曰、「儒生俗士、豈識^二時務^一。識^二時務^一者、在乎俊傑。此間自有^二伏龍鳳雛^一。」備問^レ爲^レ誰。曰、「諸葛孔明、龐士元也。」
讀方 劉備荆州に在り、士を襄陽の司馬徽に訪ふ。徽曰く、「儒生俗士

豈時務を知らんや。時務を識る者は俊傑に在り。此間自ら伏龍鳳雛あり。備誰なるかを問ふ。曰く、「諸葛孔明、龐士元なり」と。

解答 劉備は荆州に居て、現今學問あり道理に明らかな人は誰であらうと襄陽の司馬徽にたづねた。司馬徽は「今の學者や見識のない連中に何が目下の時勢にしなければならんことが解るものか。しかし現今に於ても、隠れて居る龍や、鳳の雛にも喩ふべき大人物がないでもない。」と答へた、劉備がその大人物といふのは誰を指すかと聞いた所が「それは諸葛孔明と龐士元である」と言つた。

應用 士^二不可^レ不以^レ弘毅^一、任重道遠。

問 題

○北軍……こゝは魏の軍。
○營落……陣屋。
○頃之……しばらく

【五】 去北軍二里餘、同時發火。火烈風猛、船往如箭、燒盡北船、延及岸上營落。頃之。瑜等率輕銳、繼其後、轟鼓大震、北軍大壞。操引軍、從華容道步走。遇泥濘、道不通、天又大風。悉使羸兵負草填

之、騎乃得過。羸兵爲人馬所蹈藉、陷泥中死者甚衆。(資治通鑑)

返點附本文

- 輕銳：輕裝した強い兵士。
- 鼓：はげしい太鼓の音。
- 風：風が吹いた。
- 羸兵：兵疲れた兵士。
- 蹈藉：ふみにじる。

去北軍二里餘、同時發火。火烈風猛、船往如箭、燒盡北船、延及岸上營落。頃之、瑜等率輕銳、繼其後、雷鼓大震、北軍大壞。操引軍、從華容道步走。遇泥濘、道不通、天又大風。悉使羸兵負草填之、騎乃得過。羸兵爲人馬所蹈藉、陷泥中死者甚衆。

讀方 北軍を去ること二里餘、同時火を發す。火烈しく風猛し、船往くこと箭の如く、北船を燒盡し延いて岸上の營落に及ぶ。しばらくして、瑜等輕銳を率ひ、その後を繼ぐ、雷鼓大いに震ふ。北軍大いに壞る。操軍を引きさひ、華容道より步走す。泥濘に遇ひ、道通ぜず

天又大いに風ふく。悉く羸兵をして草を負ひて之を填めしむ。騎乃ち過ぐるを得たり。羸兵人馬の蹈藉する所となり、泥中に陥りて死するもの甚衆し。

解答 魏の軍から二里餘離れた所で、一度に火をつけた。火は盛に燃え、風は激しく吹いた。その火をつけたところの船が矢のやうに早く進んで魏の船の中に進んで魏の船を皆燒いてしまった。又その飛火で岸にある魏の陣屋にも火事が起つた。しばらくして周瑜の連中は身輕に仕度した強い兵士を率ひてそのあとについて進んだ。雷のやうに太鼓の音が激しく鳴り響いた。魏の軍は大敗北して。曹操は軍隊を率ひて華容道から徒歩で逃げ、途中道の悪い所に行きあたり、通ることが出来ないでその上大風が吹いた。曹操は疲れ果てた兵士に皆草を運んで道の悪い所を埋めるやうに命令した。そこで騎兵がそこを通行することが出来た。疲れ果てた兵士は人や馬に踏みにじられて、泥の中に陥ちて澤山死んでしまった。應用 人羸車敵。

問 題

○君子……盛徳の人
○惡聲……惡口。
○潔……清。

【六】君子交絶、不出惡聲。忠臣去國、不潔其名。(史記)

返點附本文

君子交絶、不出惡聲。忠臣去國、不潔其名。

讀方 君子交絶えて、惡聲を出さず。忠臣國を去つてその名を潔くせず。

解答 盛徳の人は人と交際を絶つても、その人を悪く言ふやうなことはなく、忠義な臣下はたとへその國を見限つて去つても、自分の君を悪く言つて自分の正しいことを證明するやうなことはしない。

應用 尚儉素、自修潔。

問題

【七】騏驥一日而千里。驚馬十駕。則亦及之矣。(荀子)

返點附本文

○騏驥……騏驎も千里の馬。
○驚馬……やくざ馬。

○十駕……十度行くこと。
○平凡な人でも努力すれば非凡な人に及ぶことを意味して居る。

騏驥一日而千里。驚馬十駕。則亦及之矣。

讀方 騏驥は一日にして千里す。驚馬十駕すれば、則ち亦之に及ぶ。

解答 千里の馬は一日の中に千里走れる。つまらん馬でも十倍の努力をすれば、千里の馬に追いつくことが出来る。

應用 騏一躍不能十步、驚馬十駕、功在不捨。

問題

【八】倉廩實而知禮節。衣食足而知榮辱。(管子)

返點附本文

倉廩實而知禮節。衣食足而知榮辱。

讀方 倉廩實ちて禮節を知り、衣食足りて榮辱を知る。

解答 米倉に米が一杯になり豊になり餘裕があるやうになつてはじめて禮儀とを守るべき道とか言ふことを考へるやうになり、衣食のことに頭腦を悩まなくてもよくなつてはじめて

○倉廩實……豊になる。
○榮辱……名譽不名譽。

名譽とか不名譽とか言ふことを考へるやうになる。

應用 言行君子之樞機、樞機之發榮辱之主也。

問 題

【九】 趙王信秦之間。秦之間言曰、秦之所惡。獨畏馬服君趙奢之子趙括爲將耳。趙王因以括爲將代廉頗。藺相如曰。王以名使括。若膠柱而鼓瑟耳。括徒能讀其父書傳。不知合變也。趙王不聽。遂將之。

(史記)

返點附本文

趙王信^ニ秦之間^ヲ。秦之間言曰。秦之所^レ惡。獨^ニ畏^ニ馬服君趙奢之子趙括爲^ニ將耳。趙王因^テ以^テ括爲^ニ將代^ニ廉頗。藺相如曰。王以^テ名使^ニ括。若^キ膠柱而鼓^ニ瑟耳。括徒能讀^ニ其父書傳。不^レ知^レ合^レ變也。趙王不^レ聽。遂^ニ將^ニ之。

○聞……まはしも
の……間隙。
○若^キ膠柱而鼓^ニ瑟耳……融通の利かぬこと。
○書傳……書きつたへ。
○合^レ變……臨機應變にすること

レ聽。遂^ニ將^ニ之。

讀方 趙王秦の閒を信ず。秦の閒言つて曰く、秦の惡む所は、獨馬服君趙奢の子趙括の將たるを畏るゝのみと。趙王因つて括を以て將となし廉頗に代ふ。藺相如曰く、王名を以て括を使ふ。柱に膠して瑟を鼓する若きのみ。括はたゞ能くその父の書傳を讀み。變に合するを知らざるなりと。趙王聽かず、遂に之を將とす。

解答 趙の王は秦の閒隙の言ふことを信用した。秦の閒隙は「秦の方で、まゐるのは只、趙の方で馬服君趙奢の子の趙括を大將として使ふことである。」と言つた。趙王はそこで趙括を今迄の大將の廉頗に代へて大將とした。藺相如が王に「貴方は秦の評判で趙を括大將とされたが、趙括は融通が利かず、まるで琴柱を膠でひつつけて瑟を弾くやうなものである。あの男はその父の書き傳へた所をよく讀んで知つては居るが、臨機應變の手段をとることができない」と云つたが、趙王はそれをきき入れず、とうとう趙括を大將とした。

應用 不^レ可^ニ以^テ語^ニ變。

○湯武：殷の湯王と周の武王。
 ○諛諛：直言すること。
 ○桀紂：夏の桀王と殷の紂王。
 ○唯唯：はいはいと命令通り、何も反対しないこと。

問 題

【十】湯武以諛諛而昌。桀紂以唯唯而亡。(家語)

返點附本文

湯武以ニ諛諛^ヲ而昌^ス。桀紂以ニ唯唯^ヲ而亡^ス。

讀方 湯武は諛諛を以て昌え、桀紂は唯唯を以て亡ぶ。

解答 湯王や武王は直言する臣下を用ひて盛んになり、桀王や紂王はいくと言ふ臣下ばかり用ひたので亡んでしまつた。

應用 千人之諾諾、不如一士之諛諛。

問 題

【十一】大丈夫當雄飛。安能雌伏(後漢書)

返點附本文用

「當」は「まさに」なり、再讀する。
 ○雌伏：屈すること。

大丈夫當ニ雄飛^ス。安能雌伏^{センヤ}。

讀方 大丈夫當に雄飛すべし、安ぞよく雌伏せんや。

解答 立派な男兒たるものは雄鳥の飛揚するやうに盛んになつて、雌鳥のやうに屈下して居てはならん。

應用 大丈夫處ニ世當^ニ掃除^ス天下^ヲ。

問 題

【十二】鸚鵡能言。不離飛鳥。猩猩能言。不離禽獸(禮記)

返點附本文

鸚鵡能言。不離飛鳥。猩猩能言。不離禽獸。

讀方 鸚鵡能く言ふ。飛鳥たるを離れず。猩猩能く言ふ。禽獸たるを離れず。

○能：上手に。
 ○飛鳥：鳥。
 ○禽獸：このは獸の方に意味があるの「禽」の字は帶説(意味なく只ついで居る字)となつて居る。

○これから口のみに上手で手の之に伴はないことをいふやうになつた。

○察：明らかに見通すこと。

解答 鸚鵡は人の口眞似が上手であるがやはり鳥である。猩猩も人の口眞似は上手であるが人間とは云へない矢張獸である。

應用 已知將軍能用兵。

問 題

【十三】 水至清則無魚。人至察則無徒。(文選)

返點附本文

水至清則無魚。人至察則無徒。

讀方 水至つて清ければ則ち魚なし。人至つて察なれば則ち徒なし。

解答 水があまり清く澄んで居ると魚が住まない。人もあまり人の腹中まで見透すやうに才智があり過ぎると仲間が出来ぬのである。

應用 聖人之徒也。

問 題

【十四】 不遇盤根錯節。何以別利器乎(後漢書)

返點附本文

不遇盤根錯節。何以別利器乎。

讀方 盤根錯節に遇はずんば、何を以てか利器を別たんや。

解答 まがりくねつた根や、筋の入りまじつて居る節をきつて見なければ切れ物の切れ味を知ることができない。

應用 父死不葬。爰及于戈。可謂孝乎。

○「困難にあはれば才能を試みることはできぬ」といふ意味である。○何以別利器乎……「何以」とこのやうに倒装する方が普通である。又「乎」は終詞の「乎」を反語としたのである。

應用問題雜之部解答

- 【一】天が再び武王に命じたのである。
- 【二】土地を考へて人民を居らせる。
- 【三】まだ諸大名を心配することはできない。
- 【四】立派な人物たるものは、心を廣くもち志をしつかりともたねばならん。これからしなければならん任務は重く且大である。
- 【五】人間も疲れ弱り、車も古くなりやぶれた。
- 【六】儉約質素をたつとび、自分の徳を修めて清い行をする。
- 【七】千里の馬は一度とんで十歩とぶことは出来ぬ。つまり馬は十倍の努力をすれば千里の馬に及ぶと

いふのはやめずに續けて努力する所に功があるのである。

【八】言葉は行は盛徳の人にとって大切なものである。

その大切なものが外部に現はれるその現はれ方が名譽不名譽のわかれる要點である。

【九】臨機の手段を語ることは出来ない。

【十】千人の人々が逆らばぬやうにして居るのよりも、一人の立派な人物が直言する方がましである。

【十一】男兒たるものが此世に居れば天下の亂を除くべきである。

【十二】もう將軍が充分上手に軍險を動かすことの出来

るのを知つて居ます。

【十三】聖人の仲間である。

【十四】父が死んでも葬式せず、戦争をはじめた、このやうなことをして孝行であると言へようか孝行とは云へない。

- 鞍馬……鞍を置いた馬。
- 蟻潰堤……蟻の穴から堤が崩れる。小事を忽にする大なる禍を招く。
- 有若無……人の才徳を誇らぬこと。

1の部

- 傳^フ衣鉢……衣は袈裟、鉢は施米を受ける鉢。師の方から出た語で、師の法を傳へること。
- 怡然……喜ぶ形容。
- 委細……事柄の詳しいこと。
- 長日……夏のこと。

- 畏友……尊敬する友。
- 倚門之望……母がその子の歸宅を待つて居ること。
- 韋編三絶……讀書を勉むること。
- 帷帳……幕。謀を運すには帷帳の中です。謀臣のこと。帷帳といふこともある。
- 異同……異の方に意味があるので「ちがひ」といふ意。
- 異域……外國。
- 異數……特別。
- 異端……聖人の教以外教の。
- 異日……他日。
- 異口同音……口を揃へていふこと。

- 偉器……すぐれた器量ある人。
- 意氣揚揚……得意なこと。
- 意匠慘澹……工夫を運らすこと。
- 維新……舊弊を一洗して革新すること。
- 慰藉……なぐさめ助けること。
- 遺蹟……遺言。
- 遺老……生き残つて居る老人。
- 遺世……世の中の俗事を忘れてしまふこと。
- 顧使……顧で人をつかふこと。
- 奔倫……人の常を守るべき倫理。
- 懿德……徳の勝れたこと。
- 友悌……弟を慈み、兄に順ふこと。
- 有徳……道徳ある人。

116

- 有終……終を全うすること。
- 有司……役人。
- 有識……見識あること。
- 有道之士……道徳あり學識ある人。
- 有識之士……見識ある人。
- 就^ニ有道^一而正……平生の自分の行ひを道徳あり。藝能ある人については是非を正す。
- 幽谷……しづかた谷。
- 幽愁……深い憂。
- 悠悠……遠いこと、思ふこと、心配すること、ひまなこと。
- 悠久……はるかに久しいこと。
- 遊子……他國の旅に居るもの。

故事熟語之部

- 猶子……甥。
- 遊軍……臨機應變に味方を援ふ軍。
- 遊絲……かげろふ。
- 誘掖……前から導き、側から助けること。
- 誘引……さそふこと。
- 優渥……渾く厚いこと。
- 如何……どうしようか。
- 何如……疑問の言葉。
- 遷怒……一人の人に對する怒を無關係の他の人にうつすこと。
- 勢如^ニ脫兎^一……兎が脱れるときにやく走るやうにすばやいこと。

- 勢不^ニ兩立^一……形勢上對立するところができぬこと。
- 以^レ勢交者勢傾則^レ……權勢ある人に交際を求めるとは、その權勢ある人の權勢を失ふと、交際を斷つてしまふ。
- 育英……英才の士を教育する。
- 漱^ハ枕^ヲ流……まらがつて面白くこじつけること。
- 一部……一組。
- 一抹……ひとなど。
- 一由旬……四十里、又は十六里。
- 一網打盡……網で魚をとるやうに一度に大勢のものを捕へる。

輸ハ
一
一
一

漢文詳解研究の力

- 一衣帶水……帶のやうな水。
- 一人當千……一人で千人に當る勇士。
- 一字千金……非常に價値ある文章
- 一日之長……少し年齢が上であること。
- 一言以蔽之……一言でその意味を云ひつくす。
- 一盲引二衆盲……一人の盲人が多数の愚人を差圖する事。
- 一葉落知天下秋……些細なことで、大事をしること。
- 嘗二饜肉一知二饒味……一部分によつて全體を知る。

- 宿二樹之陰。汲二河流……少しの因縁のあひこと。
- 一頃……田百畝。
- 輸二籌……少し負けること。
- 一視同仁……何に對してもなまきけ深いこと。
- 一進一退……あるひはすゝみ、あるひはしりぞく。
- 一瀉千里……河の水が一たび流れて千里を走るやうに、力の強きこと。
- 一聞一知十……聴いこと。
- 一舉手一投足……少しの骨折。
- 一將功成萬骨枯……頭となる人が成功するには澤山の部下

- 一簞食一瓢飲……少しの食物。
- 一簞食一豆羹……少しの食物。
- 一犬吠形百犬吠……一人が虚言を云へば、多くの人がこれを實際のこととして他に傳へること。
- 一蕙猶有臭……香草の蕙といふ草と、穢といふ臭の悪い草と一所に置くと、良い香の方は消えて悪臭は十年たつても消えない。善い事は消え易く、悪事は消えにくいことをいふ。
- 乙夜之覽……天子の讀書、天子は二更(午後十時)から政治

悒々

故事熟語之部

- 壹敗塗地……俄に敗れてしまつて、肝腦が地にまみること。
- 逸事……人の行つたことの中で世の中に知れて居ない事。
- 逸民……世の中から隠れて居る人。
- 以レ逸待レ勞……自分の方は樂をしてつかれた敵を待ち受けて戦ふこと。
- 溢美之言……ほめすぎた言葉。
- 鷸蚌之爭、爲二漁夫之利……「かはせみ」と「はまぐり」と争つて、「はまぐり」が「かはせみ」の嘴を啣へたの

- を漁夫が来て兩方を捕へた。これから二人のものが争つて居ると第三者が利を得ること。
- 命如二風中燈……人の命の危いこと。
- 命輕二於鴻毛……一命を濁くするること。
- 壽則多レ辱……長生すると恥辱を受けることが多い。
- 悒悒……心の結ばれて穩やかでないこと。
- 揖讓……會釋して謙遜して譲ること。
- 家給人足……世の中の繁榮して居

- ること。
- 諱……人の生きて居るときの名。
- 引……序といふのと同じ、文體の名。
- 引退……身を引くこと。
- 允恭……心の中からまことをあらはして、謹むこと。
- 允文允武……君主の文武の徳のそなはつて居ること。
- 因緣……ゆかり。
- 因果……原因結果。
- 解印……官を辭すること。
- 咽喉地……極めて大切な土地。
- 殷殷……盛んなこと。
- 殷賑……豊かなこと。

漢文群解研究の力

- 股鑑不^カ遠^カ……股の手本とすべきことは前の夏の滅亡したことである。つい近い所に手本があるといふ意。
- 員數……數。
- 員外……定員外。
- 陰陽……天地間のあらゆるものをつくり出す二つの氣。
- 陰雨……鬱陶しく降る雨。
- 陰霖……鬱陶しくふるなが雨。
- 陰翳……かげ。
- 淫霖……なが雨。
- 淫祀……邪神を祭る社。
- 淫瀆……ものゝ消えてなくなること。

ウの部

- 隱然……盛んなこと。
- 隱君子……世の中から隠れて徳を修めて居る人。
- 色厲内荏……表面威厳を備へ内心の懦弱なこと。
- 宇宙……天地。
- 宇内……世の中。
- 羽林……天子の宿衛を掌る役。
- 羽化……羽のはえること。
- 羽翼……鳥の翼、輔佐すること。
- 迂言……迂遠なる言葉。
- 迂濶……間拔けたこと。
- 迂備……迂遠な學者。

- 雨師……雨の神。
- 禹跡……支那。
- 禹城……支那。
- 烏兔……日月。
- 烏有……無いこと。
- 烏鵲橋……鶴が天の川にならんでかける橋。
- 烏獲之力……烏獲といふ昔の力者のやうな大力。
- 烏合之衆……よせあつめ勢。
- 魚不可^テ以^テ無^テ餌^ヲ釣^ル……資本がなくては何事も出来ぬこと。
- 投^テ魚^ヲ於^テ淵^ニ……自由にする。

羽林

- 食^ツ牛^ヲ氣……幼少のときから大きな志のあること。
- 對^シ牛^ヲ彈^メ琴……馬鹿なものに道理を説くこと。
- 内省不^レ疚……内心に少しも恥しくないこと。
- 蔚然……盛んなこと。
- 鬱鬱……氣の結ばれること。
- 鬱焉……盛んなこと。
- 鬱憤……心中に不平の滿ちて居ること。
- 鬱結……氣のはれぬこと。
- 踏^ム海……海に投じて死ぬこと。
- 云爲……言論すること。
- 雲表……雲の上。

エの部

- 雲泥……天地。
- 雲外……雲の上。
- 雲霓……雲と虹。
- 雲集霧散……多くのが集り又ちりくくなること。
- 運甕……身體を丈夫にするため運動すること。
- 運用之妙一於一心……計略は活用する所が大切であること。
- 醞釀……酒をかますこと。いろいろのものを造り出す事。
- 蘊奥……奥儀。
- 怨入^ニ骨髓……甚しく怨むこと。
- 所^レ獲不^レ如^レ所^レ亡……損をする方が大きいこと。

- 依估……よりのむ。
- 永訣……永く別かれること。
- 英邁……才智の天より超らて居ること。
- 英雄……勝れた人。
- 英雄欺^レ人……英雄が策略によつて人を欺くこと。
- 登壇……みちて居ることゝむなしこと。
- 詠史……歴史上に題材を求め詩を作り、自分の意を述べる。
- 瑩瑩……人を弄つた所。
- 榮耀……はでやかなこと。

故事熟語之部

信精依信

望城

- 榮枯……盛衰。
- 榮爵……立派な官爵。
- 榮辱……名譽不名譽。
- 榮達……立身すること。
- 榮枯盛衰……人の一生の盛衰は草木の或は盛え或は衰へるやうなものである。
- 睿智……さくく智識あること。
- 穎悟……人の才智の勝れたこと。
- 穎脫……囊中の錐が柄まで囊から抜けるやうに人が才能をあらはすこと。
- 嬰孩……嬰兒、赤子。
- 夭折……早死。
- 天不勝德……邪は正に勝てぬこと。

- 要害……大切な所。
- 要衝……肝腎な場所。
- 要路……顯要な地位。
- 杳杳……深く暗いこと。
- 宵宵……深く暗いこと。
- 窈窕……深く暗いこと。
- 窈窕……奥深く静であること。
- 窈窕……物事を苦心して經營すること。
- 奕葉……代々。
- 奕葉……代々。
- 奕世……代々。
- 驛亭……宿驛。
- 驛長……宿驛の頭。

- 悅服……心から満足して服従すること。
- 越鳥巢南枝……故郷を思ふこと。
- 權草……その舊を革めて新に之を制すること。
- 延引……ひきのべること。
- 延袤……土地の廣いこと。
- 縵府……多くの人の縵を受ける所。
- 烟波……廣い河や海の水面がけぶつて居るやうに波立つて明らかでないこと。
- 偃武……兵亂がすんで太平になつたこと。
- 偃蹇……おごりたかぶること。又全く反對にしなやかなこと。

八

才の部

- 偃月刀……なぎなた。
- 偃鼠飲河不遇滿腹……人は皆二十日鼠が河の水を飲んでもどうせ腹一杯しか飲めぬやうに、いくら欲ばつても、自分の役に立つ所はきまつて居るから真にい加減にして置くがよいの意。
- 鉛槧……文筆。
- 淵藪……あつまる所。
- 燕雀安知鴻鵠志……小人が英雄の心を知らないこと。
- 鹽梅……程よく味をつけること。

- 汚隆……盛衰。
- 謳歌……天子の徳を人民が皆ほめること。
- 屋烏之愛……人を愛してはその屋根の上の烏迄愛する事。
- 市恩……人に恩を與へて自ら利をとること。
- 溫習……學んだ所を復習すること。
- 溫如玉……その性質が醇良で玉のやうであること。
- 溫良恭讓……聖人の容貌の形容。

- 下情……人民の情態。
- 下遇……最嚴なこと。
- 下學上達……人事を學び、天理に通達すること。
- 河魚之疾……腹中の病。
- 苛政猛於虎……苛酷な政治はその害が虎よりも甚しい。
- 夏后氏……禹。
- 夏爐冬扇……無用なこと。
- 家書抵萬金……旅行中家の人々の手紙をうけとれば萬金の價がある。
- 遐邇……遠近。
- 咬唾成珠……口をついてよい詩文の出来ること。

力の部

故事熟語之部

- 混濁……水涯……はてし。
- 剗切……極めて適切なこと。
- 街談巷語……世間の噂。
- 解題……書物の題目、著者、巻数沿革、内容を簡単に説明すること。
- 解體……船が港を出ること。
- 解頤……相手の人を自分の説に感服させ自失させること。
- 解頤……又は、相手の人を笑ふまゝと思ふても笑はずに居られぬやうにすること。
- 匪賦……少しの怨。
- 該博……萬事にかけて博く通じること。
- 慨然……志を奮ひおこすこと。
- 蓋世……天下を蓋ふほど勝れること。
- 皚皚……雪や霜の白いこと。
- 乞骸骨……老臣の辭職を願ふこと。
- 懈怠……おこたること。
- 諧謔……一寸したこと面白く思はせること。
- 邂逅……思ひがけなく出會ふこと。
- 九龍有悔……尊貴な身分になつた人は注意しないと失敗して後悔する。
- 江湖之人……民間に居る人。
- 好漢識好漢……同じ性質のもの
- 湯而穿井……事に臨んではじめ
- 葛藤……もとは「正しくないこと」の意であつたが、今では「紛争」の意に用ひられて居る。
- 被褐懷玉……外を飾らずに、内に徳を修めて居る事。
- 聞鼎無輕重……實力如何をためす
- 壁有耳……どこで誰が聞いて居るか解らぬこと。
- 上有好者、下必有甚之者……上の者があることを好めば、下のものはそれにな

- 豪傑……才徳の秀でた人 武勇ある人。
- 衡宇……粗末な家。
- 嚆矢……昔戦争のはじめに嚆矢(鎗矢)を發つた故事から一番はじめといふことになつた。
- 翱翔……鳥の飛びまはること。往きつもとどりつすること。
- 嚆矢者吹蓋……怒り過ぎること。
- 恪勤……誠實に勤めること。
- 赫怒……大いに怒ること。
- 諤諤……直言すること。
- 鶴淚……鶴の鳴聲。
- 學鳩笑二大鵬……小人が大人物の
- 行爲を笑ふこと。
- 櫛風沐雨……風雨にさらされて苦勞をすること。
- 比肩繼踵……多くの人が並んで立つこと。
- 決一勝千里之外……陣屋の内に居て必勝の策をたてること
- 合從連衡……韓魏趙燕楚齊の六國が攻守同盟を結んで秦に當るのを合從といひ、六國が皆秦に従ふことを連衡といふ。
- 割愛……愛する心を壓へること。
- 割據……土地を分つて根據地を守ること。
- 湯而穿井……事に臨んではじめ
- 葛藤……もとは「正しくないこと」の意であつたが、今では「紛争」の意に用ひられて居る。
- 被褐懷玉……外を飾らずに、内に徳を修めて居る事。
- 聞鼎無輕重……實力如何をためす
- 壁有耳……どこで誰が聞いて居るか解らぬこと。
- 上有好者、下必有甚之者……上の者があることを好めば、下のものはそれにな

漢文詳解研究の力

- 干戈……盾と戈……戦争。
- 干城……君のために楯となり、城となつて守る武士。
- 汗青……書物……歴史。
- 汗牛充棟……蔵書の多量のこと。
- 汗馬之勞……戦功。
- 早魃……日でり。
- 肝食……天子が政治につとめて晩く食すること。
- 披肝膽……真心を示すこと。
- 肝胆相照……互に心を示して隠さぬこと。

- 坎軻……轉軻と同じ、不遇。
- 邯鄲之夢……人間の榮枯盛衰は夢のやうなものである。
- 陷阱……おとしあな。
- 眼華……目のかすみこと。
- 眼孔大……見識の廣大なこと。
- 閑居……なにもせず家に居ること。
- 閑不……息……急促の甚しい事。
- 閑不容……樂……妻を一ついれるすきもない。
- 寒心……恐れる。
- 雁行……順序正しく進むこと。
- 雁書……音信。
- 絨口……だまつて居ること。

- 間行……人にさとられぬやうにしてゆくこと。
 - 緘黙……だまつて居ること。
 - 烏有……反哺之孝……鳥が父母に恩を報いること。
- キの部
- 緣木求魚……徒らに勞して功のないこと。
 - 危機……危い時機。
 - 危坐……正しく坐すること。
 - 危言……言を高峻にすること。
 - 危言存亡之秋……國の存在滅亡に關係ある大切な時。
 - 企及……企て及ぶこと。

- 杞憂……無用な心配。
- 希有……たまにあること。
- 忌憚……いみはかること。
- 奇貨可居……めづらしい物品を買ひこんで置いて時機を見て賣らうとすること。
- 出レ奇制勝……奇計を出して勝利を得ること。
- 季世……末世。
- 記問之學……たづねたことばかりおぼえて、その他には何も知らぬ淺はかな學問。
- 登レ鬼録……死ぬこと。

- 氣成レ虹……意氣の盛んなこと。
- 規模……物事を企てかまふる事。
- 規矩準繩……フンマハシ、サシガネ、水準器、スミナハ。
- 期功強近……甚近い親類。
- 茶局……茶寮。
- 曄然……歎むこと。
- 揮灑……字を書くこと。
- 揮毫……字をかくこと。
- 揆一……同じことの意味。
- 既望……十六日。
- 既往不……過ぎたことは仕方がない。
- 葵傾……心をかたむけ、そちらに向かう。

- 毀譽……そしることとほめる事。
- 義故……以前に恩義をうけた緣故あるもの。
- 箕裘之業……父祖の業をつぐこと。
- 龜鑑……手本。
- 窺窺……すきを伺ふこと。
- 觀視……望んではならん上の位に向つて希望すること。
- 附主龍尾……後進の人が先達の人によつてその徳を成しその名をなすこと。
- 顯服……賢士の隨役について居ること。
- 九重……宮中。
- 九鼎大呂……重々しいこと。

故事熟語之部

九重

九鼎

九鼎

- 牛驥同槽……賢人と愚者と同一の待遇をうける。
- 休戚……喜びと悲しみのこと。
- 易衣……一年たつこと。
- 來者不拒去者不追……來るも去るも自由にすること。
- 拮据……忙しくはたらくこと。
- 詰朝……明朝。
- 橋化爲積……人が境遇により變ることに譬ふ。
- 狐假虎威……威光あるもの威をかりて威張ること。
- 負笈……遊學すること。
- 君舟臣水……助くるものも時には害をすること。

- 巾車……かざれる車。
- 金科玉條……大切な規則。
- 金烏玉兔……日月。
- 金剛無缺……國家の堅固で完全な
- 金蘭之契……朋友の堅く交ること。
- 樺花一日榮……一時の榮花。
- 襟度……度量。
- 襟帶……めぐらすこと。
- 杏林……醫師。
- 鄉原……似而非道德者。
- 鄉貫……故郷。
- 強弩之末力……もつよかつたものが今衰へたこと。
- 久闊……久しく無沙汰して居ること。

- 穹窿……天。
- 窮蹙……寒帯の地。
- 窮措大……貧書生。
- 窮鳥入懷……困つたものが來りたよること。
- 窮猿奔林豈暇擇木……貧しいときには官祿を擇ばずに仕へること。
- 巨擘……群に抜き出る
- 居移氣……人はその地位境遇により氣分がらふこと。
- 魚鹽……海濱の産出物。
- 魚貫……列をつくつて行くこと。
- 虛心平意……心に何も思はず、靜

にして居ること。

- 舉止……舉動。
- 胸襟……胸中。
- 玉石俱焚……善きものも悪いものも共になくなる
- 玉石混淆……よいものも悪いものも區別のないこと。
- 街玉買石……よいものを示して悪いものを賣ること。
- 曲學阿世……邪曲の學問をして世の中におもねること。

ケの部

- 區區……細小な
- 虞芮爭田……他を見て吾を改むること。
- 愚者一得……愚人も稀にはよい考を出す
- 愚公移山……事業は怠まず擔ま
- 空中樓閣……空想。
- 空谷足音……非常に珍らしいこと
- 寓言……つくり話。
- 口尚乳臭……幼少な
- 唇亡齒寒……隣國が亡びればこち
- 隔靴搔痒……かゆい所に手がと

- 調話……字意と句意。
- 瓜田不履屐……嫌疑を避けること。
- 花押……書列。
- 剛鬚……英雄の事をあげずに居ること。
- 臥薪嘗膽……仇を報いるために苦心すること。
- 入二渦中……事件の中にまきこまれる
- 華胥の夢……よき夢。
- 畫龍點青……肝要な所。
- 蝸廬……小さな家。
- 蝸角之爭……小さな争。

- 回祿之災：…火災。
- 挂冠：…官を辭すること。
- 俛備：…からくり人形。
- 自隲始：…自分を自ら推し退けること。
- 魁梧：…身體の壯大なこと。
- 光風霽風：…胸中の清らかなこと。
- 光陰如箭：…日月の速く経過すること。
- 皇天后土：…天神地祇。
- 荒唐之言：…廣大てとりとめのない言。
- 黃口：…小兒。
- 遑々：…うろくすること。

- 曠世：…またと世にないこと。
- 曠日彌久：…空しく久しい間時を費すこと。
- 刮目：…目をこすつて丁寧に見ること。
- 欺語：…胸中をうちあけて語ること。
- 通款：…他國に好みを通じること。
- 換骨奪胎：…古人の意にもとづき古詩の意にもとづき、語をつくること。やきなほしの意。
- 蓋棺事定：…人の行の善悪は死後に初めて定る。

- 寬仁大度：…なまけ深く、度量の大きいこと。
- 管朋之交：…親密な交。
- 緩急：…危急。
- 圍視：…四方から見ること。
- 勸善懲惡：…善をなすものを獎勵し、惡をなすものを懲戒する。
- 鯨室孤獨：…困窮のもの。
- 以毛相馬：…外貌ばかり見て實を察しないこと。
- 兄弟鬩牆：…兄弟が牆の内でも争つても、外か

ケの部

- 形而上：…無形。
- 形容枯槁：…狀貌のやせ衰へたこと。
- 逕隔：…かけはなれて居ること。
- 經略：…天下を經營し天下を略有すること。
- 傾蓋：…一見故人の如く親しくすること。
- 輕諾寡信：…物事を容易くひきうけるものは、言行一致することが減多にない。

- 慧眼：…活眼。
- 盤雪：…苦學すること。
- 雞筋：…殆ど無用ではあるが捨てるとは惜しいふ意。
- 雞鳴狗盜：…賤劣な人。
- 雞栖鳳食：…君子が退けられて下位にあること。
- 警咳：…言笑。
- 警蹕：…天子の出入のとき通行止めをすること。
- 僥倖：…思ひ設けぬ利益を得ること。
- 逆鱗：…人君の怒。
- 逆旅：…宿屋。
- 缺舌：…野蠻人の聲。

- 月旦：…人の評すること。
- 決河：…堤防が壊れて河水の溢れること。
- 結草：…恩を報じること。
- 闕下：…天子の宮闕の下。
- 犬馬之心：…臣下が忠義をつくさうと思ふ心。
- 犬馬之年：…自分の年を卑下していふ。
- 元后：…天子。
- 卷土重來：…一度失敗したものが再び勢力を得て攻めて來ること。
- 軒輊：…優劣あること。
- 獯介：…自分の分を守つて不義を

故事熟語之部

「」の部

- 季筭…：まじめに謚み深いこと。
- 眷族…：一族。
- 牽制…：ひっぱられて一身の自由にならぬこと。
- 研鑽…：研究すること。
- 堅甲利兵…：精兵。
- 萱堂…：母、母の居る所には萱を植えて世の憂を忘れさすのである。
- 黔首…：人民。
- 蹇蹇…：臣下が君のためにはたらくこと。
- 五夜…：一夜をわけて五夜とす、五更ともいふ。五夜は、甲夜(午後八時)乙夜(十時)丙夜(十二時)丁夜(午前二時)戊夜(四時)戊夜を五更、丁夜を四更、丙夜を三更、乙夜を二更、甲夜を一更といふ。
- 吳下阿蒙…：學問のないつまらん人。
- 恬憍…：父母、死んだ父母。
- 故事…：昔あつたこと。
- 胡盧…：口をおさへて大笑すること。
- 湖海之士…：民間に居る士。
- 鼓吹…：傍から鳴物をならして助けること。
- 鼓舞…：人をすゝめてはげますこと。
- 鼓腹擊壤…：太平の民の樂んで居ること。
- 鳴鼓而攻之…：その人の罪を堂々とせめること。
- 誇張…：小さいことを大きくいふこと。
- 餽口…：口すぎ。
- 口實…：云ひぐさ。
- 口碑…：云ひつたへ。

- 口耳之學…：耳から聞いてすぐ他の人に傳へるだけで、何も自分を利することのない學問。小人の學問。
- 公卿…：三公九卿。
- 公子王孫…：貴族の子弟。
- 巧言令色…：言葉や顔色をつくるつて、人の機嫌をとる、内心に實意のないこと。
- 膏粱…：大切な所。
- 拘泥…：かまはりなづむこと。
- 苟安…：一時の樂をむさぼること。
- 紅日…：朝日。
- 後生可畏…：後進の人ほど恐ろしいに發達するか解らない恐るべきである。
- 倥傯…：いそがしいこと。
- 鴻恩…：大恩。
- 刻漏…：水時計。
- 國是…：國の方針。
- 國步…：國の運命。
- 國士…：才徳一國を蓋ふ人。
- 國手…：名醫、醫者の敬稱。
- 黒子…：ほくろ。
- 黒風白雨…：暴風雨。
- 忽焉…：俄に。
- 忽諸…：一體は忽につきるといふ意であるが、今は誤つて「ゆるがせ」の意に用ひて居る。
- 骨董…：古道具。
- 骨肉之親…：親子兄弟の親み。
- 骨鯁之臣…：剛直の臣。
- 滑稽…：知識豊富でどんな問題でもすらすらと解くこと。後には「おどける」意となつた。
- 糊塗…：「こつとつ」と讀む。あきらかでないこと。
- 頃者…：近日。
- 劫火…：大火災。
- 袞衣…：天子の衣服。
- 左道…：邪道。

故事熟語之部

サの部

- 左遷：…官位を貶され、遠地に流されること。
- 沙汰：…よいものとわるいものとわけること。今は我國では「しらせ」「音信」などの意味に誤つて用ひて居る。
- 座右銘：…聖賢の格言などを自分の側に書いておいて、朝夕に見るもの。
- 豺狼：…やまいぬ、とおほかみで、猛惡をあきることを知らぬものに譬へる。
- 宰相：…天子を相けて政をとる人
- 歲月不_レ待_レ人：…光陰を惜むべき

- 寒翁馬：…何が幸になるかわからぬこと。
- 爪牙之臣：…國家の輔弼の臣。
- 爭臣：…君に非のあるときに諫める臣下。
- 爭友：…非のあるときに忠告する友。
- 爭子：…父母の非行を諫める子。
- 草創：…ことをはじめること。
- 草昧：…世の中のひらけはじめ。
- 草莽危言：…民間に居て國政を痛論すること。中井竹山はこの言葉をとつて、書物の題とした。

- 草莽之臣：…仕官せず民間に居る臣下。
- 桑梓：…故郷。
- 桑門：…僧侶。
- 倉廩實令_レ固_レ空：…民が富有になれば牢に入るものがなくなる。
- 造化：…天地。
- 造詣：…人の家に行くこと。學問の深く進むこと。
- 造物者：…萬物を創造した神。
- 造次顛沛：…かりそめのいそがしい時。
- 創見：…はじめての發見。
- 喪家之狗：…喪ある家の犬

- 滄桑變：…時勢の變遷。
- 滄海遺珠：…世に珍らしいこと。
- 蒼生：…人民。
- 臧否：…よしあし。
- 操觚：…文章を作ること。
- 糟糠之妻：…共に貧賤な生活をした時代の妻。
- 騷人：…屈原、宋玉一派の文人、又詩人のこともいふ。
- 騷客：…詩人のこと。
- 朔晦：…「ついでち」と「みそか」
- 朔風：…北風。
- 噴噴：…口やかましいこと。
- 錯綜：…入りまじること。
- 册子：…帳簿。

- 殺風景：…風景を害すること。
- 雜居：…入りまじりて居ること。
- 三才：…天地人。
- 三光：…日月星。
- 三伏：…夏九十日の間。
- 三代：…夏殷周。
- 三公：…太師、太傅、太保。
- 三槐：…三公。
- 三軍：…大國の諸侯の率ゐる軍、大軍。
- 三昧：…心をこめて、道の奥義を考へて、その妙所を得ること。
- 三綱：…君臣、父子、夫婦。
- 三省：…幾度となく我身をかへり

- 三年不_レ飛：…何か志のあるものがしばらく落付いて何もせずに居ること。
- 産業：…生産事業。
- 棧道：…かけはし。
- 梁爛：…はやかて、はつきりして居ること。
- 酸鼻：…いたましいこと。
- 嶄然見_レ頭角：…多くの人の中で一きわ目立つて居ること。
- 慘澹：…痛ましいこと。
- 慚愧：…はぢること。
- 遮莫：…まよ。
- 去者日_レ疎：…死んだ人はだんぐ

忘れられること。

シの部

- 士……學問あり道理に明らかな人
- 士爲^ル知^ル己^ノ死……士は自分の心をよく知つて居る人のためなら命でも捨てる。
- 尸位素餐……功なく祿を食む事。
- 支給……はかつて給與すること。
- 支離……分れ／＼になつて全からぬこと。
- 四海……四方の海、天下。
- 四夷……東夷北狄西戎南蠻。
- 四六文……四字、六字の句の文章

- 四書……四書……孔子曾子思子孟子のつくつた書、論語大學、中庸、孟子をいふ
- 四面楚歌……敵にかこまれて一人の援もないこと。
- 四分五裂……亂れること。
- 四通八達……諸方へ往來できる便利な所。
- 四海波靜……天下泰平。
- 四海兄弟……天下中の人は皆兄弟の意。
- 史乘……歴史。
- 市利……市場で得る利益。
- 市井……市をなす所。
- 市道之交……利のあるときは仲よ

- 四書……四書……孔子曾子思子孟子のつくつた書、論語大學、中庸、孟子をいふ
- 四而楚歌……敵にかこまれて一人の援もないこと。
- 四分五裂……亂れること。
- 四通八達……諸方へ往來できる便利な所。
- 四海波靜……天下泰平。
- 四海兄弟……天下中の人は皆兄弟の意。
- 史乘……歴史。
- 市利……市場で得る利益。
- 市井……市をなす所。
- 市道之交……利のあるときは仲よ

くし、利がなくなれば離れてしまふ交。

手
陳
氏
氏
氏

こと。

- 耳食……人のいふことを聞いても考へないこと。
- 耳孫……遠孫。
- 自負……自分に恃む所あつて誇る

- 自暴自棄……やゝになること。
- 自家擔着……矛盾すること。
- 私淑……自分の心の中に或人の道を慕つてそれによつて自分の身を善くすること。
- 如^ル入^ル芝^ノ蘭^ノ之^ノ室……善い人と交際すると自然と善いことをするやうに感化されること。

故事熟語之部

- 志士仁人……國家のことを考へ、人民を救済しようとして考へて居る人。
- 而立……三十歳のこと。
- 志學……十五歳のこと。
- 孜孜……勉強して怠らぬこと。
- 枝葉……枝と葉、轉じて「末」といふ意になる。
- 侍讀……君主に侍して書物を講ずる人。
- 侍講……君主に侍して書物を講ずる人。
- 指南……學問藝術を教授すること
- 指掌……極めてやさしいこと。
- 咫尺……距離の近いこと。

- 志士仁人……國家のことを考へ、人民を救済しようとして考へて居る人。
- 而立……三十歳のこと。
- 志學……十五歳のこと。
- 孜孜……勉強して怠らぬこと。
- 枝葉……枝と葉、轉じて「末」といふ意になる。
- 侍讀……君主に侍して書物を講ずる人。
- 侍講……君主に侍して書物を講ずる人。
- 指南……學問藝術を教授すること
- 指掌……極めてやさしいこと。
- 咫尺……距離の近いこと。

- 師表……模範。
- 時雨之化……恩澤の徧く及ぶ事。
- 時産之奠……其節相應の供物。
- 紫奪^レ朱……悪い人物が正しい人物の風をして、人を欺くこと。
- 斯文……儒教を奉ずる人の守る道。
- 獅子奮迅勢……はげしい勢を出す
- 獅子身中蟲……内から害を生じるもの。
- 雌伏……屈伏すること。
- 決^ス雌^ニ雄^ニ……勝敗を決すること。
- 縮流……僧侶。
- 縮徒……僧侶。

- 師表……模範。
- 時雨之化……恩澤の徧く及ぶ事。
- 時産之奠……其節相應の供物。
- 紫奪^レ朱……悪い人物が正しい人物の風をして、人を欺くこと。
- 斯文……儒教を奉ずる人の守る道。
- 獅子奮迅勢……はげしい勢を出す
- 獅子身中蟲……内から害を生じるもの。
- 雌伏……屈伏すること。
- 決^ス雌^ニ雄^ニ……勝敗を決すること。
- 縮流……僧侶。
- 縮徒……僧侶。

○慈母有_ニ敗子_一：慈愛の過ぎた母には我儘な子の出来ること。
 ○爾來_ニ：それから後。
 ○駟不_レ及_レ舌_一：一旦口から出したことはとりかへしが付かぬ。
 ○無_レ餌之_レ鈎不_レ可_ニ以_レ得_レ魚_一：資本がなくては利益を得らぬこと。
 ○周章_ニ：あはてること。
 ○周而不_レ比_一：公平無私なこと。
 ○私霜_ニ：威光の盛んなこと。志操のしつかりしたこと。
 ○秋毫_ニ：ものべ微細なこと。
 ○柔能制_レ剛_一：弱いものがかへつてつよいものを制すること。
 ○袖手_ニ：懐手して居ること。
 ○愁眉_ニ：憂ひて眉をひそめること。
 ○鞅韉_ニ：ブランコ。
 ○驟雨不_レ終_一：勢のひどいものは長つゞきしないこと。
 ○指_レ鹿爲_レ馬_一：事を設けて人を欺くこと。
 ○逐_レ鹿者不_レ見_レ山_一：利欲に迷ふものは道理を忘れる事。
 ○逐_レ鹿者不_レ顧_レ兎_一：大利を欲するものは小利を顧みないこと。
 ○卷_レ舌_一：驚くこと。
 ○七頭八倒_ニ：甚しく苦しむこと。
 ○失脚_ニ：足を踏みはずすこと。
 ○叱咤_ニ：大聲を出すこと。
 ○執事_ニ：左右に居て事を執るもの。
 ○執權_ニ：政權をとるもの。
 ○質_レ：飾りけのないこと。
 ○櫛風沐雨_ニ：風雨の中を奔走すること。
 ○十哲_ニ：十人の勝れた人。
 ○十干_ニ：甲乙丙丁戊己庚辛壬癸。
 ○十善_ニ：人の行ふべき十の善事。
 ○十惡_ニ：人の禁すべき十の惡事。
 ○十字街_ニ：四辻。

○十二支_ニ：子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥。
 ○十八公_ニ：松。
 ○十日之_レ菊_一：時おくれのこと。
 ○十風五雨_ニ：十日に一度風ふき、五日に一度雨ふること。
 ○什器_ニ：家財。
 ○人日_ニ：一月七日。
 ○人中龍_ニ：非凡な人。
 ○落_レ人後_一：人に劣ること。
 ○膾_レ炙_レ人口_一：人の口によくかけられること。
 ○人生感_レ意氣_一：人がある人の恩に感激すること。
 ○心事_ニ：心持。
 ○心術_ニ：心立。
 ○心醉_ニ：夢中になつて感服すること。
 ○心畫_ニ：文字。
 ○仁_ニ：心の徳。
 ○仁者樂_レ山_一：心の徳の修まつた人は義理に安んじて、手厚く重々しく山に似た所がある。従つて山を樂む。
 ○任俠_ニ：男達。
 ○身體髮膚_ニ：身體。
 ○迅雷疾風_ニ：激しい雷と、烈しい風。
 ○呻吟_ニ：うめくこと。
 ○津津_ニ：あふれこと。
 ○漫漶之_レ語_一：長い間かゝつて人を次第々々に讒言すること。
 ○荏苒_ニ：ながびくこと。
 ○眞如_ニ：すべてのもの、眞の性質。
 ○深謀遠慮_ニ：深くその原因結果を考へて、未來の利害まで考へること。
 ○唇齒之_レ固_一：密接な利害關係のある固。
 ○晨門_ニ：門番。
 ○參差_ニ：長短の同じでないこと。
 ○衽席_ニ：寢具。
 ○進士_ニ：唐の時士を採用するのに詩賦を以つて試験し、採用するのを進士といふ。

- 進退維谷：…どうすることもできなくなる。
- 軫念：…心配すること。
- 森羅萬象：…天地間のあらゆる現象。
- 尋常：…輕少、普通。
- 斟酌：…場合を見はからふこと。
- 播紳：…高位高官の人。
- 盡忠報國：…忠義をつくして國家に報いること。
- 震怒：…天子の怒。
- 親炙：…親しくその人について教育せられること。
- 盡臣：…忠義をつすく臣下。
- 沙門：…僧侶。
- 社稷：…國家。
- 社稷臣：…國家の安危に任ずる臣下。
- 洒落：…心のさつぱりして居ること。
- 這般：…この。
- 上弦：…八九日頃。
- 上梓：…書籍を版に刻ること。
- 上洛：…都に上ること。
- 尙齒：…老人を尊ぶこと。
- 相國：…宰相。
- 庠序：…學校。
- 城狐社鼠：…君側の姦臣。
- 城下之盟：…降服を求め、盟を受けること。
- 不_レ設_二城府_一：…人に肝膽を披いて接し、威張らないこと。
- 商賈：…商人。
- 商旅：…旅商人。
- 商鑑：…股鑑。
- 商軍：…よき程にはからふこと。
- 猖獗：…我儘で抑へ制することの出来ぬこと。
- 常平倉：…米穀を貯へ置き、米價を法律にて均一にし、人民が米價が騰貴しても困らぬやうにすること。
- 常山蛇勢：…左右前後相應すること。
- 指_レ掌_二：…明白で平易なこと。

- 掌握：…手中におさめること。
- 傷弓之鳥：…前事に懲りて後事をつゝしむこと。
- 膏膽：…復仇をするために苦心すること。
- 嫦娥：…月の異名。
- 叢者：…さきに。
- 尺有所_レ短寸有所_レ長：…用ひ方で賢者も劣ることもあり、愚者も優ることがある。
- 弱冠：…二十歳。
- 雀躍：…非常に喜ぶこと。
- 主張：…持論。
- 足恭：…度を過した恭敬。
- 首鼠兩端：…疑深く進退決しないこと。
- 守_レ株待_レ免：…徒らに舊習に拘つて、融通するきかぬこと。
- 殊死：…死を決して戦ふこと。
- 須臾：…しばらく。
- 爲_二豎子名_一：…平常馬鹿にして居たものが功名をすること。
- 樹_レ欲_レ靜_レ而風不_レ止：…子が孝行をしようと思ふ時には親は死んでしまつて居ること。
- 終焉：…死ぬこと。
- 終止如_レ一：…始から終までかはらぬこと。
- 縱橫之學：…戰國時代の策士の術。
- 夙夜：…朝早く起き、夜遅くねてはげむこと。
- 祝融：…火の神。
- 祝融之災：…火災。
- 祝髮：…髮を剃ること。
- 倏忽：…忽ち。
- 宿老：…年とつたもの。
- 宿將：…經驗ある老将。
- 宿怨：…積年の怨。
- 肅肅：…つゝしむこと。
- 菽水之歡：…貧にし善く親に仕ふること。
- 不_レ能_レ辨_二菽麥_一：…愚て菽と麥との區別さへ出来ぬこと。

- 出藍……弟人の師に勝ること。
- 俊髦……俊れた人。
- 逡巡……後へ退くこと。
- 馴致……だん／＼と馴れさせること
- 醇朴……人情がすれて居ないこと
- 諄々……懇に詳しく説くこと。
- 冗長……無用にくだ／＼しい。
- 勝敗之數……勝敗の運。
- 縱囚……臨時に罪人を許すこと。
- 式微……衰微。
- 食言……偽ること。
- 食指動……美味を食し得る前兆。
- 食手之氣……幼少で勝れた志のあること。
- 獨犬吠日……常人の行を非常識

スの部

- 屬目……目をそよいで見ること。
- 水師……海軍。
- 水魚……友、君臣の親しいこと。
- 出納……出し入れ、支出収入。
- 垂涎……物を欲しがること。
- 推舉……人を上へ薦めること。
- 推輓……人を上へ薦めること。
- 推敲……苦心して字句を練ること
- 揣摩……自分の人を以て人の人を推測すること。
- 醉生夢死……何もせず一生空しく暮すこと。

セの部

- 誰何……姓名を問ひ質すこと。
- 芻蕘……微賤なもの。
- 數奇……不運。
- 樞機……肝要な所。
- 樞要……大切なこと。
- 寸陰……極めて僅な時間。
- 寸馬豆人……遠くから眺めると人馬が小さく見えること。
- 寸鐵殺人……僅か一寸位な刃物で人を殺すといふことから、議論や文章に一寸とした言葉で人の胸をつくことをいふ。

- 是是非非……正しいことを正し、いとし、正しくないことを正しくないとすること
- 井蛙……見聞の狭い人。
- 世襲……父から傳へること。
- 不世襲……的をはげめない。
- 青陽……春。
- 青襟……學生。
- 青史……歴史。
- 青眼……機嫌よく人を視る眼つき
- 青天白日……元來は「晴れ渡つた天の様子」「明らかなこと」「轉じて、「冤罪のものが無罪になること」
- 青天霹靂……思ひがけないこと。

- 青雲之志……手柄を立て徳を建てること。立身したいといふ希望。
- 柄鑿不相容……あてはまらぬこと。
- 星霜……一年。
- 落井下石……危難に陥つた人に更に害を與へること。
- 清談……俗氣を帯びない談論。
- 清貧……正しい行をして貧を守つて居ること。
- 清楚……さっぱりして居ること。
- 盛者必衰……榮えて居るものは必ず怠る心を起して衰へること。

- 逝去……人の死ぬこと。
- 掣肘……人の自由を束縛すること
- 晴嵐……晴れた日に山から起る氣
- 聖斷……天子の決斷。
- 聖壽……天子の年齢。
- 聖謨……天子の計畫。
- 勢利之交……權勢利益の交。
- 齊東野人之語……妄説。
- 靜謐……静かなこと。
- 噉臍……甚だした後悔。
- 聲價……評判。
- 通聲問……音信をすること。
- 濟濟多士……人才の多いこと。
- 贅疣……無用なもの。
- 贅言……無用な言葉。

- 小人：…庶民、徳なき人。
- 小康：…世の中の一才治ること。
- 小心翼翼：…一生懸命に心配して氣をつけること。
- 小人之勇：…血氣無謀の勇。
- 消息：…たより。
- 消長：…盛衰。
- 宵衣：…天子が政に勵むこと。
- 宵衣旰食：…天子が政に勵むこと
- 逍遙：…ぶら／＼とあちらこちら
- 焦土：…火事のため宮室も焼けて土となること。
- 焦眉之急：…危急なことの迫つて

- 銷夏：…夏の暑さを感じぬやうにすること。
- 霄壤：…天地。
- 憔悴：…やせ衰へること。
- 瀟洒：…清らかなこと。
- 饒舌：…おしゃべり。
- 尺牘：…手紙。
- 尺璧屈求：…一時屈服して他日大事業をしようとする
- 赤心：…真心。
- 席不暇暖：…奔走して居所に落付いて居ぬこと。
- 碩學：…大學者。
- 積善之家有餘慶：…善事を度々

- 釋然：…心の中がさっぱりすること。
- 釋典：…周公又は孔子を學校で祭ること。
- 切瑨琢磨：…學問を上げむこと。
- 折中：…中をとること。
- 折衝：…敵の衝いて來るのを折きとめること。
- 拙速：…下手でも敏捷にやること。
- 絕倫：…秀でゝ居ること。
- 絕域：…遠い外國。
- 絶倒：…感情が極度に達して外面にあらはれること。

- 捷徑：…近路。
- 千金子不垂堂：…富人の子は深く自愛すること。
- 千羊之皮不如一狐之腋：…多勢の愚人は一人の賢人に如かぬこと。
- 先天：…生れぬさき。
- 芊芊：…草の茂ること。
- 前門拒虎後門進狼：…やつと一つの禍を免れたかと思ふと又他の禍がおこる。
- 專制：…獨斷で事を定めること。
- 專攻：…一つの科目を修めること
- 然諾：…承諾。
- 僉議：…多勢で相談すること。

- 戰戰兢兢：…恐れ謹むこと。
- 僭越：…身分に過ぎたこと。
- 擅恣：…勝手氣儘をすること。
- 禪位：…天子が位をゆづること。

リの部

- 俎豆：…俎は肉をのせる祭器、豆は菜を盛る祭器。
- 越俎代庖：…自分の分限を越えて他人の職權を犯すこと
- 祖道：…旅立つものを送る宴會。
- 措大：…書生。
- 齟齬：…ものゝくひちがふこと。
- 宋襄之仁：…度の過ぎた仁。
- 宗社：…國家。

タの部

- 總角之好：…幼時の親しき交。
- 束脩：…始めて師に見えるときの贈物。
- 束帶：…禮服をつけ、大帶をつけること。
- 惻隱之心：…同情の心。
- 續貂之譏：…わるいものを善いものにつぐといふこと。
- 卒伍：…民籍。
- 付度：…自分の心を以て人の心を測ること。
- 樽俎折衝：…外交。
- 他山之石：…不善人も善人の徳を

- 多岐亡羊：學問の道が多過ぎて真理を失ふこと。
- 兌換：易えること。
- 畫蛇添足：無用なことをすること。
- 茶毘：火で焼くこと。
- 墮落：おちること。惡道に陥ること。
- 儒夫：意氣地なし。
- 大瀛：海。

- 大兼小：大きいものは小なるものゝ代用もすること。
- 大器晩成：大才能の人は速かに出来上らぬこと。
- 大義滅親：大切な道のために父の私情を捨てること。
- 大姦似忠：大姦人のすること。は巧みであるから大忠臣のやうに見える。
- 大行不顧細謹：大事をするには小事に拘はらないこと。
- 大履類非一木所支：國家のくつがへるときには一人の

- 太牢：牛羊豚の牲具はること。力ではさへることは出来ぬ。
- 泰然：落付いて居ること。轉じて非常な御驥走といふことになる。
- 泰斗：人の尊崇すること。
- 泰山之礱穿石：少しの力でもつゞけてすれば大功をすること。
- 泰山不讓土壤：度量を廣くして物を多く容れること。
- 泰山崩於前而色不變：落付いて居ること。
- 帶甲：兵卒。

- 第一義：第一等の義理。
- 第一流：第一等。
- 臺閣：内閣。
- 頽齡：老年。
- 刀筆之吏：記録の小吏。
- 桃李滿門：俊才が門下に澤山居ること。
- 桃李不言下自成蹊：優れた人の所へは自然と人が歸服して来る。
- 陶冶：師が弟子を教育すること。
- 陶犬瓦雞：無用のもの。
- 陶朱猗頓之富：莫大な富。
- 升堂入室：次第に道の奥儀を極めること。

- 當局者：その衝にあつて事をとる人。
- 當路之人：重要な地位にある大臣。
- 滔滔：水の盛に流れること。水の盛に流れるやうなこと。
- 瞪若：非常に感じ、又は非常に畏れて目をみはること。
- 螳螂當車輻：力を量らずに大敵に當ること。
- 抱薪救火：害の益々甚だしいこと。
- 車卒：落着。
- 琢磨：玉をみがくこと。勉勵すること。

- 踴躍風發：才氣の優れたこと。
- 諸諾：はい／＼いふこと。
- 謫居：咎によつて流されて居ること。
- 脫兔之勢：迅速なこと。
- 反掌：やさしいこと。
- 踏青：春日郊外に遊ぶこと。
- 斃而後已：死ぬまで勤勉すること。
- 以卵投石：非に破れ易いこと。
- 抱炭希涼：行ふことと願ふ所と反對であること。
- 淡如水：あつさりし水の水やうである。
- 食婪：金錢食物を愛し欲すること。

- 單刀直入：…一刀を持って敵中に斬こむこと。正面からぶつかること。
- 短兵急：…刀劍を以て急に攻めること。
- 短綆不可汲深井：…學識の淺いものは深い道理を解することができぬこと。
- 端正：…正しいこと。
- 不知端倪：…本末終始を知ることが出来ぬこと。
- 圍樂：…和樂すること。
- 彈劾：…百官の罪を推窮して天子に申上げること。

- 彈丸黑子：…狭小な地。
- 談柄：…話の種。
- 淡泊：…さつぱりして居ること。
- 膽如斗：…膽の大きいこと。
- 膽大心小：…膽力はしつかりと、注意は細かくすること。
- 簞食壺漿：…食を竹器に入れ、汁を壺に入れること。
- 斷末魔：…臨終の時。
- 斷金之交：…友人の堅い交。
- 攤書：…本を開くこと。
- 誰知馬之雌雄：…是非を別らににくいこと。

- 知己：…よく己を知る人。
- 知命之年：…五十。
- 知者樂水：…知者は道理に達し周流し、滯ることなきは水に似て居る。故に水を好む。
- 持論：…自分が持つて居る一家の議論。
- 致仕：…官を辭すること。
- 知者見未萌：…事のおこらぬ中に知者は察すること。
- 踟躕：…躊躇。
- 魑魅罔兩：…山水の怪物。
- 疑人前說夢：…馬鹿馬鹿しいこと。

チの部

- 力拔山氣蓋：…勇氣の盛んなこと。
- 竹帛：…書物、歴史。
- 竹馬好：…幼時の交。
- 世恠：…はぢること。
- 逐電：…速力の速いこと。逃げ失せること。
- 逐一：…一々。
- 昵近：…親しむこと。
- 椿萱：…父母。
- 長驅：…長い間走つて留らぬこと。
- 不挾長：…人に向つて才智藝能を誇らぬこと。
- 長目飛耳：…書籍。
- 張三李四：…平凡な人。

- 嫡嫡：…嫡子。
- 中元：…七月十五日。
- 中秋：…八月十五日。
- 中堅：…中軍。
- 中庸：…過不及なきこと。
- 中原之鹿：…中原は天下、鹿は帝位。
- 忠恕：…眞心をつくし、思ひやりのあること。
- 柱石：…國家の重任を負ふ人。
- 柱石之臣：…國家の重任を負ふ臣下。
- 膠柱鼓瑟：…融通のきかぬ事。

- 怵惕：…驚き動くこと。
- 黜陟：…功なきものの官を退け、功あるもの官を進のこと。
- 女子與小人難養：…女とつまらん男とは道理が解らぬので養ひにくい。
- 楮先生：…紙。
- 徵逐：…往來。
- 寵命優渥：…天子の尊い仰せの手厚いこと。
- 塵積爲山：…小がかさなつて大となること。

ツの部

- 杜撰……著作物等に誤多きこと。
- 痛切……身にこたへて。
- 痛痒……いたかゆさ。
- 鳴鼓攻之……罪を數へたて、正々堂々とせめること。

テの部

- 手不釋卷……勉強して倦まぬこと。
- 低回……心に思ふことがあつて、ず／＼して居ること。
- 定款……一定の規則。
- 泥中蓮……汚れたものゝ中の清いもの。
- 亭午……正午。

- 庭訓……家庭の教育。
- 提要……要領をつかむこと。
- 兆民……萬民。
- 鳥跡……文字。
- 朝儀……朝廷の儀式。
- 朝令暮改……度々命令をあらためること。
- 朝三暮四……詐術を用ひて人を愚弄すること。
- 跳梁……飛び走ること。
- 雕蟲小技……文章の字句を飾りたてること。
- 倜儻……人にすぐれて大志あること。
- 敵愾……正の恨み怒る所のものに

- 觀面……面前、見て居中。
- 哲人……道理に通じた人。
- 徹頭徹尾……始めから終まで。
- 鐵面皮……厚顔で恥み知らぬこと。
- 鐵中錚錚……凡庸なものゝ中で少しすぐれたもの。
- 鐵心石腸……志操のしつかりして居ること。
- 喋喋……べちゃ／＼しゃべること。
- 移牒……照會の文書を出すこと。
- 天命……天の意志。
- 天道……天の道理。
- 大理……天の修理。
- 天爵……天から與へられた美德。

- 天才……天性の才智。
- 天機……天意。
- 天下之奇才……天下第一の靈妙な手腕のある人。
- 天涯海角……天の限界、地の邊境、非常に遠くかけはなれたこと。
- 天真爛漫……少しも飾るところなく、天真をあらはすこと。
- 天步艱難……天運到らず時が艱難であること。
- 天無二日……天に二つ太陽がなく、國に天子が二人ないといふこと。
- 仰天而唾……害が自分の身に及

- 橫行天下……世の中に居て我儘をして居ること。
- 笑殺天下之人……天下の人を笑はす。
- 天柱折地維缺……紛亂の甚しいこと。
- 天津橋開……天津橋の上で「ほととぎす」の鳴くのを聞いて天下の亂れることを知つたこと。
- 天網恢恢疎而不失……天の網は目があらいけれども善惡の報のれぬこと。
- 典故……しきたり。

- 典據……正確な證據。
- 殄滅……皆滅ぼすこと。
- 恬然……安らかにして居ること。
- 展墓……墓參。
- 添削……文章詩文を字を添へたり削つたりして直すこと。
- 傳播……さきへ／＼とひろげてゆくこと。
- 諛諛……へつらふこと。
- 點滴……あまたれ。
- 輾轉反側……ねかへりばかりして安らかでないこと。
- 頭末……本末。
- 纏綿……まとひついて離れないこと。

トの部

- 土着：その土地に常住して居るもの。
- 土崩瓦解：全く潰亂すること。
- 吐露：包み隠さず述べること。
- 吐哺握髮：食事の時客が来れば口中の食を吐き出して之を迎へ、髮を洗ふときは髮を握つて之を迎へ、賢才の人を得ることにつとめること。
- 度外：勘定の中に入れぬこと。
- 屠龍之技：役に立たぬこと。
- 都督：總督。

- 都人士：都會の人々。
- 塗炭：ぬり消すこと。
- 塗炭之苦：泥中に陥り、火中に陥つて救ふものなき苦、民の苦。
- 驚馬十駕：鈍才のものも勉強すれば俊才のものと同じに肩をならべることが出来る。
- 冬扇夏爐：無用のもの。
- 同胞：兄弟。
- 同袍：朋友。
- 同窓：同じ師について學んだもの。
- 同舟相救：利害の同じものは互に助けあふこと。

- 同病相憐：同じ艱苦を嘗めるものは同情しあふこと。
- 東道主人：道案内。
- 偷安：一時の安樂を食ふこと。
- 登遐：天子の崩すること。
- 登極：天子の即位。
- 棟梁：國家の重任を負ふこと。
- 見頭角：多くの人の中から勝れること。
- 特立獨行：自分の信ずる所を行つて一世に獨行すること。
- 得度：僧になること。
- 德音：善言。
- 獨眼龍：片目の英雄。
- 獨學孤陋：一人で勉學し師友の

ないものは見聞の狭いこと。

- 吶喊：おめきさげぶこと。
- 突梯滑楮：少しも逆らはず巧みに移り進むこと。
- 吞舟之魚：舟を呑む大きな魚。
- 履虎尾：危険なこと。
- 畫虎類狗：ものを模倣して失敗すること。

ナの部

- 内憂外患：國內におこる心配と外國から攻めてくる心配。
- 南山之壽：長壽。
- 南柯夢：夢。

故事熟語之部

- 南面之尊：天子。
- 喃喃：べちやいふこと。
- 揮淚斬馬腹：忍びないのをこらへて規則を正しく行ふこと。
- 出三平爾者反三平爾：おのれから出たことは善惡ともにおのれにかへる。

ニの部

- 二柄：徳と刑罰。
- 二千石：一郡の太守。
- 似而非者：外見は似て居るが實はちがふもの。
- 以肉委餓虎：益なく害ある

又の部

- 衣錦夜行：富貴な身分なつても故郷に歸らないこと。
- 齎盜食：敵に力を添ること。

ネの部

- 倅人：口さきの上手な人。

ノの部

- 龍事畢：自分のすることはおはつたの意。

ハの部

- 波及：…餘が次第に他に及ぶこと
- 破天荒：…前例のないことをすること。
- 破竹勢：…少しも食ひとめられず敵をどん／＼と打ち敗ること。
- 馬食：…箸、匕の類を用ひず口をついて食すること。一般には大食すること。
- 馬耳東風：…人の云ふことを口に溜めないこと。
- 露馬脚：…詐りがあらはれること。
- 馬革裹尸：…戦死すること。
- 霸者：…諸侯の旗頭。
- 沛然：…雨のはげしく降ること。
- 肺肝：…真心。
- 杯盤狼藉：…酒宴の席の亂れて居ること。
- 枚舉：…數へたてる。
- 衡枚：…口に小さな棒をふくみその棒の兩端に糸をつけ後頭でしばつて語を發しないやうにすること。
- 胚胎：…ものゝはじめ。
- 背馳：…相反すること。
- 背水之陣：…決死して敵に當ること。
- 稗史：…小説。
- 輩出：…續出すること。
- 彷徨：…さまよふ。
- 忘年交：…年齡をとはず、才徳を以て交ること。
- 方寸：…心。
- 抱負：…志。
- 抱關擊析：…門番夜番。
- 咆哮：…猛り怒ること。
- 傍若無人：…眼中人なきこと。
- 以貌取人：…容貌のみを見て人を採用すること。
- 貌言華至言實：…外貌をつくらふていふ言葉は實がない、まじめにいふ言葉には實がある。
- 飽衣暖食：…衣食を贅澤にすること。

- 暴虎馮河：…無謀なことをすること。
- 運籌于帷幄之中：…陣中に居て戦略を定めること。
- 白波：…盗賊。
- 白眼：…機嫌悪く人を見ること。
- 白眉：…多くの人の中で優れて居ること。
- 白虹貫日：…兵亂のある前兆。
- 三復白圭：…言語を謹むこと。
- 如白駒過隙：…日月の極めて早く過ぎること。
- 伯仲之間：…優劣の甚だしくないこと。
- 莫大：…非常に大いなこと。
- 莫逆之友：…互に逆ふことのない友。
- 麥秋：…陰曆四月。
- 博雅：…ひろく正しいこと。
- 八面玲瓏：…どちらから見ても、光澤あり透明に見えること。
- 金埒：…恥をしのぶこと。
- 末節：…つまらぬこと。
- 拔萃：…多くのものからすぐれて居ること。今は多くのものからよいものをひきぬく意に用ひて居る。
- 跋涉：…原野江海を過ぎること。
- 旅行すること。
- 披山蓋世：…勇氣のあること。
- 跋扈：…権力を振ふこと。
- 撥亂反正：…亂を除き正しきにすること。
- 樊衝冠：…怒の甚だしいこと。
- 濞刺：…魚の跳ること。
- 法度：…法則制度。
- 凡例：…書物の大體の例別條目。
- 反哺：…孝行をすること。
- 反目：…仲の悪いこと。
- 反問：…問者。
- 半面之識：…少しの知合。
- 汎濫：…水にあふれること。
- 伴食大臣：…勢力才能のない大臣

- 版圖……領地。
- 斑白……老人。
- 萬機……政治。
- 萬劫……永久。
- 萬象……萬物。
- 萬籟……萬物の音響。
- 萬世不易……永久に變らぬこと。
- 萬里同風……遠近とも風俗が同じであること。
- 萬乘之國……昔は諸侯の大國、後には天子の國。
- 盤桓……ぐず／＼して居ること。
- 軌近……近頃の世。
- 翻雲覆雨……反覆變化極りなきこと。

- 藩翰……國家を守り防ぐもの。
- 藩屏……本家を守り防ぐもの。
- 蠻貊……野蠻人。

七の部

- 匕首……短い劍。
- 比比……頻頻。
- 曠日彌久……空しく時日を過すこと。
- 以火救火……同じことをする。
- 救火投薪……害の益々甚だしいこと。
- 皮肉之見……悟り方の淺薄なこと。
- 批准……天子が臣下の表奏文の後

- 批判……意見を加へること。
- 尾生之信……つまらぬ信義。
- 尾大不掉……下強く上弱く、上のものが下のものを制し得ないこと。
- 披瀝……心の中にある所を少しも隠さずに述べること。
- 披見……ひらいて見ること。
- 飾非……自分の缺點をつくらふてよく見せること。
- 飛將……活動の神速な名將。
- 飛耳長目……遠方のことをよく知ること。
- 美如冠玉……表面の美しいこと。
- 眉宇……人の額。

- 匪躬之節……君のため忠節を盡し一身を顧みないこと。
- 蚘蟥樹……力のないものが力不相應なことをすること。
- 蚘蟥子之授……少しの授兵。
- 悲歌慷慨……悲しみなげいて歌をうたふこと。
- 裨將……副將。
- 微妙玄通……眞理を知ること。
- 鼻祖……始祖。
- 彌縫……缺けた所を補ふこと。
- 貔貅……勇猛の士。
- 髀肉之嘆……平和のため戦功をたて得ないことをなげくこと。

- 只管……只々。
- 匹夫匹婦……奴婢も使つて居ないつまらぬ男女。
- 匹夫之勇……小人血氣の勇。
- 畢竟……つまる所。
- 人非木石……人は無感情なものではない。
- 慣習……人の知らぬ所に居るときの行をつしむ。
- 牝雞之晨……妻が夫のすべきことをすること。
- 彬彬……兩方ともあること。
- 稟性……天性。
- 甕勉……骨折りとめること。
- 擯斥……しりぞけること。

- 繽紛……盛んなこと。
- 效顰……強ひて人の眞似をすること。
- 萍水相逢……旅行中偶然にあふこと。
- 百揆……いろ／＼の計畫。
- 百姓……人民。
- 百穀……いろ／＼のこと。
- 百里才……縣の長官になる才。
- 百世之師……末代までの手本。
- 百發百中……射はづすことのないこと。
- 百折不撓……幾度失敗しても屈しない。
- 百聞不如一見……噂に聞くより

り實地に見た方が確であること。

○百尺竿頭進二步二：工夫の上

工夫を重ねること。

○行二百里二者半二九十里二：始めは容易く、後の困難であることをいふ。

○氷釋：氷のとけるやうにあとを残さぬこと。

○氷炭不同器：君子小人の兩立しないこと。

○道相：せまること。

○父讎不共戴天：父の讎は必ず討つべきである。

漢文詳解研究の力

○不穀：諸侯の自稱。

○不遜：傲慢。

○不肖：愚な人、自分のことを謙遜していふ代名詞にも用ふ。

○不拔：しつかりして居ること。

○不豫：不愉快なこと。病氣。

○不如意：思ふ通りにならぬこと。

○不龜手之藥：ひよりのきれぬ薬。

○布衣：士庶人の官につかぬ者。

○扶持：老人などを介抱すること。

○武辨：武官。

○附庸：諸侯の屬國。

○負笈：遊學すること。

○負荷：父の業をついでその任にたへること。

○俯仰：下を見上を見ること。

○婦人之仁：つまらぬ慈悲心。

○若合符節：たがふ所なきこと。

○腐儒：用に立たぬ學者。

○腐木不可爲柱：愚な人は重職に用ひることができぬこと。

○膚受之懇：利害關係の密接なうつたへ。

○慨然：心を取り失ふこと。

フの部

○覆載：天地。

○夫子自道：自分のことを自分でいふ。

○風聞：噂。

○風刺：あてこすること。

○風塵：従ふ。

○風物：景色。

○風伯雨師：風の神と雨の神。

○風雲之器：機會を得て功名をたてる人。

○風馬牛不相及：無關係なこと。

○富貴不能淫：富貴のためにも心をみだされぬこと。

○諷諫：それとなしに諫めること。

○伏日：夏九十日の間。

故事熟語之部

○伏臘：休日の俗例。

○復辟：再び天子の位に即くこと。

○復命：命令を受けたことを行つて之を報告すること。

○腹心之臣：心を同じくする臣。

○驅湊：あつまること。

○覆轍：失敗すること。

○覆車之戒：前の人の失敗を後の人が見て戒とすること。

○如探囊：非常に容易いこと。

○臨淵羨魚不如此退而結網：空想するよりも實行が大切であること。

○物故：人の死ぬこと。

○物議：世論。

○物色：人相書をまはして、人を探すこと。

○剗舟求劍：ある事に拘泥して融通の利かぬこと。

○文案：机。

○文物：禮樂典章。

○文質彬彬：文と質とが適當にまじつて居る。

○分野：ありさま。

○刎頸之友：生死も共にする親しき交。

○粉壁：白壁。

○聞達：名譽と立身。

○溫故知新：以前にならつたことを

とを時々復習して新しい道理を發明すること。

への部

○平氣虚心：落付いて躁がぬこと
○平地起波瀾：理由のないに事を起こすこと。

○丙夜：午後十二時。(夜)

○兵革：軍。
○兵貴神速：兵を用ひるには迅速にすることが大切である。

○兵貴拙速：兵を用ひるには下手でも迅速にやる必要である。

○柄臣：朝廷で第一の權柄を握つて居る臣。

○鞞鼓：攻め太鼓。

○苗裔：遠孫。

○豹變：善い方に急に變ること。
○豹死留皮人死留名：豹は死後に美しい皮を残し、人は美名を残す。

○渺渺：かすかで遠いこと。
○標榜：門の所にかけてあらはすこと。

○廟堂：朝廷。
○廟社：宗廟社稷。

○颯颯：風が軽く吹くこと。

○飄風不終朝：暴風がながく吹きつゝかないやうに、はげしくやり出すものはながつゞきのしないこと。

○辟易：驚いて御くこと。
○霹靂：雷のはげしいもの。

○別業：別莊。

○別墅：別莊。
○瞥見：ちらと見ること。

○片時：一寸の時間。
○片言隻辭：一言半句。

○拚舞：手をうって舞ふこと。
○便佞：口さきばかり利口なこと

○偏見：かたよつた見方。
○鞭撻：監督しはげますこと。

○修飾邊幅：商人が布帛の兩邊を飾つて高く賣るやうに見かけを飾つて實際以上に思はすこと。

ホの部

○匍匐：手と足とであるくこと。
○含哺鼓腹：人民が天下泰平を樂むこと。

○哺時：午後四時。

○輔翼：たすける。
○輔車相依：互にたすけあつて用をなすこと。

○奉公：國家のためにはたらくこと。

故事熟語之部

○烽煙：のろし。

○捧腹：非常に笑ふこと。
○蜂起：方々に兵亂の起ること。

○風駕：天子の車。
○鳳輦：天子の車。

○蓬頭垢面：髪を亂し垢じみた顔をして居ること。
○蓬生麻中不扶而直白沙在涅與之俱黑：人の性質の善悪はその周囲の人々の感化によること。

○謀臣：參謀。

○鵬程：遠き里程。
○木鐸：世の中を導くもの。

○北面：臣の位。

○牧民：君主。
○墨墨：政治が善くないこと。

○墨守：固く自分の説を守つて動かぬこと。
○暴露：風雨にさらすこと。

○噬臍：甚だしく後悔すること。
○勃勃：盛んなこと。

○本領：大本。
○奔命：人の命令によつてはしりまはること。

○奔走：はしりまはること。
○翻譯：外國語を譯すこと。

マの部

○麻姑搔痒：かゆい所に手がと。

いくこと。

○摩滅……すく消えること。

○磨滅……すり消すこと。

○毛穎……筆。

○妄言……道理にあはぬ言葉。

○孟浪……くはしくないこと。

○細羅……人物を一所に纏めること

○允文允武……文武兩道にすぐれて居ること。

○抹殺……掃ふこと。

○持満……十分に満ちて居るのをもちこたへて居ること。

○瞞着……欺くこと。

○煮豆燃其……兄弟相苦める事。

ミの部

○未曾有……まだこれまでになかつたこと。

○殺身成仁……自分の身を犠牲にして世の中の道のためにつくすこと。

○三折肱知爲良醫……度々困難にあつて経験を長ずること。

○妄自尊大……自分ばかりすぐれて居ると思つて無暗に威張ること。

○掩耳盜鈴……悪事をし乍ら人に聞かれることを恐れ自分

自身の耳を掩ふて見た所が役に立たぬこと。

○名詮自性……名は體をあらはすこと。

○觀者如堵……みる人が堵のやうに立ちならんで見る事。

○矛盾之説……辻褄の合はぬ説。

○無辜……罪のないもの。

○無告……何處へも告げる處のない野民。

○無垢……清淨。

○無慙……慙ぢる心のないこと。

○無盡藏……つきることのない事。

○無偏無黨……中立公平であること
○無爲之治……自然に治まること。
○無何有之鄉……天地の自然を樂むべき所。
○胸有成竹……胸中に成算のあること。

メの部

○名節……名譽節操。

○妙用……巧妙な活用。

○面談……人の面前で語ふこと。

○面語……人と對して語ること。

○面折……人に對してその人の過を責めること。

○面朋……表面だけの交。

故事熟語之部

○面皮厚……恥をしらぬこと。
○剝三面皮……恥を知らぬものにはぢさせること。
○絲絲……ながくつゞけて絶えぬこと。

モの部

○摸稜……兩端を持して決しないこと。

○摸糊……はつきりしないこと。

○朦朧……おぼろげなこと。

○目語……目でしらせること。

○目笑……目と目を見合はせて笑ふこと。

○目送……目で見つめて人を送ること。

○目擊……見ること。
○沐猴而冠……姿だけ人で心は人ではないこと。
○割股贖腹……つまり自分の損害となること。

ヤの部

○野乘……正しくない歴史。

○野無遺賢……賢人は皆官に用ひられて居ること。

○野鶴在雞群……多くの人の中ですぐれて居ること。

○擲楡……手をうつてからかふ事。

○羊腸……山路のけはしくうねつて

- 羊質而虎皮：實のないものが外見を飾ること。
- 羊頭狗肉：上等の品を店頭に掲げて實は下等品を賣ること。
- 陽鳥：日。
- 揚揚：たかぶつた様子。
- 養病：病氣療養をすること。
- 漸入佳境：次第に面白い所になる。
- 藥石：藥。
- 藥餌：藥。
- 藥言：善言。
- 藥石之言：人の非を諫めて改め

- 藥籠中之物：必要な人物。
- 爲山九仞功虧一簣：事が成就しきうになつて居るのにやめてしまふこと。
- 疾病：病氣が危篤であること。
- 護疾忌醫：自分に過があるのに人の諫を用ひないこと。
- 病入膏肓：痼疾の治療できないもの。
- 其久：まことに久しい。
- 輻輳：まげかち。
- 買勇：勇を誇ること。

- 雄飛：威勢の盛んなこと。
- 雄姿：姿の優れたこと。
- 雄才大略：すぐれた材略のあること。
- 指大於臂：末が本より大きいこと。
- 餘烈：餘威。
- 作俑：悪いことを最初にすること。
- 庸中佼佼：普通の人の中で少しすぐれたもの。
- 翼戴：たすけたつとぶこと。

ユの部

ヨの部

ラの部

- 螺鈿：美しい貝殻を種々の器に嵌めこみて飾りとしたもの。
- 羅綺：「うすぎぬ」と「あや」配しすぎることに。
- 老婆心切：人のためにあまり心配しすぎることに。
- 狼藉：物の亂れたこと。
- 狼狽：非常のときに措置を失ふこと。
- 廊廟之器：宰相となる器量あるもの。
- 絡繹：往來の絶えぬこと。
- 落魄：おちぶれること。

故事熟語之部

- 落落：きまりのつくこと。
- 臘月：陰曆十二月。
- 嚼蠟：味のなきこと。
- 以卵投石：物のこはれやすいこと。
- 亂臣十人：國家を治める臣が十人。
- 亂臣賊子：君を弑し、父を弑するもの。
- 治亂之藥石：刑罰。
- 濫觴：ものゝはじめ。
- 揆揆：ぼろ。
- 覽揆之辰：誕生日。
- 贊輿：天子の乗物。

リの部

- 利病：益と損。
- 利用厚生：人民の利益をはかり人民が安樂に生活することができるやうにすること。
- 里正：村長。
- 俚言：俗言。
- 理亂：治亂。
- 梨園：俳優。
- 層隍之才：微細な所にまでゆき届く才。
- 柳營：將軍の居營。
- 流言：無根の噂。

瀏亮……清く明らかなこと。
 六合……天地四方。
 六經……詩書易春秋禮樂。
 六藝……禮樂射御書數。
 階離……衆いこと。
 臨樂……亂れ走ること。
 律令……その國の定めた法。
 林中不賣薪……需用のある所に供給すべきであること。
 綸旨……天子の仰せ。
 綸言如汗……天子の仰せは一度出た以上はかへらぬこと
 輪奐……家屋の高大で美しいこと
 輪郭……周囲の線。
 輪講……順々に講義さすこと。

霖雨……長くつゞく雨。
 臨機應變……時と場合に適當な處置をとること。
 臨幸……天子がその場に臨まれること。
 良匠……技術に長じた大工。
 良冶……技術に長じた鍛冶屋。
 良藥苦於口而利病……諫言は嚴格であるが人の利益あることに喩へる。
 持二兩端……二心を持つこと。
 兩虎相鬪……兩勇が鬪ふことに喩へる。
 握二兩把汗……心配して見ることに喩へる。
 梁上君子……盜賊。

亮陰……諷諭……天子の喪。
 隆準……鼻の高いこと。
 陸車……勢よく走る車。
 閭巷人……民間に居る人。
 凌駕……人を排してその上に立つこと。
 陵夷……次第に衰へること。
 陵谷之變……世の中の事の變遷すること。
 龍顏……天子の顔のこと。
 龍興……天子の興。
 龍駕……天子の乗物。
 龍車……天子の車。
 龍種……名馬、俊才、天子の子孫。
 龍馬……名馬。

探龍領……美利を得るために冒險すること。
 龍頭龜首……大きな船、天子の船
 龍頭蛇尾……はじめだけ盛んで終りは振はぬこと。
 力行……實行を勉めること。
 綠雨……新緑のとき降る雨。

ルの部

流布……廣く及ぶこと。
 儂指……指を屈め、ものを數へること。
 隳逃……細々と逃べること。
 累代……代々。
 累卵……危いこと。

類推……類例によつて推量すること
 以類聚……同じやうなものが同じ所にあつまること。

レの部

令名……美名。
 令聞……よき評判。
 伶人……樂人。
 圜園……牢屋。
 玲瓏……かじやき透明であること
 零丁……志を失ふこと。
 零落……草木の枯れること、人のおちぶれること。
 零碎……細くこはれたこと。
 黎民……人民。

黎明……夜が明けかけて未だ暗いこと。
 了解……道理を明らかにさすること。
 僚友……同僚の友。
 藜藿不知苦……人の嗜好のちがふことにたとへる。
 遯東家……人は自惚れるが他人から見れば、別に大したことはないこと。
 歷階……代々の君主に仕へること
 歷階……一階毎に足を揃へずにいそいで階を昇ること。
 曆日……こよみ。
 輶轍……車の音。

裂帛聲……帛をさくやうな音。
 連署……二人以上のものが姓名を
 連ねてかくこと。
 連枝……兄弟。
 廉直……心が潔白で、正直なこと
 廉恥……心が清く、不正な行を恥
 ぢること。
 運府……大臣の邸。
 輦車……てぐるま。
 輦殿之下……皇居のある地。
 憐閔……あはれむこと。

ロの部

盧瀕……天子の行列。
 路次……途中。

魯魚虎虎之謬……誤寫のこと。
 露見……明らかにあらはす、あら
 はれる。
 陋巷……貧賤なものゝ住む所。
 漏刻……水時計。
 漏斗……じょうご。
 龍斷……市利を獨占すること。
 得隴望蜀……人の慾には限のな
 いこと。
 籠絡……仲間に入れること。
 論議……議論。

ワの部

王法……國王の法。
 王師……官軍。

王佐之才……王者を輔佐するに適
 した才能。
 枉顧……目上の人が訪ねること。
 告往知來……一端を知つて全を
 悟ること。

橫道……邪道。
 橫行……勝手な振舞をすること。
 橫議……勝手に政治を議論するこ
 と。
 橫政……暴政。
 橫目之民……人民
 我心如秤……自分の心は公平で
 あること。
 殃及池魚……理由なく禍にかゝ
 ること。

故事熟語之部終

故事熟語之部

三猪の集

嫁禍……自分の禍を人になすり
 つけること。

轉禍爲福……巧みに禍を處理し
 て幸福にすること。

760

入學試驗問題之部

大正六年度高等學校入學試驗問題

左ノ文章ニ返點及送假名ヲ附ケ且ツ解釋セヨ

(一) 諸葛亮躬耕隴畝。徐庶與亮友善。謂劉備曰。諸葛孔明者臥龍也。將軍豈願見之乎。備曰。君與俱來。庶曰。此人可就見。不可屈致也。將軍宜枉駕顧之。

(二) 凡爲學之初。必立欲爲大人之志。然後書可讀也。不然徒貪聞見而已。則或恐長傲飾非。所謂假寇兵資盜糧也。

(三) 魏徵既卒。帝臨朝歎曰。以銅爲鑑。可正衣冠。以古爲鑑。可知興替。以人爲鑑。可明得失。朕嘗保此三鑑。內防已過。今魏徵逝。一鑑亡矣。

大正七年度高等學校入學試驗問題

(二)下ノ文章ニ送假名ヲ附ケ且ツ解釋セヨ

明道先生、資稟既異。而充養有道。視其色。其接物也。如春陽之温。聽其言。其入人也。如時雨之潤。測其蘊。則浩乎若滄溟之無際。極其德。美言蓋不足以形容。

(二)同前

國家之事。千緒萬端。糾紛纏繆。其利害與終始。豈一朝淺慮之所能定哉。故曰。爲政與用兵異。用兵者。有時乎貴拙速。而爲政者。非巧遲則不能也。

(三)同前

方孝孺不屈於燕王。宗族誅夷。慘及故舊。先儒或非之。余謂不然。人孰不死。與其同草木腐。孰若緣孝孺俱爲忠義之鬼。

大正八年度高等學校入學試驗問題

(一)左ノ文章ニ送假名ヲ附ケ且ツ解釋セヨ。

孔子曰。君子食無求飽。居無求安。敏於事。而慎於言。就有道正焉。可謂好學也已。

(二)同前

兵貴神速一語。豐公用之賤岳。而大有驗。用之長湫。而不濟事。故曰。知彼知己。百戰不殆。豐公雖智。而知彼則暗矣。悲夫。

(三)同前

九日。入棧道。溪水自萬山中來。亂石相排而出。涉溪蹈危岸而行。一路羊腸。循山紆曲。仰觀天光。如在井底。

大正九年度高等學校入學試験問題

左ノ文章ニ送假名ヲ附ケ且ツ解釋セヨ。

(一)責善朋友之道也。唯須懇到切至以告之。不然。徒資口舌。以博責善之名。渠不以爲德。却以爲仇。無益也。

(二)魏主問吳使趙咨曰。吳王頗知學乎。咨曰。吳王任賢使能。志存經略。雖有餘閑。博覽書史。然不效書生尋章摘句而已。

(三)左ノ語句ヲ解釋セヨ。

(イ)胸有成竹 (ロ)廻狂瀾於既倒 (ハ)濫觴 (ニ)背水。

解答之部

大正六年度高等學校入學試験問題解答

(一)諸葛亮躬耕隴畝。徐庶與亮友善。謂劉備曰。諸葛孔明者臥龍也。將軍豈願見之乎。備曰。君與俱來。庶曰。此人可就見。不可屈致也。將軍宜枉駕顧之。

諸葛亮は田舎で田畑を耕して居た。徐庶といふ人は諸葛亮と仲がよかつた。劉備に「諸葛亮は世の中の人々に知られない大人物である。貴方はあつて見たいと思はないか」と言つた。劉備は「それではつれて来るがよい」と言つた所が、徐庶は「あの諸葛孔明は、こちらから面會に行かなければいけない。呼びつきたりなどしては來ない。貴方が出かけて行つて面會するがよい」と答へた。

(二)凡爲學之初。必立欲爲大人之志。然後書可讀也。不然徒貪聞見而已。則或恐長傲飾非。所謂假冠兵資盜糧也。

すべて學問をはじめめる最初に、さつと學問をして立派な人物になりたいといふ目的を立て、から本を讀みはじめがよい。さうでなければ學問をしても無暗に智識を増すことばかりつとめるやうになる。かうなればその得た智識のために高ぶる心を増し、自分のまらがつた所をつくるふやうになり、敵に武器をかき、盜賊に糧食を與へるといふ如く害が益々甚しくなる。

(三)魏徵既卒。帝臨朝歎曰。以銅爲鑑。可正衣冠。以古爲鑑。可知興替。以人爲鑑。可明得失。朕嘗保此三鑑。內防己過。今魏徵逝。一鑑亡矣。

魏徵が死んでから、唐の太宗は朝廷で政治をとるときに歎いて「銅の鏡にむかへば衣冠を正すことができる。古を鑑として今と古を較べて見れば今の世が立派に榮えて居るか、衰へて居るかを知ることが出来る。人を鑑として自分の行を顧みれば、その利害得失を知ることが出来る。朕は今迄この三つの鑑をもつて、自分の過を防ぐやうに心がけて居た。所が魏徵がもう死んでしまつたらう、三つの中の一つの鑑はなくなつてしまつた」といつた。

大正七年度高等學校入學試験問題解答

(一)明道先生。資稟既異。而充養有道。視其色。其接物也。如春陽之溫。聽其言。其入人也。如時雨之潤。測其蘊。則浩乎若滄溟之無際。極其德。美言蓋不足以形容。

明道先生は、生れつき普通の人と違つて居た。その上適當に修養した人である。その顔色を見るのに、その人に接することの穏やかなことは春の日の温く人を

照らすやうである。又その言葉を聞くと、よく人の心に浸みこむことは、よい折々に降る雨が草木を潤すやうである。その蘊蓄は大海の測り知ることが出来ないやうである。その徳の秀でたことは、いかにほめてもたとへることが出来ない。

(二) 國家之事、千緒萬端。糾紛纏繆。其利害與終始。豈一朝淺慮之所能定哉。故曰。爲政與用兵異。用兵者。有時乎貴拙速。而爲政者。非巧遲則不能也。

國家の事業はいろ／＼あつて、ごたく／＼もつれあつて居るから、益があるか害になるか、或は終るべきか、始まるべきかといふやうなことは淺はかな考で一寸考へたゞけではなかく／＼解るものではない。政治をするのと軍事にあたるのとは別である。軍事では、場合によつては、下手なやり方でも速い方がよいこともあるが、政治をする場合には、手間どつても上手にしなければよく治まらない。

(三) 方孝孺不屈於燕王。宗族誅夷。慘及故舊。先儒或非之。余謂不然。人孰不

死。與其同草木一腐。孰若綠孝孺。俱爲忠義鬼。方孝孺は燕王にしたがはなかつたので、その一族悉く殺され、その災はふるなじみの人々にまで及んだ。昔の學者の中には方孝孺を悪くいふ人もあつた。しかし自分は決して方孝孺のやり方を悪いとは思はない。人間は誰でも死なねばならぬものである。草木と同じく空しく腐るよりは方孝孺にならつて忠義のために死んだ方が勿論よい。

大正八年度高等學校入學試験問題解答

(一) 孔子曰。君子食無求飽。居無求安。敏於事。而慎於言。就有道正焉。可謂好學也已。

孔子が「學問あり道理に明らかな人は、美味なものを澤山に食べようとは思はず安樂な住居は住まうとも思はず、すべきことは、はやく片付けてしまひ、注意しつゝものを言ひ、自分の平常の仕事をするてあかず、道徳を修めた人について缺點を正すやうにする。これが本當に學問を好む人といふべきである。」といはれた。

(二)兵貴神速一語。豊公用之賤岳。而大有驗。用之長湫。而不濟事。故曰。知彼知己。百戰不殆。豐公雖智。而不知彼則暗矣。悲夫。

戰爭をする場合には手ばやくするのが肝心であるといふことばがあるが、豊太閤はこのことを賤ヶ岳の戰爭に實行して、非常によい結果を得た。長湫の戰爭にもこれを實行したが、このときはうまくゆかなかつた。だから兵書にも、敵の事情も味方の事情も知つて戦へば、幾度戰爭しても負けなと書いてあるのだ。豊太閤は智者ではあつたが、敵の事情をよく知らなかつたのは残念である。

(三)九日。入棧道。溪水自萬山中來。亂石相排而出。涉溪階危岸而行。一路羊腸。循山紆曲。仰觀天光。如在井底。

九日。かけ橋にさしかつた。谷の水は多くの山中から流れて來、澤山のごろごろした石は押しあつて、つき出て居る。谷を涉つて險阻な岸を歩いて行くと、九十九折の山路が山にそつてうね／＼として居る。空を見上げると、井戸の底に居るやうな氣持がする。

大正九年度高等學校入學試験問題解答

(一)責善朋友之道也。唯須懇到切至以告之。不然徒資口舌。以博責善之名。渠不以爲德。却以爲仇。無益也。

よいことをするやうにすゝめあふのは、朋友たるものゝすべきことである。たゞ

それをする場合には、深切に眞をこめてしなければならぬ。さうでなければ、空しく口をもとでにして、朋友によいことをするやうにすゝめるといふ評判をひろめることが出来るだけで、朋友の方では少しも難有いと思はず、かへつて怨むやうになる。無益なことである。

(二)魏主問ニ吳使趙咨曰。吳王頗知學乎。咨曰、吳王任賢使能。志存經略。雖有餘閑博覽書史。然不效書生尋章摘句而已。魏の天子が吳の使者の趙咨に「吳王は甚學問に通じて居られるか」とたづねた。咨は「吳王は賢人を採用し、才能あるものを使ひ、他の國を攻めとらうと考へ、閑暇があればひろく書籍を讀むけれども學生達が、よい文章やよい句を味ふやうなことばかりして居るまねはしない」と答へた。

(三)(イ)事を處するときは胸中に成算のあること。

(ロ)邪道を正道に引き返へすこと。

(ハ)はじめ。

(ニ)死を決して敵にあたること。

大正六年度東京高等師範學校入學試驗問題

左ノ文ニ句讀、返點及送假名ヲ附シ且解釋セヨ

(一) 曰伯夷伊尹何如曰不同道非其君不事非其民不使治則進亂則退伯夷也何事非君何使非民治亦進亂亦進伊尹也可以仕則仕可以止則止可以久則久可以速則速孔子也皆古聖人也吾未能行焉乃所願則學孔子也。

(二) 季布母弟丁公爲楚將丁公爲項羽逐窘高祖彭城西短兵接高祖急顧謂丁公曰兩臂豈相厄哉於是丁公引兵而還漢王遂解去及項王滅丁公謁見高祖高祖以丁公徇軍中丁公爲項王臣不忠使項王失天下者迺丁公也遂斬丁公曰使後世爲人臣者無效丁公。

大正七年度東京高等師範學校入學試驗問題

(一) 左ノ文ニ句讀、返點及送假名ヲ附シ解釋セヨ。

人之於身也兼所愛兼所愛則兼所養也無尺寸之膚不愛焉則無尺寸之膚不養也所以考其善不善者豈有他哉於己取之而已矣。

(二) 左ノ文ニ句讀、返點及送假名ヲ附シ且右側に圈點アル話句ヲ解釋セヨ。

秦之圍邯鄲趙使平原君求合從於楚平原君欲與食客門下有勇力文武備具者二十人偕已得十九人餘無可取者無以滿二十人門下有毛遂者前自贊於平原君曰願君即以遂備員行矣平原君曰先生處勝之門下幾年於此矣毛遂曰三年於此矣平原君曰夫賢士之處世也譬若錐之處囊中其末立見今先生處勝之門下三年於此矣左右未有所稱誦勝未有所聞是先生無所有也先生不能先生留毛遂曰臣乃今日講處囊中耳使遂蚤得處囊中乃穎脫而出非特其末見而已平原君竟與毛遂偕。

大正八年度東京高等師範學校入學試驗問題

(一)左ノ文ニ直ニ句讀、返點及送假名ヲ附シ解釋スベシ。

中也養不中才也養不才故人樂有賢父兄也如中也棄不中才也棄不才則賢不肖之相去其間不能以寸。

(二)左ノ文ニ直ニ句讀、返點及送假名ヲ附シ且ツ傍線ヲ附セル語句ヲ解釋セヨ。

廉頗居梁久之魏不能信用趙以數困於秦兵趙王思復得廉頗廉頗亦思復用於趙趙王使使者視廉頗尚可用否廉頗之仇郭開多與使者金令毀之趙使者既見廉頗爲之一飯斗米肉十斤被甲上馬以示尚可用趙使還報王曰廉將軍雖老尚善飯然與臣坐頃之三遺矢矣趙王以爲老遂不召。

大正九年度東京高等師範學校入學試驗問題

(一)左ノ文ニ直ニ句讀、返點及送假名附シ解釋ハ別紙ニ認メヨ。

何謂尙志曰仁義而已殺一無罪非仁也非其有而取之非義也居惡在仁是也路惡在義是也居仁由義大人之事備矣。

(二)趙良見商君曰千羊之皮不如一狐之腋千人之諾諾不如一士之譁譁武王譁譁以昌殷紂墨墨以亡君若不非武王乎則僕請終日正言而無誅可乎商君曰語有之矣貌言華也至言實也苦言藥也甘言疾也夫子果肯終日正言執之藥也執將事子。

大正六年度東京高等師範學校入學試験問題解答

(二) 曰伯夷伊尹何如。曰不同道。非其君不事。非其民不使。治則進。亂則退。伯夷也。何事非君。何使非民。治亦進。亂亦進。伊尹也。可以仕則仕。可以止則止。可以久則久。可以速則速。孔子也。皆古聖人也。吾未能行焉。乃所願則學孔子也。

伯夷と伊尹はどうであつたか。伯夷と伊尹とはその行ふ道が同じではなかつた。伯夷は自分の事へるべき君でなければ事へず、使ふべき民でなければ使はず、世の中が治まれば、出て仕へ、亂れて居るときには隠れて居た。伊尹の方は、どの君に事へても君は君である。どの民を使つても民は民であるとして、太平な世でも亂れた世でも出てつかへた。孔子はまたこの二人とちがつて、仕へるべきときに

は仕へ、仕へて悪いときには仕へず、長く仕へるべきときには長く仕へ、はやく去るべきときには早く去つた。この三人の人々はその行ひ方はちがふが、どれも聖人である。自分はまだこれ等聖人の道は行へないが、自分の願としては孔子のやり方を學びたい。

(二) 季布母弟丁公爲楚將。丁公爲項羽逐高祖彭城西。短兵接。高祖急顧丁公。曰。兩賢豈相厄哉。於是丁公引兵而還。漢王遂解去。及項王滅。丁公謁見高祖。高祖以丁公徇軍中。丁公爲項王臣。不忠。使項王失天下者。迺丁公也。遂斬丁公。使後世爲人臣者無效丁公。

季布の同腹の弟の丁公は楚の大將であつた。丁公は項羽のために、漢の高祖を彭城の西にひつめて、短い刀をもつて渡り合つた。高祖は、危くなつたので、丁公をふりかへつて、「賢人同志命のとりやりするのはつまらないではないか」といつ

た。そこで丁公は軍をひきいてかへり、高祖も引きあげた。項羽が滅んでから、丁公は高祖に謁見した所が、高祖は丁公を軍中にひきまはして「丁公は項羽の臣として不忠である。項羽に天下を失はさせたのは丁公である」と言つてとうとう丁公を斬つて「この後、臣下となるものが丁公のまねをしないやうにするのだ」と言つた。

大正七年度東京高等師範學校入學試験問題解答

(一)人之於身也。兼所愛、兼所愛、則兼所養也。無尺寸之膚不愛焉。則無尺寸之膚不養也。所以考其善不善者。豈有他哉。於己取之而已矣。人は身體の全部をどこもかも大切にしているものである。身體全部を大切にしているからこれを養ふのである。僅かな皮膚でも大切にしているから、これを養ふのである。身

體を養ふことのない悪いを考へるのは、ほかでもない、その養の輕重を明らかにするのである。

(二)秦之圍邯鄲。趙使平原君求救。合從於楚。平原君欲與食客門下有勇力、文武備具者二十人偕。已得十九人。餘無可取者。無以滿二十人。門下有毛遂者。前自贊於平原君曰。願君即以遂備員而行矣。平原君曰。夫賢士之處世也。譬若錐之處囊中。其末立見。今先生處勝之門下三年於此矣。左右未有所稱誦。勝未有所聞。是先生無所長也。先生不能。先生留。毛遂曰。臣乃今日請處囊中耳。使遂蚤得處囊中。乃穎脫而出。非特其末見而已。平原君竟與毛遂偕。

一體賢明な人が世の中に處するのは、丁度、錐が囊の中にあるやうなものである。その錐の尖がすぐあらはれるやうに、その才智がすぐ解る。先生は自分の門下に三

年も居られるが、自分のそばに居る人々が先生のことをほめたてたのを聞いたことがない。これは先生には勝れた點がないからである。先生は何も出来ないから残つて居るがいいと言つた。毛遂は「自分は今日、貴方の謂はゆる囊の中にはいいたいと願ふのである。自分をはやくその囊の中に入れてくれれば、錐の柄杓でつきでるやうに、偉大な才智をあらはすのである。錐の尖があらはれるやうにつまらぬ才智をあらはすばかりではない」と言つたので、平原君はとうとう毛遂と一緒に出かけた。

大正八年度東京高等師範學校入學試験問題解答

(一)中也養不中。才也養不才。故人樂有賢父兄也。如中也棄不中。才也棄不才。則賢不肖之相去。其間不能以寸。

言行中正を得たものが、中正を得ぬものを教育し、學才あるものが學才のないものを教育する。それ故、人は賢い父兄のあることを喜ぶのである。もし中正を得たものが、中正を得ぬものを教育せず、學才のあるものが、學才のないものを教育しなかつたならば、賢人があつても賢人たる價值がなく、賢と愚との差が少しも少ないことになる。

(二)廉頗居梁久之。魏不能信用。趙以數困於秦兵。趙王思復得廉頗。廉頗亦思復用。於趙。趙王使使者視廉頗。尚可用否。廉頗之仇郭開。多與使者金。令毀之。趙使者既見。廉頗爲之一飯斗米十斤。被甲上馬。以示尚可用。趙使者還報。王曰。廉將軍雖老尚善飯。然與臣坐頃之三遺矢矣。趙王以爲老。遂不召。

廉頗は趙の使者に、一度に米一斗肉十斤を食べて見せ、鎧を着、馬に乗つて老年

になつても、まだ用ひるに足ることを示した。趙の使者は歸つて王に「廉頗は老年にはなつたが、やはり食事もしつかりする、しかし自分と對坐して居る中に三度も小便に立たれた」と報告したので、趙王はそんなに小便が近いやうでは老衰して役に立つまいと思つて、用ひることをやめた。

大正九年度東京高等師範學校入學試験問題解答

(一) 何謂尙志。曰仁義而已。殺一無罪非仁也。非其有而取之非義也。居惡在仁是也。路惡在義是也。居仁由義。大人之事備矣。何を志を高尚にするといふのであるか。それは心の徳を修め、踏むべき道を踏んで行けばよいのである。罪のないものを殺すのは心の徳にはづれて居る。自分のものでないのに自分のものを自分のものとしてとつてしまふのは人の踏むべき

道を踏んで居ると言へない。悪い心をもてば心の徳を修めることは出来ない。悪いことを行へば踏むべき道を踏んでゆくことはできないのである。心の徳を修め踏むべき道を踏んで行けば、それで大徳ある人としての資格は充分である。

(二) 趙良見商君曰。千羊之皮不如一狐之腋。千人之諾諾不如一士之諤諤。武王諤諤以昌。殷紂墨墨以亡。君若不非武王乎。則僕請終日正言而無誅可乎。商君曰。語有之矣。貌言華也。至言實也。苦言藥也。甘言疾也。夫子果肯終日正言。鞅之藥也。鞅將事王子。趙良が商鞅に面會して「千疋の羊の皮は、一疋の狐の腋の皮に劣つて居る。そのやうに、つまらぬ多勢の人が、はいくと従つて居るのは、一人の學問あり、道徳に明らかな人が直言するのに劣つて居る。周の武王は直言する臣下を用ひて榮え、殷の紂王は逆らはぬ臣下を用ひて亡んでしまつた。貴方がもし武王のやり方

と違はなければ、自分は一日中、直言しても罰を受けないで居てよろしいか」と言つた。商鞅は「昔の人のいふた言葉はうはべを飾る言葉は、美しいだけである真心こめた言葉はいつはりがない。忠言は薬のやうである。阿諛の言葉は疾のやうなものであるとあるが、貴方が本當に一日中忠言を興へてくれるなら、自分のためになることである。自分は貴方の教を受けよう」といつた。

Handwritten notes in Japanese, including the name 'MORIMOTO' and other illegible characters.

大正六年度各醫學專門學校入學試験問題

左ノ文章ニ返點及送假名ヲ附シ且解釋セヨ。

人或可以不食也。而不可以不學也。不食則死。死則已。不學而生。則入於禽獸而不知也。與其禽獸也寧死。

大正七年度各醫學專門學校入學試験問題

左ノ文章ニ返點送假名ヲ付ケ全文ヲ解釋セヨ。

凡爲醫之道。必先正己。然後正物。正己者。謂能明理以盡術也。正物者。謂能用藥以對病也。如此然後事必濟而功必著矣。

Handwritten notes in Japanese, including the name 'MORIMOTO' and other illegible characters.

大正八年度各醫學專門學校入學試験問題

左ノ文ニ送假名ヲ付ケ全文ヲ解釋セヨ。

講説時。只要我口之所言入我耳。耳之所聞返於心。以爲自警。吾講已有益於我。不必問聽者如何。

大正九年度各醫學專門學校入學試験問題

左ノ文ニ返點假名ヲ付ケ全文ヲ解釋セヨ。

韓魏公。臨大節。處危疑。苟利國家。知無不爲。若湍水之赴深壑。無所忌憚。嘗嘆曰。爲人臣者。盡力以事君。死生以之。顧事之是非何如爾。至於成敗天也。

大正六年度各醫學專門學校入學試験問題解答

人或可_レ以_レ不_レ食也。而不_レ可_レ以_レ不_レ學也。不_レ食則死。死則已。不_レ學而生。則入_レ於禽獸。而_レ不知也。與_レ其禽獸也寧死。
人は場合によつては食はずにも居られるが、學問せずには居られない。食はずに居れば死ぬだけのことである。學問せずに生きて居れば、禽獸と少しも違ひのないものになつてしまつて、自身はそれを知らずに居るやうになる。禽獸同然のものとなる位なら、死んだ方がましである。

大正七年度各醫學專門學校入學試験問題解答

凡爲_レ醫之道。必先正_レ己。然後正_レ物。正_レ己者。謂_レ能明_レ理以盡_レ術也。正_レ物者

謂ニ能用レ藥以對病也。如此然後事必濟而功必著矣。
 一體醫者としてとるべき道は、第一に必ず自分の身を正しくして、次に物を正しくするのである。自分の身を正しくするといふのは、充分に道理を明らかにしてそれによつて施すべき手段を手落なく盡すのである。物を正しくするといふのは適當な藥を適當に用ひて、病に對し、之を治療するのである。このやうにすれば療治がうまく出來て、病氣を全快させることが、必ず出來るであらう。

大正八年度各醫學專門學校入學試験問題解答

講説時、只要我口之所言入我耳。耳之所聞返於心。以爲自警。吾講已有利益於我。不必問聽者如何。
 人に講義するときには、自分の口でいふことが自分の耳に入り、耳に聞えたこと

が自分の心に又かへつて、自分の警めとなるやうにしなければならん。自分の講義が自分のためになりさへすれば、何も聽いて居る人がどうであらうとも氣にかける必要はない。

大正九年度各醫學專門學校入學試験問題解答

韓魏公。臨大節。處危疑。苟利國家。知無不爲。若湍水之赴深壑。無所忌憚。嘗嘆曰。爲人臣者。盡力以事君。死生以之。願事之是非何如爾。至於成敗。天也。
 韓の魏公は國家の大變事の場合、不安な場合にあたつは、少しでも國家の利益になることはどんなことでも、早瀬の水が谷に流れこむやうな勢でやり、少しも忌み憚ることがなかつた。あるとき韓の魏公は嘆いて「臣下たるものは全力を盡して